

仁義ある暗殺

絹糸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤羽業の親友にして、筋金入りの極道を実父に持つ男前少女。
名は花槍有粹。

とある事情から暴力沙汰を起こして親友と同じタイミングで停学に陥っていた彼女は、「月を爆破した犯人を殺してほしい」というトンデモ依頼をわりとあっさり受け入れた。

頬に斜め走りの傷。そこいらの男よりも短い髪。親父譲りの鋭い眼差し。凜々しい顔立ち。低いハスキーボイス。引き締まった体。女だてらに高身長。

ズボンを履いただけで性別を間違えられる彼女は、しかし見た目よりも中身のほうがもつと男らしい。

ヤクザの娘が櫛ヶ丘中学校3―Eに放り込まれた時、はたしてどのようなことが起こるのか――。

※この話のカルマくんはヤクザ娘と親友やってるせいで原作より修羅場くぐってます。つまりちよつと強めです。

※ヤクザ娘の見てくれが野郎なせいで。パツと見ボーイズラブっぽいシーンもあるかもしれませんが、一応ヤクザ娘はちゃんと娘です。

目次

本編以外

オリ主に関する情報 (随時更新) | 1

番外編

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』く上く | 5

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』く中く | 10

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』く下く | 17

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』くおまけく

32

本編

第一話：悪童の親友は極道の子 | 34

第二話：はじめまして、ターゲット | 40

第三話：親友だからこそ | 49

第四話：それだけは許さない | 57

第五話：天然毒娘との出会い | 72

第六話：ハニートラップ襲来 | 81

第七話：色女と色男 (仮) | 92

第八話：和解と失恋 | 104

第九話：アウェイでこそマイペースに | 114

第十話：テスト期間 | 126

第十一話：体調不良、フェロモンは良好 | 133

第十二話：中間テスト終了 | 142

第十三話：旅の準備と修羅場のフラグ | 150

第十四話：京都に行くまでも修学旅行 | 156

第十五話：命短し恋せよ乙女 (?) | 169

本編以外

オリエントに関する情報（随時更新）

名前：花槍有粋（はなやり・うすい）

性別：女

年齢：15歳

誕生日：4月14日

血液型：O型

身長：175cm

体重：60kg

体脂肪率：5%

得意科目：国語&社会

苦手科目：数学&英語

趣味：トレーニング

特技：懸賞とか宝くじが滅茶苦茶よく当たる

日課：親父の縄張りの自主的な見回り（カルマと一緒に来る頻度も高い）

所属部活（過去）：帰宅部

好きな食べ物：美味しいもの

嫌いな食べ物：不味いもの

選挙ポスター：友情愛情人情の申し子

容姿

体：腰の位置は高く手足も長い均整のとれて引き締まった体型。胸はBカップ。筋肉質だがムキムキというほどではなく、女版の細マツチヨといったところ。薄皮一枚の下に秘められたインナーマッスルのたくましさは触れた時にこそよく分かる。見ただけでも彫刻作品のようにバランスがきっちりしていて凛々しい機能美を感じさせるが、だからこそ中性的な側面もあり、たぶん全裸で男と遭遇しても見

られたのが後ろ姿だった場合「細身だけど質の良いしなやかな筋肉に覆われた少年の体」としか認識されない。腰にタオル巻いて腕組みしてれば真正面から見られても男で通る可能性あり。柔らかさとかは求めちゃいけない要素。あと姿勢が良い。

髪：カルマより短く杉野より長いクール系のベリーショートカット。色は焦茶で、カラーリングでは出せないような渋味や落ち着きがある。高級な革製品とか猛禽類の羽根みたいなイメージ。髪質はいわゆる『猫っ毛』。

瞳：鋭く切れ上がった琥珀色の眼差しは力強さを湛えている。あまりにも凜々しいもので、たとえば腹が痛いという理由で眉根を寄せているだけでも、何か壮大な悩みを抱えて苦惱葛藤している姿に見えてしまうほど。威圧感と理知的な雰囲気兼ね備えている。

肌：健康的な乳白色。皮膚は顔の分だけでなく体のほうにも大小様々な傷跡が刻まれているが、そのどれもが仁義を通すための喧嘩や行動によってついたものなので当人はマイナスに捉えることは決してない。

顔：右頬に直径5cmほどの斜め走りの傷があり、これは病院で30針縫ったもの。造り自体は中性的（といっても男寄り）で「美貌」と呼べる範疇の整い方をしているものの、凄味やら雄々しさやらで美少女感はゼロである。真顔のときは男前系、笑うと色男系になるイケメンフェイス。傷が顔の邪魔にならずむしろ似合っている。

私服：ボーイッシュとか通り越して男物の商品しか着ない。ちなみに下着も。男装趣味があるからではなく、親父やその情婦や組の若い衆やその他諸々からプレゼントされる衣類が完全に男物オンリーだから。くれる人の数だけセンスも多種多少。デカデカと般若面の刺繍された革ジャンというあきらかにチンピラ臭いものから、アルマーニのオーダーメイドのスーツまで本当に幅広い。家に客が来た時は袴なんかでカッチリ決める。

制服：もちろん男子制服だ。靴はカルマと同じショートブーツ。ブレザーはちゃんと羽織っているしネクタイもしっかり締めている。けどその隙のない身なりによって余計に親分オーラが出てしまつて

いたりいなかったり。着崩すと一気に印象がエロくなる。色男的な意味で。

くスペックく

学力：学校の授業を真面目に受けるだけで学年トップ30からは漏れない程度のまあ優れたもの。これにより一部生徒から『インテリヤクザ』の称号を賜った。

暗殺：向いていない。気配を消して相手を油断させるよりも、凄味を発して相手を萎縮させるほうが得意なタイプ。というか自然と威圧感を放ってしまっている。まず暗殺と相性が悪いので、なんとか自分でも実行できる暗殺スタイルを地道に模索していくしかない。

胆力：天下一品。家によそのヤクザがカチコミしかけてきたり、有粋がヤクザの子ということを知っていてちよっかいかけてきたチンピラと殴り合ったり、街中で堅気に絡んでいるよその組の同業者を見たら自ら成敗しに行ったり、とにかく生傷の絶えない日々をおくってきたので肝が据わりまくっている。拳銃突きつけられるとかナイフちらつかされるくらいなら少しもビビらない。

筋力：腕を使わない腕立て伏せ可能。握力はコツを使わず林檎を握り潰せることから最低でも80kgはあると推測される。なお調子が良い時はCOCグリッパー（握力計測道具）のNo.3（100kg）をクラッシュさせられる模様。背筋力は200kg前後。テクニク無しで金属バットを蹴り折れる程度の脚力。フライパンを素手で折り曲げられる程度の腕力。普通の腹筋運動なら半日ぶっ続けでやってもまだ体力が残っている。女子中学生とは思えない数値の数々はトレーニングと実戦の賜物。自分の体重と同じ重さの砂袋を背負って山の急斜面を駆け上る修行とかしてるから、当然平地で走れば足も速い。

格闘：本領発揮。組の実戦派とか横須賀米軍基地上がりのマツチヨな黒人とかボクサー崩れのチンピラとか不祥事を起こして寺を追放された少林寺拳法の使い手とか、親父の縄張りの歓楽街にたむろする

そういう奴らから対戦・指導と様々な形で手ほどきを受けまくった結果、その師匠たちの誰とも似ていない我流の格闘技術を得るに至った。ついでに路上喧嘩が多いので基本的に卑怯な手は卑怯なものと思わず当たり前の感覚で混ぜてくる。ただし人質なんかは絶対にとらない。殴る蹴るから関節技まで選り取りみどり。素手でナイフに挑む時の戦い方、素手で鉄パイプに挑む時の戦い方、など用意できる戦闘パターンも豊富。経験＋才能＋努力で実力は折り紙つき。

覚醒：”とある条件”を満たした相手と戦う場合においてのみ、脳味噌がリミッターを振り切って全力モードに突入。普段できないような動きが平然とできたり、骨が折れても痛みを感じなかったり、自分の身の丈の倍はあるような大男と組合って力負けしなかったりするようになる。この条件には親友である赤羽業が関係している模様。そしてお察しの通り、覚醒が終われば襲いかかってくる倦怠感と疲労度はとんでもない。実はただブチギレしてるだけ。

～その他～

家柄：薬と銃は流さない昔ながらの極道一家『花槍組』七代目組長の実の娘。主な収入源は違法賭博場経営やらみかじめ料やらキャバクラ経営やら建築業やら闇金融やらトラブル解消やら、とにかく色々。縁日の日は下っ端が屋台のテキヤにだってなる。というか抗争なんかがない場合は普段からたこ焼き屋とかやっている若い衆もいる。家自体は大きな平屋建ての日本家屋。組の者からは”お嬢”と呼ばれる。一応、日本有数の真つ当なヤクザ。

フェロモン：イイ女を惹きつけるフェロモン。花槍家の男に代々伝わる特異体質のようなもの。何故か今代は女の有粋に遺伝してしまった。支配者の遺伝子ならぬ女たらしの遺伝子。平常時はある程度コントロール可能だが、発熱などの体調不良が発生した際はコントロール不能及びフェロモンの爆発的な増加が起こる。

番外編

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』〜上

〜

花槍組の縄張りで最近悪名を轟かせ始めた不良グループがいる――という噂が有粋の情報網に入ったのは、中学二年のゴールデンウィークでのことだ。

なんでもそのグループというのは格闘技の経験者や有段者で構成されており、そうではないメンバーも体格の良い猛者揃い。

同じ不良だけでなく一般人にも執拗に絡んでは好き勝手に暴力を振るい、そのはた迷惑な行動に歓楽街を行き来するサラリーマンや夜仕事のお姉さま方も悩んでいるという。

いざ補導せんとおまわりさんが出張ろうにも、彼らはナイフや鉄パイプを片手にバイクを乗り回したりする危険極まりない集団。

一度ならず二度までも負傷させられた頃には、交番のおじさん達もすっかりすくみ上がってしまい不良グループを野放しにする状態。

気持ちとは分かるとはいえ、正義の味方たる警察官の端くれのそんな姿を見せられてしまったっては近隣住民も失望を隠せない。

そして思うことだろう。
警察官が頼りにならないならば自分達でどうにかするしかない、と。

しかしそれは理想像。

実際のところ一般人の自分達にあの極悪非道な集団をどうにかこうにかしてやれるだけの力はない。

暴力という意味でも、権力という意味でも。

だから彼らはそれが出来る人間に事態の解決を任せることにしたのだ。

すなわちヤクザ。

非合法の世界に生きる揉め事処理人たちへと。



「……で、組に持ち込まれたその『お願い』が、何故か有粋一人に回ってきたってワケ？」

あらかたの事情を説明し終えれば、目の前でイチゴ煮オレをすすっている親友は呆れ返って半笑いになった。

無理もない、と自分で思いながら有粋は眉根の寄った渋い顔で頷く。そんな表情も相変わらず男前だ。

「ああ。本当は若い衆に持ち込まれた話だったんだが、聞きつけたじーさんが『われの通学路から近いじやろう。ちいど行ってさくつと片付けて来いよ』なんてアタシに言っちまったもんだから……」

「相変わらず容赦ないお爺さんだね。有粋のこと、孫娘じゃなく孫息子だっと思ってんじゃないの？」

放任主義を通り越して荒場に孫を派遣していくそのスタイルに、さすがのカルマも口元を引きつらせた。

憎しと思っただけでそうしているわけではない。むしろ信頼の証。この子ならば不良グループの一つや二つ懲らしめて戻って来られると、そう考えているからこそ彼女の祖父は有粋へとこの話を持ちかけたのだろう。

それにしたって随分と豪気な男だ。さすが花槍有粋の祖父といふべきか。普通は義務教育すら終わっていない子供を悪漢妖婦のひしめく夜の歓楽街へと送り出そうとはしない。

それがたとえ、自分の育て上げた息子の若い頃に瓜二つの男前な容

姿をしていて、積んできたトレーニングの果てにコンクリートブロックを回し蹴りで粉碎するほどの猛者と化した子供でも。

「で、きつそく今夜行くつもり？」

カルマは座布団の上にあぐらをかいたまま、上半身だけ前に傾けてちやぶ台の煎餅へと手を伸ばす。その様子に他人の家にいることの緊張感など微塵も感じさせない。

それもそのはず。3歳の頃から有粋と付き合いのあるカルマにとって、花槍邸は第二の家と変わらぬ慣れ親しんだ場所。

泊まろうと思えば用意するまでもなく自分用の布団や歯ブラシが準備されているようなこの家で、緊張感を持つ瞬間といえればよそのヤクザが乗り込んできた時くらいだ。

「もちろん。無駄たア思うが一応説得してみて、案の定こじれた場合にや実力行使だな」

「それいつものパターンじゃん。で、何時出発？」

「……テメエもついてくる気か」

「逆に聞くけど、その話しといて何で俺がついて行かないと思ったのさ」

カラカラと笑いながら指先に付着した煎餅の破片を舐め取れば、有粋は「それもそうさなア」と納得したように溜息を吐く。

どちらにせよ、見回りには頻繁について行っているのだ。今さら彼女がカルマの同伴を認めぬ理由もあるまい。

花槍有粋と赤羽業が出会ってはや10余り1年。二人で幾度となく死闘乱闘共闘をくり抜けてきたのだ。

二人一緒につるんでいる時は、血に濡れようが泥に塗れようがいつだって楽しい。



その日、本条弥人と天木武宏が夜の歓楽街へと繰り出した理由は、なにも彼らが非行に走っているからではない。

完全に走っていないかと聞かれればそうでもない生活をしている二人だが、今回ばかりは真つ当な訳がある。

先日、天木武宏がお氣に入りに認定しているダーツバーの店長が、最近この歓楽街を中心に暴れ回っているという不良グループに怪我を負わされたのだ。

いわばその仇討ち——というほど大それたものではないと本人は言うかもしれないが、とにかくそういった要因があつて彼らはこの歓楽街へと足を踏み入れることに決めた。

何故ダーツバーの店長と親交のない本条弥人まで随伴しているのかと尋ねれば、多分「なんとなく」とでも答えるのだろう。

親友にして悪友たる武宏が暴れる氣でいるなら、それに付き合うのがつるむ相手としての筋というもの。

それに今は歓楽街だけを拠点にしているからいいものの、そのうち不良グループが調子づいて規模を拡大してしまえば、両親やクラスメイトたちまで被害を喰う時がやって来るかもしれない。

ならば今のうちに手を打ってしまうのが吉。

そんな訳で馴染みの薄いネオン街へとやって来た彼らだが、さすがに一発で不良グループが引つかかるとは考えていなかった。

それでも。たとえ今日だけで見つけることができなくても、明日も明後日も通っていればそのうち遭遇できるはず。

そう意気込み、長期戦の覚悟を胸に、「まずは情報収集から」くらいの軽い気持ちで初めて声をかけたいかにも家出少女っぽいお姉さんが……。

「——ああ、そいつらなら今さつき向こうの路地裏でたむろつてたよ。

今日は通行人を手当たり次第にぶん殴ってくんだった」

そんな証言をしてくれた時、あまりの運の良さに思わず二人して顔を見合わせたのも仕方のないことである。

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』く中

吸い込む空気が心なし腐っている。

そこら辺に打ち捨てられた生ゴミの臭いか、壁際に放置されている猫やネズミの死骸の臭いか、浮浪者達が昼間に引っ掛けていった小便の臭いか、酔っ払いが胃の中身を吐き下した臭いか、あるいは今、この中でたむろしている男達の間性が放つ臭いか。

踏み込んだ先の路地裏の奥のまた奥。

繋がっていた場所はどこかの寂れた小さな廃工場で、鼻につく臭気の酷さに弥人も武宏も思わず顔をしかめた。

建物の前の地面は何ともつかぬ汚れの数々で埋め尽くされ、その中に時折血痕も混じっている。

転がっていた小石をそこに向かって蹴飛ばせば、カラカラと地面をすべっていった小石にはべったりと血が付着した。

「まだ真新しい。流れてから一時間も経過していない血の痕だ」

「この大きさじやかなりの量だぜ。引きずった痕跡もあるってことは、ここで殴った誰かを廃工場の中に連れ込んだってことか」

推理する二人の口調こそ冷静だが、弥人はあどけなさの残る整った顔立ちに剣呑な色を浮かべ、武宏はプレイボーイめいた軽薄な面貌を不穏に歪ませている。

二人とも、決して気長な性格ではない。自分が馬鹿にされた時の沸点もさほど高いわけではないが、もっと低い位置にあるのは非道の輩を目撃した時の沸点。

今回は犯行現場を直接見たわけではないが、既に己の知人（弥人にとって悪友の知人）を害されている事実に加え、拠点と思しき場所の手前であきらかな暴力沙汰の証拠を視界に入れてしまったという

トドメ。

要するに二人とも、とつづくにかなり腹が立っていた。

靴底が地面とこすれてノイズのような音を奏でる。

どちらからともなく廃工場の中へと伸ばされた足取りは重く、しかし臆している様子はない。

ただ、見ている者がいれば身震いしてしまいそうな威圧感だけが、彼らの背中には確かにあった。



「路地裏奥の廃工場、か。だいぶと寂れた場所を拠点にしてやがらア」

二人にとっては己が庭と同じ、見慣れて来慣れた歓楽街へと足を踏み入れてから三十分後。

聞き込みの末になんとか件の不良グループについての情報を入手した有料とカルマは、むせ返りそうな臭気に満ちた劣悪環境の路地裏をこれといったリアクションも無しに突き進んでいる最中だった。

臭いと感じないわけではないが、こんなものは昔クスリ漬けにした男女に格安の料金で体を売らせまくる商売で荒稼ぎしていたゲス野郎の店に乗り込んだ時に比べればマシなほうだ。

覚せい剤の中毒者からは独特の体臭が放たれる。

風呂の残り湯からもほんのりと嗅ぎ取れるほどの、ケミカルで甘酸っぱい香り。

俗に『シャブ臭』と呼ばれるそれが何十人分と狭い建物に密集して、なおかつ赤白黄色に透明と多種多様な体液のスメルまで交わってしまえば、それはもう臭いなんてものを通り越して刺激物の域だ。

あの二重の意味で不愉快な香りを思い出してしまえば、まだこの路

地裏は耐え切れる範囲内。

よって有粋もカルマも表面上は平然とした表情のまま、途中で厄介な人種に絡まれることもなく無事に廃工場へとたどり着いた。

「へー、ここが不良のお兄さんらのアジトか。こんな汚いトコ溜まり場を選ぶなんて、ひよつとしてマゾ？」

本人たちと顔を合わせる前から皮肉るレベルの高い煽り芸を披露するカルマ。カルマは下品な言葉はあまり口走らないが、挑発の類は中学生離れして上手い。

もちろん今は本人たちに言い放ったわけではないので、活きの良いリアクションは返ってこないが。

「ヘロイン中毒者か麻薬中毒患者なんじゃねエのか。頭イツちまつてりや、臭いなんざわからねエだろうよ」

「あー、またそのパターンか。有粋の親父さんが禁止してるのに、薬流して稼ごうって奴は全然減らないね」

「それで薬物良いしちまつた馬鹿が行き過ぎた暴力沙汰起こしや、また組の連中の出番だ。堅気守るのがウチの役目たアいえ、決まり破る手合いがこうも多いとさすがに溜息出ちまう」

渋味のある焦茶色の頭髪をガシガシ掻き乱して、しかし発言とは裏腹に、有粋は溜息など吐かなかった。

呆れを主張するような表情の中に、ほのかに混じる自責の色。

父親から「女子供は守るもんだ」と教えられて育った彼女は、基本的に性格など関係なしに未成年と女性のほとんどを庇護対象として見ている。

そんな彼女だからこそ、例えカルマから見れば人でなしのクズでしかない連中でも、『そこまで堕ちてしまう前に止めてやれなかったこと』に無意識に責任感を抱いているのだろう。

もちろん他人を理不尽に傷つけた以上、忠告を無視されれば有粋は

手加減などせず奴らをぶちのめす。

しかし男らしいがゆえに責任感も人並み以上の彼女は、どうしてもそういった葛藤を捨てきれずにいる。

あるいは昔から変わらぬその性質こそが、彼女を義理人情に厚い侠客たらしめているのかもしれない。

「……過保護なら俺だけに発揮してりやいいのに」

唇を尖らせて小さく呟いた。

どこの馬の骨ともわからん連中が、自慢の親友から多少なりとも惜しまれている。そんな事実には微量の不満を覚える。同時にそういう部分に「さすが俺の親友」と自慢したい気持ちも湧いてくるので、カルマは内心ちよつと複雑だった。

さて、そろそろ中に入ろうか。

そう考えてカルマが両指を鳴らし、有粋が靴紐をきつく結び直したその瞬間だ。

「いやあああああああつ!!」

絹を引き裂いたような女性の甲高い悲鳴が、中から響いてきたのは。

「カルマ!」

「わかってる。さっさと行くよ」

門の側に回るのも億劫とばかりに高い塀を二人して飛び越え、廃工場の敷地内へと入る。

そのまま勢いを緩めることなく疾走。ボロっちい建物の裏口には南京錠がかけられているのが遠目でも分かったので、有粋は近くの窓を蹴破って侵入するほうが早いと判断。

瞬時に考えを実行すべく地面を蹴り上げようとすれば、こちらの思

惑を察したららしいカルマが先んじて窓ガラスに片足でのミサイルキックをぶちかました。

バリインツ、と粉々に砕け散ったガラスの破片がコンクリートを打つ。

そのまま建物内部へと余裕で着地を決めたカルマに二秒遅れて、有粋も窓枠を飛び越え降着。

「やめて、離してええええっ!!」

「! そっちか!」

3メートルほど廊下を突き進んだ先にある部屋の中から先ほどと同じ女性の悲鳴が耳朶を貫いた。

有粋は常人なら瞬間移動と見紛いそうな速さで扉へと駆け寄り、ドアを破壊しかねない勢いで乱雑に押し開く。

「——ッ!」

そこにいたのは着衣を見出し血を流し半狂乱で泣き叫ぶ女性と、そんな女性を押さえつける中高生くらいの少年の二人組で。

片方の少年の手に何か液体の入った怪しい注射器を見つけた瞬間、有粋は躊躇うことなくそちらの少年へと回し蹴りを決めた。

「おっと!」

しかし茶髪にピアスとどこか軽薄な印象を抱かせる容姿をしたその少年は、鉄パイプ数本くらいなら真つ二つにへし折る有粋の蹴りを腕をクロスさせる形で見事に防ぎ切った。

常人ならば骨にヒビが入っていてもおかしくはない威力を受けた少年の腕は、しかしびくともしていない。

(十字受け——この兄ちゃん、空手家か)

足首を掴まれる前に即座にもう片方の足で少年の腕を蹴り、それを足場にする形で距離をとって着地。

有粋の相手をするために女性から離れざるをえなかったのか、少年もまた立ち上がり、こちらを隙のない眼差しで見つめながら構えをとっていた。

その構えが空手ではなく合気道のもの、いわゆる右半身だったもので、有粋は少年をただの空手家ではなくオールラウンダー型の格闘家であると認識を改める。

注射器は既に少年の手から離れて部屋の隅っこに転がっていた。

「うん、痺れちまいそうなほど見事な蹴りだ。なるほど。あいつら弱すぎだと思ったら、チームの頭はアンタか」

「そっちの赤髪も体幹にブレがないぜ。……どっちとやる？ 武宏」

「こっちの色男」

「オーケー。なら俺は赤髪のほうだ」

錯乱したような様子だった女性は乱入者の存在でついに脳味噌がキャパオーバーを起こしたらしく、全身から力が抜けてぐったり意識を失っていた。

そんな女性の体を地面に優しく横たえ、自分の上着をかけてやるもう一人の少年。

それを見た有粋とカルマが違和感に眉をひそめる。

（あいつら？ チームの頭？ それにあっちの兄ちゃん、どうも不良って風にあ見えねエ。ひよっとして何か勘違いでも起こってるのか？）

（なーんか噛み合わないよね。でもあっちの女の人は泣き叫んでたし……ああもう、いいや。向こうだってやる気満々なんだから）

——話し合いは相手をぶっ倒した後で良い。

物騒な考えと共に首を鳴らして、カルマは黒髪の少年と、有粋は茶髪の少年と対峙した。

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』く下

赤髪の少年の動きを詩的に例えるならば、『散花のように軽やか』で『風切羽がごとく鋭い』ものだった。

繰り出される手足は攻撃としての威力を発揮していながら、躍動感のある身のこなしはさながらブレイクダンス。

殴る蹴るの行為を野蛮と感じさせない見栄えする戦い振りは、こんな寂れた廃工場などではなく、いつそアリーナで観客にお披露目して金でも取ったほうが良いのではないかと思わせる。

カポエイラにテコンドーにマーシャルアーツにサバットにキックボクシングに花架拳……他に何が混じっているのかはさすがの弥人にも判別つかないが、とにかく多彩な蹴り技と忘れた頃にやって来る手技を駆使しての軽快で華麗な戦闘。

「有粋が言ってたんだけど、足の力って腕の4〜5倍あるんだって。それならブーツ履いて思い切り振るえば、金属バットなんかよりもっと凶器になると思わない？」

ケイシャーダー——カポエイラにおける顎への蹴りを放ちながら、少年はマイペースにこちらへ雑談まで吹っ掛けてくる。

有粋というのは武宏と戦っている焦茶髪の二枚目のことだろう。上半身を仰げ反らせ、脳震盪を狙ったその素早い一撃を避けながら弥人も冷静に応じる。

「蹴り技は使い続けると消耗が激しいぞ」

「大丈夫。足上げるのに疲れたら逆立ちしたまま戦うし」

「クリステイ・モンテイロかお前は」

冗談とも何ともつかない少年の言葉に、危うく毒気を抜かれそうになった。咄嗟に出したゲームキャラの名前は通じなかったようで、少年からの返答は無い。

次いで繰り出される少年の横蹴りヨブツチャギを最低限のバックステップで回避。

踵に壁が当たったのを逆に好奇とみなし、陸上の要領で平地より早いスタートダッシュを決める。

一瞬で懐に潜り込み鳩尾めがけてストマックブローを放つが、軸として地面に接していた片足だけで前方空中回転（いわゆる逆バク宙）をしてこちらの頭上を飛び越えるという荒業で避けられてしまった。

ワイヤーロープで天井から吊られているみたいないな機動力である。

自分も攻撃を喰らいはしないが、あちらも攻撃を喰らってはくれない。

「よっとー」

そのまま地面に着地するのではなく、途中で壁を蹴ってこちらへ跳躍するというスタントマンじみた動きで金的に靴の裏をヒットさせられそうになる。

しかし大胆な攻撃ゆえにかわし易いだろう。そう踏んで利き腕で足を払い落としたあと、空中で身動きのとれない相手にキツめの一発をお見舞いしてさっさと片付けるつもりだった。

しかし。

（ツ！…こいつ、蹴りの軌道を途中で変えやがった！）

金的狙いがまばたき一つ分の時間で顔面狙いへと方向を変えられていることに気づき、弥人は次の一手を反撃ではなく防御と瞬時に決定。

既にギリギリのところまで迫っていたショートブーツの爪先を上段受けで止め、恐らく今のは囿でこちらが本命のつもりだったのだろ

う、肺のあたりを狙ったもう片方の足による蹴りも中段下払いで見事にいなす。

弥人は空手を専門に打ち込んでいるわけではないが、武宏とつるんでいるうちに彼の技を多少なりとも使えるようになっていた。

だが、払っただけの右腕はともかく、蹴りを受け止めたほうの左腕は表面が赤くなってしまっている。

鉄板でも仕込まれていたら骨にヒビが入っていたかもしれない。相手が良識のある不良のようで良かった。

(……いや、無差別に一般人を暴行するような不良グループのメンバーに良識って表現は可笑しいか。ここまでやれるようになるのに相当努力したんだらう。なのに何で、あんな弱つちい上に腐りきった奴らと組むような真似を)

先程武宏と二人でぶちのめした不良グループの雑兵連中を思い浮かべつて、弥人は湧き上がってくる苦々しい気持ちを胸中で噛み殺す。

狭い場所ではやりづらいと部屋を出て行った武宏と有粋なる少年も、今頃こちらと同じように一進一退の攻防戦を繰り返しているのだろう。

ならば弥人も手を抜くわけにはいかない。この少年に堕ちてしまった理由を聞くのは、はっ倒して地面とキスさせた後だ。

「お兄さん、俺の攻撃ごとごとく防いでくるねー。……顔だつて悪くないんだから、それだけ強けりや無理やり襲わなくなつたって女の人に結構モテるでしょ？ 何で薬まで使つて手籠にしようとしてたのさ」

今度こそちゃんと床に着地した赤髪の少年。

音の鳴らない着地は羽を落としたみたいに軽やかで、弥人は少年の周りの空間だけが無重力だと錯覚しそうになった。

振り向き様になされた少年からの問いかけに、弥人はしばし呆気に

とられる。

「いや……何を言ってるんだ？」

「さつき茶髪のお兄さんと一緒に床に押さえつけてたじゃん。女の人」

「っ——お前らの仲間に襲われかけたあの女性が錯乱して自分の体を引っかけだしたから、それを止めようとして抑えただけだ」

「じゃああの注射器は？」

「不良どもが使ってた。近くに落ちてて、半狂乱のあの女性が手に取っちゃまったから危なっかしくて取り上げたんだよ」

いわれのない疑いに怒りを感じつつ淡々と返せば、少年は「やっぱりかあ」と天を仰いだ。

今なら隙を突いて一撃叩き込めるかもしれないが、どうにも様子がおかしい。

うんざりしたような表情で溜息をこぼす彼は、薄々感じていたことではあったがやはり極悪非道な不良集団の一員には見えなかった。

「俺も有粋も勘違いしたワケだし、まあお互い様ではあるだろうけど……お兄さん」

「何だっつてんだよ」

「俺がつるんでるのは有粋だけで、こここの不良連中とは関わり無いから」

「……………は？」

あっけらかんと言い放たれた台詞は、この状況の意味を根底から覆すもので。

思わず口をあんぐりと開ける弥人に、少年は半笑いで後頭部を掻いた。

「いやあ、この喧嘩が始まる前からそんな気はしてたんだけどさ。お

兄さん気が立ってるみたいだし、ぶちのめしてから説明したほうが早いかなど思ってる」

「オイ」

「でも予想より強くて相打ちするのさえ時間かかりそうだから、とりあえず作戦変更」

あまりの自由っぷりに真顔になった。

この少年、間違いなく息をするように人を振り回す人種だ。

「それに」と、少年は今までの気楽な笑みを一転させ、どこかゾツとする冷たい眼差しで女性をみやった。

喧嘩に巻き込まないようにと弥人の上着をかけたまま壁際に寝かされたその女性は、一見すると気絶しているようにしか思えない。

実際、弥人も目の前の少年に意識を注いでいる時は気付かなかつたが——よくよく見れば体や表情が妙に強張っている。

狸寝入りだとすぐに分かった。

「肌は薬のやりすぎでボロボロ、指には年少リング。極めつけは履いてるショートパンツの内側に仕込んだカミソリの刃。そんなお姉さんが不良にやられかけただけで取り乱すなんて、なーんか怪しいよねえ？　そもそも本当に襲われそうになつてたの？」

「カミソリ？」

女性が履いているショートパンツの裾をじつと凝視すれば、確かに少年の言う通り、四角形の薄っぺらいものを隠しているような形がほんの僅かにボトムスの表面を押し上げている。

それにしたって本当に少しの膨らみだ。たった数秒視界に入れただけの女が隠し持った武器を見抜く観察力には、弥人も舌を巻くしかない。

もつとも彼とて、有粋と少年があの場合に乱入して来なければもう少しで発見していただろうが。

「……錯乱する演技のために、ネイルアートまで無駄にしたのに」

舌打ちと共に呟いて、女はのそりと起き上がった。

弱々しかつた表情は荒んだ不機嫌顔になり、搔き毟った際に間に潜り込んだ赤を余分な爪ごと噛みちぎって床に吐き捨てる有様は、洋画の娼婦にも引けをとらないスれた雰囲気を醸し出している。

ぺちやつ、と。

唾液と共に口内から吐き出された爪の欠片が弥人と少年の丁度中間あたりを汚した。

「言つとくけど、襲われかけてたのは本当よ？ 私の自業自得だけど。チームの奴から買った脱法ハーブの代金払わないで逃げようとしたら、この前でぶん殴られて連れ戻されて、後はお察しの通り。最後までされる前にその黒髪の坊やと茶髪の坊やが突撃かましてくれたから、どさくさに紛れてこの部屋まで逃げてきたの」

ティントバーで紅を刷いた唇で夜鷹めいて笑い、女はあぐらをかきながら壁へともたれかかる。ふてぶてしい態度が妙に様になっていた。

ズタズタに引き裂かれてほとんどボロ布と化したチュニツクから覗く腕には注射痕が斑点みたいに散らばっている。

それが人にされたものではなく自分でやったものだと思えば、女の印象は哀れな被害者から行き過ぎた非行娘へと変わり果てた。

「ああ、今は脱法ハーブじゃなくて危険ドラッグって名前なんだっけ。壁際に転がってる注射器の中身は覚せい剤よ。ドサクサに紛れてくすねちやつた」

そう茶化してウインクすれば、透明マスカラとホットビューラーでカーブを造ったまつ毛がパサリと揺れる。

悪びれない女の開き直った仕草に、弥人は困惑の表情で尋ねた。

「アンタ、何でわざわざ襲われたフリなんか……」

「時間稼ぎ」

「は？」

「チームの奴らぶつ倒して脅しかけたら、アンタらさっさと帰っちゃうでしょ？ 珍しくお人好しっぽい顔してたから、錯乱した女の演技してりやあ私が落ち着くまで付きつきりになるかなって」

クスクスと笑う女の言い分は理解できる。

が、どうして時間稼ぎをする必要があるのかは分からない。

気絶させた男たちは最低でも一時間は目を醒まさないだろうし、警察を呼んだって身柄を拘束されるのは薬物をやっているこの女も同じ。

ますます胡乱げな色を強める弥人に、カルマはどこか眩しいものを見るような目を向けた。

「お兄さん、こういうトコ 歓楽街あんまり来慣れてないでしょ」

「……だからどうしたって言うんだ」

「こういうタチの悪い不良グループのバックには、大抵悪質なヤクザがついてる。花槍組の縄張りに手を出すような奴らだから、たぶん出来たばっかの暴力団とかで大した規模はないと思うけど」

それとこれとに何の関係がある、とでも言いたげな様子で眉根を寄せる弥人に、少年は構わず続ける。

「要するに用心棒ってやつかな。ケツモチ代って言って、暴走族とかカラーギャングの類から毎月金銭を支払って貰って、よそのグループとそいつらがトラブった時には武力なり人脈なりで介入してくれるってシステム」

「……オイまさか」

そこまで聞いたら流石に察してしまふ。

更なる面倒事への予感に頬を引きつらせる弥人に、それで正解だと告げるかのごとく女は不遜に口元を歪ませた。

「本当はこの時間帯に、現金せびりにヤーさん達がやつて来る予定だったんだ。リンチ確定の私だけど、チームへ大打撃与えたアンタと茶髪のにーちゃんをヤーさんに差し出したのが私だと分かれば温情下るかもしれない。ね、私の為にちよつと怪我してくんない？」

あんまりな言い分に激情型ではない弥人もむかつ腹が立った。

相手が女という性別でなければ、きつと数秒前にぶん殴ってそこらじゆうに胃液をぶち撒けさせるくらいはしている。

同時に、さすがにヤクザはマズイという焦りも感じていた。

今まで戦ってきた不良は鉄パイプか金属バットかちやちなナイフか、いたとしてもスタンガンを自慢げにひけらかして迫ってくるようなレベルの者しかいなかった。

だがヤクザともなれば下手すれば拳銃を持っているはず。

迫り来る刃物は避けられても、迫り来る銃弾は避けられない。

ノーコンが一人か二人しかいなければ捌ける自信はあるが、数が多ければ最悪だ。適当な発砲でも数を打てば当てられてしまふ。

（迷ってる時間は無い。こうなったら外で戦ってる武宏連れてさっさと撤退だ）

優秀な頭脳は悪手ではなく戦略的撤退を推奨。

それに逆らうことなく、弥人も建物の外で喧嘩の真っ最中だろう武宏に声をかけるべく部屋のドアノブへと手をかけた。

途中で少年の存在を思い出し、ついでに忠告しておく。

「何の用があつてここに来たかは分からないが、さっさと有粋とやらを連れて帰ったほうがいいぞ。ヤクザ相手じゃちよつと分が悪い」

「忠告どーも。でも心配いらないよ」

「……さすがに足技で銃弾はどうか出来ないと思うが」

「あはは。俺もそこまで自惚れるのは無理かな」

端正な顔立ちに飄々とした笑みを浮かべる少年。

恐怖で頭が可笑しくなるような腰抜けには見えないし、自分の実力を銃弾に勝てる時まで読み間違えてしまうほどの馬鹿にも見えない。

それでいて余裕綽綽の態度を続けるならば、本当に大丈夫だと信じていいのだろうか。

渋面気味に思考する弥人の目の前で、少年はポケットから取り出した最新型スマートフォンをひらりと強調するように振ってみせた。

同時にびよこん、と小悪魔めいたツノとシッポの生える幻覚が見えた気もする。

「この溜まり場の情報、見つけた時点でこっそり有粋のおじいさんにリークしちゃった。『ヤバそうだったら助けに入るから孫には秘密でどこに向かってるかメールくれ』——なーんて出発前に頼まれたし」「はっ。だから何だっつてんのよ」

少年の言葉を聞いた女が、馬鹿にするような失笑と共に声を吐き出した。

「ジジイが一人増えたところで、肉壁にだつてならないわよ」

「いや、あの人の分厚い筋肉なら壁どころか肉の要塞くらいにはなると思うけど……そうじゃなくて」

自分で入れたツツコミに重ねて自分でツツコミを被せるという呑気なことをしでかしつつ、いま言うべきはそうじゃないと頭を左右に振る。

恐ろしいほど緊張感のない少年だ。

「俺とつるんでたもう一人の奴、フルネームは花槍有粋っていうんだ」
「…………へ？」

「ここら一体を取り仕切ってる極道の名前は、もちろん知ってるよね？」

につこりと。

その表情のまま歩いていけば芸能事務所から即戦力としてスカウトがかかりそうな、素晴らしく魅力的で、それゆえ薄ら寒い怖気を感じさせる笑みのまま少年は小首を傾げた。

女のリアクションはというと、目を最大限までかつ開いて体ごと固まったあと、そのまま顔色だけがどんだん青くなっていき…………。

「お、終わった……………」

諦念と絶望あふれる形相でぐったり地面に打ちひしがれる傍ら、別人も額を抑えて俯いた。

(武宏。お前、ヤクザの息子に勘違いで喧嘩ふっかけたみたいだぞ)

やっと解けた誤解の数々。

その中でただ一つ、『有粋は男』という勘違いだけが解決の気配も見せないまま堂々と残っていた。



赤羽業の戦いが踊るようで、本条弥人の戦いが流れるようならば。この戦い二人はそんな華麗流麗とは無縁の代物——寧猛極まりな

い獣同士の狩り合いのようであった。

熊や狼が格闘技を身につければこんな風に動くのだろう。

しなやかで力強く、大胆に見える動きの中に繊細な技の数々がいくつも混在している。

猛烈な勢いで相手の体に拳を打ち込む様はボクシングに似ているが、古くは高名な武術書において『優れた武術の中の優れた武術』と評されたその正体は、翻子拳という中国武術の一つ。

単純に体格ならば天木武宏が勝るが、筋肉の質では花槍有粋も負けてはいない。

互いの連撃はほとんどが拮抗し、たまに通ることがあっても耐久値の高さゆえ二人とも決定打にはならなかった。

地を蹴り肉を打つ音の反響する空間で、日本刀のように鋭い闘気を漲らせた彼と彼女の視線が鮮烈に交錯する。

(基本は武道各種だが、他の格闘技の色も混じってやがる。フィジカルに恵まれた技巧派たア厄介な相手だぜ。やつぱりカルマとこの兄ちゃんをぶつけねエで正解だ。相性が悪すぎらア)

(この野郎、細身に見えてなんつーパワーだ。しかも引き出しが多すぎる。中国武術のマイナー拳法とか芦原空手のサバキはともかく、俺でさえ何なのか見当もつかない格闘技の技まで使うかよ)

既に腹や腕にはいくつもの青痣が刻まれ、肌は激しい運動のせいで汗ばんでいる。

二人とも中学生離れした体力の持ち主だが、一秒も休まず殴りあい蹴りあい投げあい絞めあいと暴れ続けていればおのずとスタミナは減ってしまう。

それでも呼吸はまだ正常のまま乱れていないのだから、武宏と有粋が普段からどれだけトレーニングを積んでいるのかよく分かるというものだ。

「シッ！」

「らあッ！」

武宏が繰り出したのは背掌を敵の顔面に打ち付ける、洪家拳おいて『美人照鏡』と呼ばれる攻撃技。

対する有粹はその攻撃を右手で受けながら一方の左拳を頭上に振り上げ、武宏の注意をそちらに向けた。

その一瞬の隙に右膝蹴りを腹部に叩き込み、振り上げたままだった左拳も相手の脳天に打ち落とす。

こちらの一連の流れも同じ洪家拳で『月影手脚』と呼ばれる技だ。見事に決まった攻撃も、しかし武宏の耐久力の前では入りが浅かった。

二重攻撃を喰らいながらも一步後ろに下がっただけでよろめくとすらすらず、驚きに目を見張る有粹の顔面へと縦拳を打ち込む。

正拳突きとは違い親指が上に来る状態で放つ、主に日本拳法などで使われ側拳とも称される突き技。

殴打の瞬間に前腕部をひねる必要のある普通のパンチよりも小さい予備動作で使えるため、時間の短縮になる上、横幅の狭さから相手のガードを多少掻い潜りやすいという利点がある。

短所としては捻りを加えられないぶん威力が落ちるが、鼻っ柱に思いつき振るってしまえば多少のパワー不足など関係ない。

「ッ!!」

回避は間に合わなかった。

鼻血を出して顔をしかめる有粹と、先程の脳天への一撃が今になって効いてきたらしく、こちらも鼻血を出している武宏。

世間的に見て充分に男前と評されるだろう整った顔立ちには、鉄臭い赤に汚れてもなお勇ましく雄々しかった。

双方上着の袖で乱雑に鼻血を拭い、口の中に溜まっていた分を地面へと吐き捨てる。

呑気にティッシュなんて詰め込んでいる暇はない。

飲み込んでしまえば喉に絡みついて呼吸の邪魔になるし、行儀は悪いがこうするしかなかった。

「……体重を相手に乗せたイイ突きだ」

有粋が毅然として口端を上げれば、武宏も剛健として白い歯を見せる。

「アンタもな。クズとつるむような奴じゃなけりや、とつくに尊敬してる」

本当に。心の底から惜しい気持ちで一杯だ。

中学レベルを通り越した強さに達した武宏にとって、全力で気持ちよく喧嘩できる相手は貴重。

そんな相手とやつと戦う機会にまみえたというのに、下衆の仲間だと思うとどうしても繰り返す拳に怒りや蔑みといった雑念が混じってしまう。

それが残念でたまらない。

「アタシがつるんでるクズつてのァ、アンタの中じや、ここを根城に活動してる不良グループって認識で間違いねエかい？」

「それ以外に何が……って、ちよつと待て！ 『アタシ』!？」

思わぬ一人称にショッキング隠しきれぬ絶叫。

あからさまな驚愕の態度をとられた有粋のほうは、困った様子で眉を下げて首筋を押さえた。

「今さらかい。胸に掌底打ち入れといて気付かなかったのは、さすがに兄ちゃんが初めてだ」

「え、いや……だってあれ大胸筋じゃ……」

「一応、二割ぐれエはちゃんと乳房だぜ」

怒りも悲しみも恥ずかしがりもせず、ただただ呆れたように笑う有粹。

今まで野郎だと思っていた相手が女性なら、つまり自分は同じ年くらいの女子の顔面をぶん殴って鼻血を出させたことになる。

いや、殴っただけではない。

山嵐や燕返しや胴絞や鉤突きや肘当てや、あと頭突きまで喰らわせた記憶が確かにあった。

「——ヤベエ、どうしよ。女をキズモノにしたら嫁に貰わないといけないんだよな？ それとも切腹とかか？」

「オイ、落ち着け兄ちゃん。キズモノも何もアタシの顔にやあ最初から傷があつたら」

混乱の余り頭を抱えて昭和か江戸みたいなのを言い出した武宏に、有粹は慌てて静止をかけた。

チャラついた風に見えて意外と律儀な男らしい。

先程まで蔓延っていた雄VS雄みたいな雰囲気はとつくに霧散しきっている。

そして有粹の口から更なる衝撃の告白が飛び出た。

「あとアタシ、ここの不良グループの一員とかじゃあねエぞ？ むしろ殲滅するために来たクチだ。アンタともう一人の黒髪の兄ちゃんもたぶん同じだろ？」

「……………」

「やる前から違和感は抱いてたんだが、なにせ場の空気が殺気立ってたもんでな。説明するタイミング逃した。第一撃けしかけたのがアタシ以上、責任はアタシにある。謝罪ならいくらでもするが、それでも怒りが収まらねエってんなら骨の一本か二本くらいは腹いせに折っちまっても構わん」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………オイ、兄ちゃん?」

まさかのノーリアクションに胡乱げな形相をすれば、武宏は掌と膝を地面に着いて土下座の途中みたいな体勢で頽れた。

そして腹の底から絞り出すような叫びが廃工場の全体に反響する。

「殺せええええ!! 誰か俺を殺せええええ!!」

「ちよ、オイ!? 兄ちゃん!?」

「無実の女子をクズ野郎だと勘違いした上に暴行した俺を殺せええええ!!」

「いやいや、アタシだって無実の兄ちゃんをクズ野郎だと勘違いした上に暴行したんだ! それにアタシのほうが兄ちゃん殴った回数たぶん多いぜ!」

「でも投げた回数は俺のほうが多かった!」

「それはそうだけど、蹴った回数でもアタシのほうが上回って——」

「それを言うなら締めた回数は俺のほうが——」

——やいのやいの。

当初の内容から外れてだんだん、どっちが与えたダメージのほうが多いか、という口論じみたものになっていき、最終的には『判定で相打ち』『責任は平等』という結果に落ち着いた二人のトーク。

そのころ廃工場近くの路地裏の前では、予定通り向かっていた暴力団がカルマからの連絡を受けた有粋の祖父が寄越した花槍組の若い衆に取り押さえられ、禁止されている薬の流通は自分たちが原因であるとの証言を暴力により吐かされている最中だったりするのだが。

それを知っているのは、精々この場所の情報を秘密裏にリークしたカルマくらいだった。

『暗殺教室 E組の本条弥人』×『仁義ある暗殺』くおまけく

◆最後の驚き（本条弥人&天木武宏）

「まさかあの色男が女だったとはなあ。これ以上の驚きは滅多に味わえなさそうだけ」

「それは俺も驚いた。でも、その前にあの子が日本有数の極道一家の組長の娘って情報を知った時のほうがもつと驚いたぞ」

「は？ え、何？ それ俺聞いてないんだけど」

「……お前、よく生きて戻ってきたな」

「うっわあ……じゃあ俺、下手したら背中に刺青入ったおっさんに指寄せさせて迫られたり東京湾に簀巻きで沈められたりするところだったのか」

「野郎と真正面からぶん殴りあって鼻血と青痣まみれになっても気にしないような女で良かったな」

「だな。しっかし、もつと早く気付こうと思えば気付けたと思うんだよな」

「ほう。例えばどんなタイミングで？」

「金的に蹴り叩き込んだ時とか。普通の男なら悶絶するけどアイツは顔さえしかめなかった。俺はてつきり琉球空手のコツカケまでマスターしてるのかコイツって内心感嘆してただけど、あれはただ女だからそんなに痛くなかったんだろうな」

「女の股に蹴り叩き込んだのかよ……」

「そんなゴミクス見るような目でドン引きすんなって！ だってあの時はアイツのこと男だと思ってたし！ だいたい俺と数十分ぶつ続けでどつきあって倒れない女がいるとか想定外じゃん!」

「……まあ、そうだな。打たれ強さでお前に匹敵する同年代の女がいれば、そいつはゴリラかクマの雌くらいだと俺だって思っていた」

「それはいくら何でも失礼じゃね？」

「お前にだけは言われたくない」

◆清々しい痛み（花槍有粋&赤羽業）

「同じ相打ちでも、俺と違って有粋のほうはボロボロだね」

「この程度なら風呂に浸かって布団で寝ちまえば、次の日にやあ元通りさ。関節だって外れてねエしな」

「骨折未満は全部軽傷』、だっけ。花槍家の家訓の一つ」

「惜しい。『欠損以外は無傷と同じ』だ」

「わー。想像してたよりすっげーワイルド」

「ま、かなりイイ攻撃してくる奴だったから休んでも多少の痛みは残るかもしれないエがな。けど悪くない痛みだ」

「えー。なになに、有粋ってばアイツとの喧嘩楽しすぎてついにMに目覚めちゃったの？」

「目覚めてたまるか。そうじゃなくて、本当に良い攻撃だったんだよ。今までどれだけトレーニング積んできたのか、拳の重みや足運びの上手さでよく分かった。そういう奴と殴り合って得た痛みは、清々しくて気持ちいいモンなんだ」

「んー……俺も強い奴に勝った時は嬉しいけど、痛みが気持ちいいとかは思わないかなあ」

「こればかりは生まれつきの性分ってやつさ。アタシもボロボロになりながら笑ってるテメエを見る趣味アねエから、精々そのまんまでいてくれや」

「言われなくても」

本編

第一話：悪童の親友は極道の子

「ねえ。有粋^{うすい}くん、きみって面白い子？」

——紅花染めの練糸束のように、色鮮やかな髪的少年だった。

極道者の子という理由で周囲の大人から遠巻きにされ、その空気を幼心に察したり、あるいは両親から直接忠告をされて、同じ幼稚園の園児たちもこちらに話しかけようとはしてこない。

そんな境遇に特に文句はなく、まあ仕方のないことだと受け入れてはいたが、しかし内心少々の寂しさや物足りなさを抱え込んでいたのもまた事実。

そんな灰色の日々をおくっていた己にとって、ある日とつぜんフランクな笑顔を浮かべて気軽に話しかけてきた少年の存在というのは、まさしく極彩色に他ならなかった。

できるだけ園児たちを怯えさせないよう、教室の端で一人大人しく読んでいた絵本を思わず手からすべり落とす。

咄嗟に少年のスモックに包まれた片腕を掴んで、相手の体を引き寄せる勢いで立ち上がりながらこんなことを口走った。

「兄^{あん}ちゃん、綺麗^{ハク}なツラしてんなア」

我ながら、ナンパ師のような真似をしでかしてしまったと思う。

少年からの質問の返答にもなっていないし、そもそも親父譲りの鋭い目つきをした男だか女だか分からんような子供にこんな台詞を吐かれて、不審に感じぬものなどいようはずもない。

やってしまった。真顔の裏で静かな絶望感を噛み締める自分に、一瞬きよんとした表情を浮かべた少年は、しかし次の瞬間には愉快そうに目をすがめて破顔した。

「あははっ。ひよっとして俺、いま口説かれてる？」
「……ある意味そうかもしれないねエな。こんなにモノにしてエと思った相手は、アンタが初めてだ」

喋れば喋るほど墓穴を掘っていく気がする。

ただ離れてほしくないだけだ。自分に興味を持ち続けてほしいだけだ。嫌悪や恐怖の感情もなく、ただ純粹な好奇心だけで自分に話しかけてくれた得難い相手。そんな貴重な存在は初めてだから。

しかしこの言い方ではどう足掻いてもスケコマシの常套句。密かに焦る自分に、それでも少年は深緋の髪を颯爽と揺らして、「じゃあさ」とどこか上機嫌で踵を返した。

「俺のこと楽しませてみてよ。そしたら俺、有粋くんのモノ……にはならないけど、まあ友達くらいにはなっただけさ」

いつそ挑発めいた小生意気な言い分ではあったが、しかしその飾らぬ態度が有粋の胸を見事に突いた。茶目っ気ある笑顔に、年不相応な肝の座り具合。享樂的な様子も、堅気ではない連中に囲まれて育ってきた有粋にしてみればむしろ好ましいものとして映る。

一連のやりとりに満足し、少年は有粋の前から立ち去ろうとしている。その背中に向けて、有粋もまた色男めいて獰猛な笑みを浮かべた。歓喜する心臓を押さえつけて。

「受けて立つ。いつか親友それ以上になっただけさ」

これが赤髪の少年『赤羽業』と、極道の娘『花槍有粋』とのファーストコンタクト。当時3歳の二人の出会い。

カルマは有粋の性別を勘違いしたまま、有粋は勘違いさせるような態度を変えぬまま。

互いに相手を振り回したり振り回されたり、途中でやっと性別の誤

解が解けたり、二人で歓楽街のチンピラと大乱闘を繰り広げたり、カルマが組の人間に「カルマさん」と呼ばれ出したり、カルマが有粋の父親の隠し子と勘違いされ敵対組織に誘拐されかけたり、有粋が小学校に侵入してきた麻薬中毒のゴツい不審者と組み合った結果もつれあつたままガラスを突き破つて外にダイブしたり、火災現場に取り残された赤ん坊を救うために二人でバケツの水をかぶつて炎の中へ飛び込んでいたり、どれだけ注意しても路上駐車をやめないカツプルを可愛いイタズラと脅して追い払ったり、たまには子供らしく駄菓子屋巡りなんてしてみたり……。

そんな風に友情を育み続けてはや10年以上。時に問題もあつたが、関係に亀裂が走ることもなく無事に中学三年生となり。

二人して暴力沙汰で停学を喰らつたその頃、非日常は唐突に訪れた。



「——本気かい？ 月壊したバケモンの命タマなんざ、堅気のアタシに殺取せるたア思わねエが」

袴姿で座布団の上にあぐらをかく目の前の少女がそう眉根を寄せた瞬間、彼女へと事情説明を済ませたばかりの政府職員は思わず頭の中で突っ込んだ。

(それだけ目つきに威圧感があつて体脂肪率1ケタは間違いなさそうな鍛え抜かれた体しててドスのきいたハスキーボイスで、しかも頬に何針も縫つたような斜め走りの傷がある人間は絶対に堅気じゃない)

日本有数の極道一家である『花槍組』七代目組長の実の娘。スキンヘッドや刺青入りの若い衆から「お嬢」と呼ばれ、本人もまた、その実父譲りの侠客ぶりと、修羅場潜りで鍛え上げた腕っ節の強さから、親友の赤羽業と共に不良やチンピラの間では有名な存在だ。

ついでに二人して顔立ちが格好良いというのも知名度の要因かもしれない。

根は善良だが素行不良でイタズラ好きの赤羽業。弱きを助け強きを挫くを地でいく男前アウトローな花槍有粹。

嫌いなものが見事に一致、好きなものもそこそこ一致。

そんな二人の活躍といえば、今や近場の歓楽街に知らぬ者はなし。

曰く、親父狩りの不良集団を逆に狩り返して道行く仕事帰りなキヤバ嬢のお姉さん達から拍手喝采を浴びた。

曰く、誘惑に甘い中高生に薬を売りつけ中毒にさせては違法な風俗店で働かせていた悪漢を全裸にひん剥いて非道の証拠と一緒に交番の前に放り投げた。

曰く、路地裏で女子大生を強姦しようとしていた酔っ払いの大男を二人がかりで昏倒させて亀甲縛りで朝まで路上に転がした。

曰く、痴漢が出ると噂の公園に三日三晩張り込んで犯人を捕獲した末に被害者達の自宅まで連れ歩いて家の前で土下座させて回った。

この他にも嘘か真か定かではない数々の武勇伝が存在する。

恐ろしいのはその8割が真実、2割が脚色もしくは誇張された真実ということ。

つまり彼と彼女に関しての噂で根も葉もないものは一つたりともありはしないのだ。

そんな二人だからこそ、今回依頼する『超生物の暗殺』についても期待がかかる。

暗殺に関して素人とはいえ、荒事には生まれた時から馴染みきつている極道の娘と、そんな少女に引けをとらないほど修羅場をくぐってきた少年のコンビだ。

是非とも奇想天外なアイデアであの超生物に少しでもダメージを与えていただきたい。

「赤羽業くんには、既に先程説明を済ませてあります。彼は乗り気なようでした」

「ほお。カルマがやるってんならアタシも弱気引になっいちやいらねエか。アイツに格好悪イとこ見せんのだけは、例えくたばる寸前だろうとごめん被らア」

事前調査の通り、彼女は常から親友と豪語する赤羽業のことが随分と好きらしい。ボーイッシュを通り越して男らしい笑みの形に唇を吊り上げ、あぐらをかいた膝の上に己の拳を叩きつける。

ダン、と低く響いたその音が床まで届いて、その場を一気に制圧されたような心地に陥る。さすがは現組長の若かりし頃に生き写しと言われる娘だ。齢15にして貫禄のほうも一級品。

現時点でこれだけなら、あと10年もたったあかつきには一睨みで殺し屋を震え上がらせるくらいになるのではないだろうか。

「その依頼、花槍有粋の名に懸けて引き受けやしよう」

若い衆たちや親父からの影響で、この少女の口調は業界用語と江戸言葉と広島弁とその他諸々の入り混じったものになっている。そんな口ぶりも、これだけの風格を感じさせる彼女には不思議と似合ってしまう。

さて、対超生物用ナイフやBB弾はすでに支給済み。そろそろ撤退しなければ、部屋の外で「うちのお嬢に何の用だゴラア」と殺気立っている若い衆たちが突撃してきかねない。

「本日はお時間ありがとうございますとごうございました」
「いや、こつちこそすまねエ。若エ衆が無駄に殺気立っちまって」

そう謝罪を口にする少女の表情は、頭こそ下げているものの心底申し訳なさそうで。

案外タメ口しか使わなかったのも、組長の娘として「使いたくても組の中では人の下手に出られない」みたいな事情があるのかもしれない。権力者の子というのも大変なものだ。

第二話：はじめまして、ターゲット

いっちにーさーんしーごーろつくしちはち……そんな複数人の掛け声が響く昼下がりの運動場。

E組の隔離校舎が山の上にあることも相まって、その光景は生徒たちの平和でキラキラとした青春のひとコマにしか見えない。

「八方向から正しくナイフを振れるように！　どんな体勢でもバランスを崩さない!!」

もつとも、生徒たちの手にナイフという物騒な道具がなく、教師である鳥間の指導の声も飛んでいなければの話だが。

ついでに校庭の砂場で色々と作って遊んでいる黄色い巨大タコみたいな軟体生物の存在も、のどかな光景を破壊するのに一役どころか主役をかつている。

この不思議な生き物、生徒からつけられた名前を『殺せんせー』といい、なんと数週間前に月を破壊した犯人そのもの。

そんな相手を暗殺してくれと政府から依頼されたのが今ナイフを振るっている3―Eの生徒たちであり、鳥間はその指導員とでも言うべき存在だ。

「いっち、にー、さーん、しー……しっかし鳥間先生。こんな訓練意味あるんツスカ？　当のターゲットがいる前で」

「勉強も暗殺も同じことだ。基礎は身につけるほど役に立つ」

E組のチャライほうのイケメンこと前原が、砂遊びし続ける殺せんせーを横目に疑問を提示。

聞かれた鳥間といえば相変わらず堅苦しい真顔のまままで答えたものの、周りの生徒たちが首をかしげているのを見てあまり理解してもらえていないと察したらしい。

説明するよりやってみせるのが早い。と考えたかどうかはさて置

き、彼は前原とE組の貧乏なほうのイケメンこと磯貝を指名し、自分にナイフを当ててみると言い放った。

対殺せんせー用で人には無害なナイフ。かすりさえすれば今日の授業は終わりで良いと言うその台詞に、二人も躊躇いながら実行を決めたようだ。

「え、えーと……それじゃあ」

控え目な様子でナイフを突き出す磯貝。気遣いな彼の性格は攻撃にまで反映されている。それを眉一つ動かすことなく最低限の動きだけで避けた烏間の実力も見事なものだ。

「……！」

「くっ！」

目を見張る磯貝と、一筋縄ではいかないことを察した前原による本気の一振り。けれども次々と繰り出される二人がかりの連撃を烏間はことごとく捌き続け、磯貝と前原の表情だけが一方的に焦りへと変わっていくばかり。

「このように多少の心得があれば、素人2人のナイフくらいは俺でも捌ける」

“多少の心得”なんて言っているが、実際のところこの男、人類最強決定戦なんてトーナメントがあれば間違いなく優勝候補の一角に祭り上げられることは確実な人材である。素人どころかプロの殺し屋がナイフ持って襲いかかって来ても撃退できるはず。

そんなこととは露知らず、二人は烏間に少しでも刃をかすらせようと足と手を絶やさず動かす。

そしてヤケクソになり二人して大振りにナイフを扱ったその瞬間、同時に腕を掴まれ勢いそのままに投げ飛ばされた。

「俺に当たらないようでは、マツハ20の奴に当たる確率の低さがわかるだろう」

言い放つ烏間に呼吸の乱れは一切ない。疲労の様子も感じられない。汗をかいて肩を上下させている二人に比べて、この男の体力がどれだけのものかありありと理解できる光景だ。

しかし上には上がいる。今の攻防の間に、殺せんせーは砂場に大阪城を造った拳句、着替えて茶までたてているのだから。その余裕綽綽の笑みには恐怖を通り越して殺意しか湧いてこない。

「クラス全員が俺に当てられるくらいになれば、少なくとも暗殺の成功率は格段に上がる。ナイフや狙撃。暗殺に必要な基礎の数々。体育の時間で俺から教えさせてもらう!」

烏間の宣言と共に授業終了のチャイムが鳴り響く。

たった今見せつけられたばかりの烏間の活躍に色めきたつ一部の女生徒たちや、その人気に嫉妬して見当違いの文句をつける殺せんせー。

いつも通りのE組の日常風景。

「——行こっか、有粋」

「承知したぜ、カルマ」

それを見下ろす二人組の存在は、凧いだ湖に波紋をたてる新たな投石となるだろう。



潮田渚がその二人を視界に入れた瞬間、こみ上げてきた感情は畏怖と歓迎の双方だった。

「カルマくん……有粋くん……帰って来てたんだ」

青空に映える鮮紅の髪をした少年と、鷹の翼のような焦茶の髪をした少年、にしか見えないけど少女な男女の二人組。

二人とも上中下に振り分ければ上に喰いこむ整った顔立ちをしている。あの二人に顔面だけのイケメン度数で匹敵する男子生徒となると、E組には磯貝と前原しかいない。

もつとも有粋のほうはイケメンというより男前という表現が相応しいし、顔だけでなく行動や性格まで含めると女子生徒のイケメグと片岡メグもランクインしてしまうのだが。

そもそも二人の尋常ならざる点は容姿などではない。

地元のヤクザがこの二人には頭を下げて道を譲るとかいう噂が出回ってもほとんどの人間が信じそうな、謎の「ただものじゃない感」。

カルマのほうはギャングスターとトリックスターを混ぜ合わせたような悪魔的な凄味があるし、有粋のほうにはゴロツキ共を挟気と威圧で統治する縄張りの親分的な凄味がある。

もちろん1年2年とも二人と同じクラスだった渚には、二人が雰囲気ほど物騒極まりない人間ではないことは理解できている。

けれども他の人間とはあきらかに違う存在感を滲ませた二人を目の前にすれば、彼ら彼女らの性格を知っていたところで生唾を飲み込まずにはいられないのだ。

「よー、渚くん。久しぶり」

「久しぶりな。達者にしてたかい？」

高い場所から見下ろすように挨拶する二人のシャツの裾や髪の毛、演出の一部みたいなタイミングで吹いた風がかすかに揺らがせ通り抜けていく。

相変わらず絵になる二人だ。笑顔に妙な威圧感を纏っているもいづものこと。

「あれが例の殺せんせー？ すっげ。ほんとにタコみたいだ」

「アタシにゃホイミスライムに見えちまうがなア。足して割ったら丁度じゃねエの」

気さくな様子で雑談をかわしながら、渚とその友人である杉野の間を通り抜けて、カルマと有粋は殺せんせーの元へと歩み寄っていく。殺せんせーのほうも二人の存在に気付いたようだ。

「……赤羽業くんと花槍有粋さんですね。今日が停学明けと聞いていました。初日から遅刻はいけませんねえ」

皮膚の色を赤っぽくして怒りを表現する殺せんせーに、カルマは反省の色を浮かべつつも砕けた笑顔で、有粋は申し訳なさを滲ませた真顔で答える。

「あはは。生活リズム戻らなくて」

「アタシもさ。宵っ張りが板についちまった」

「まったく……仕方がないですねえ」

ちゃんと謝れば、殺せんせーの顔色は一瞬で元の黄色に戻った。

反応を見てカルマと有粋も安心したのか、ほっとした表情で手を差し出した。

「下の名前で気安く呼んでよ。とりあえずよろしく、先生」

「アタシも有粋で構わねエ。こいつ共々よろしく頼んまさら」

「いちいちこそ。楽しい1年にしていきましたよう」

左右から並んで差し出された手を2本の触手でギュツと握り返す。

——その瞬間、まるでチヨコレートを熱湯の中に放り込んだかのような勢いで、殺せんせーの触手が2本ともドロリと溶解した。

「!?」

驚愕に目を見張る殺せんせー。

そんな彼が一息つく暇もなく、カルマは袖口に仕込んでいたナイフを、有粋は靴底に仕込んでいたナイフを素早く殺せんせーの体へと振るう。

が、そこはさすがに最高時速マツハ20の化物。瞬間移動じみた退却回避により、二人の第二撃は完全に無効化された。

それでも周囲に与えるインパクトは絶大。両手分の触手を失った殺せんせーと、それを成し遂げた二人の生徒。

一連の光景を見ていた生徒たちが絶句して身守る中、沈黙を破ったのはカルマの飄々とした軽口だ。

「へー。ほんとに速いし、ほんとに効くんだ。この対先生用ナイフ。細かく切って貼っつけてみたんだけど」

嘯き、カルマはひらりと手のひらを振ってみせた。そこには確かに細切れにされた対先生用ナイフの破片がいくつもあつた。おそらくは有粋の手にも同じものがあるはずだ。

遠くに飛び退いた殺せんせーを見て、カルマは肩を竦めながら軽口を続ける。

「けどさあ先生。こんな単純な『手』に引つかかるとか……しかもそんなトコまで飛び退くなんてビビリすぎじゃね?」

「確かに。今までも何度も生徒にタマ取りに来られてるつてわり

「いやア、動揺しすぎだと思っぜ」

それは殺せんせーにダメージを与えた生徒が今までいなかっただらだ。

彼は殺しにこられることには慣れていても、傷つくことには慣れていない。

顔に流れる冷や汗の数が、その精神的衝撃を物語っている。

「殺せないから『殺せんせー』って聞いてたけど」

早くも触手の再生を始めている殺せんせーに歩み寄り、カルマはこれぞ嘲笑と太鼓判を押ししたいほどのスマイルで相手の顔をわざとらしく覗き込んだ。

「あつれえ？　せんせーひよつとしてチヨロいひと？」

そしてその発言を耳にした殺せんせーの表情はといえは、まさしく「激おこぷんぷん丸」である。たぶん「ムカ着火ファイヤー」にはまだ達していない。

少し後ろで控えるようにして立つ有粋のほうも、カルマのそんな煽りを止めるどころかキリツとした表情で見守っている。

完全に無言のまま事態に見入っていた渚だったが、くいくいと、物言いたげな茅野に袖を引っ張られてそちらへと視線を写した。

「渚。私E組来てから日が浅いから知らないんだけど、彼らどんな人なの？」

「有粋さんのほうは『彼』じゃないよ」

「ええっ!？」

ひとまず誤解のほうを真っ先に訂正すれば、素っ頓狂な悲鳴をあげて何故か後ずさる茅野。間違えるのも無理ないと思うが、彼女のリア

クシヨンはいちいち大きい。そこで退却する意味はあるのだろうか。そんな級友にツツコミを入れることもなく、渚の説明は続く。

「二人とも1年2年と同じクラスだったんだけど、2年の時に続けざまに暴力沙汰で停学喰らって……このE組にはそういう生徒も落とされるんだ」

基本的に理不尽な暴力は振るわない二人だから、きつと起こした暴力沙汰にも何かのつぴきならない理由があつたのだろう。

かくいう渚も、道端で不良や変態に絡まれてカルマと有粹に助けられたことがある。その時はまだ、有粹のことを男子生徒と勘違いしていた。

「でも二人とも、今この場じゃ優等生かもしれない。凶器とか騙し討ちの『基礎』なら、たぶんカルマくんが群を抜いてるし……有粹くんは育つてきた環境が僕らと違う分、経験値と精神力が凄いから」

渚と茅野が語らう一方、怒りで血管の浮き出た殺せんせーを尻目に、初暗殺チャレンジを終えてさっさと教室へと向かうカルマ。

彼の親友を自称し他称される有粹もまた、その後を追って教室へと足を進めていた。

しかし殺せんせーとすれ違う瞬間、小さく口を動かしたのが見える。

「……………」

残念ながらこの距離では彼女が何と言いついて残して行ったのか聞き取れない。

しかし振り返って腕組みをする先生の様子を見るに、挑発の類ではなさそうだ。

本人に直接訪ねようにも、既に彼女の姿は赤羽業と共に校舎内へと

消え失せていた。



「——先生、カルマを救っちゃくれねエか。アタシじゃ近すぎて意味ねエんだ」

第三話：親友だからこそ

ブニヨンツ。
ブニヨンツ。
ブニヨンツ。
ブニヨンツ。

「……………」

ブニヨンツ。
ブニヨンツ。
ブニヨンツ。
ブニヨンツ。

「……………」

——うるっせえ。

全員の心の声が一致したような気がした。

現在E組の面々は、教室へと戻り小テスト中。

本来ならば静かな空間の中で鉛筆と紙が擦れる音だけが響いていくはずなのに、現実はというと、先程から壁に向かってパンチし続けている殺せんせーの触手と壁が接触する柔らかい打撃音しか聞こえてこない。

暴走族の集団と街中ですれ違うよりはマシだが、それでも充分に騒音の範疇だ。早くもしびれを切らしたらしい岡野ひなたが机を叩いて抗議する。

「ブニヨンブニヨンうるさいよ殺せんせー！ 小テスト中なんだから

!!

「こ、これは失礼！」

どやされた殺せんせーは慌てて触手をひっこめる。

そんなやりとりの裏、教室後方において吉田・松村・寺坂の不良グループがカルマと有粋に突っかかっていた。

「よオ、カルマア。あのバケモン怒らせてどうなっても知らねーぞー」

「花槍も、またおうちにこもつてた方が良いんじゃない」

「そうそう。顔に傷が増える前にな」

どれだけ煽られようとも二人のペースが崩れることはない。

カルマはいつそ魅力的なほど飄々とした笑みのまま、有粋は気負いを感じさせない真面目な顔つきのまま、落ち着いた様子で切り返す。

「殺されかけたら怒るのは当たり前じゃん、寺坂。しくじってちびっちやった誰かの時と違ってさ」

「なっ、ちびつてねーよ！ テメエ喧嘩売ってんのか!!」

「そりゃあ誤解だぜ、寺坂。アタシの親友に弱エもんいじめの趣味なんざねエ」

「弱っ……!?! 上等だコラ！ 表に出やがれ!!」

「無理だよ寺坂。俺の親友も弱い者いじめ嫌いだもん」

「クソツ……テメエら散々におちよくりやがって……ッ!!」

遠まわしに「お前ザコだから俺らの相手にもなんねーよ」と馬鹿にされ弄ばれているこの状況に、寺坂のフラストレーションはたまりまくる一方。

ちなみにカルマはおちよくる為に天然を装っているが、有粋はわりと本気で言っている。彼女の場合は生来の生真面目さがこうして煽り効果を生むこともあるのだ。

だからといって悪意がない訳でもない。目の前で親友を揶揄する存在にかける言葉なのだから、刺々しさは意図せずとも含んでしま

「いらそー！ テスト中に口喧嘩を始めない!!」

主に寺坂の声が大きいせいで殺せんせーから注意が入る。

グループで絡んだのに結果的に精神的に精神ダメージを負ったのが寺坂だけなのだから、なんともまあ不憫な男である。けれども自業自得だ。

「ごめんごめん殺せんせー。俺もう終わったからさ。ジェラート喰って静かにしてるわ」

「付け合せてマフィンなんてどうだい？ こないだ痴漢から助けた子に貰ったもんだが、なかなか美味そうだぜ」

「駄目ですよ！ 授業中にそんなもの！ まったく、どこで買って来て……」

マフインは貰い物だと判明しているので、カルマのジェラートのほうに視線を移しながら質問しようとし……たところで、殺せんせーはそのジェラートが己の購入したものであることに気付いた。

「そ、それは昨日先生がイタリア行って買ったやつ!!」

「あ、ごめーん。職員室で冷やしてあったからさ」

しれっと謝罪を済ませてイタリアンジェラートを舐め続けるカルマ。悪びれた様子はまったくくない。

有粋はマフィンを取り出してカルマに渡しただけで、自分が食べる気はないらしい。けれどもジェラートを食べるカルマを注意しないあたり間違いなくカルマ寄りだ。

怒りの収まらぬ殺せんせーはなおも抗議の声を上げる。

「ごめんじゃ済みません！ 溶けないように苦勞して寒い成層圏を飛んで来たのに!!」

「へー……で、どうすんの？ 殴る??」

「殴りません!! 残りを先生が舐めるだけです!!」

それはそれで殴る以上の問題に発展しそうな気もするのだが、とにかくジェラートがこれ以上消費されてしまう前に取り返さんとカルマの席に急ぐ殺せんせー。

そんな彼の触手が目の前のジェラートよりもあっさりと溶けた瞬間、先程校庭で二人にしてやられたことを思い出し、慌てて地面を確認。

危惧した通り、そこにはいつの間にか対先生用BB弾が散りばめられていた。

視界の端で、カルマの薄い唇がにんまりと弧を象る。

「あつは——まあーた引つかかった」

さも面白げな囁きが空気の上を踊って消えた。

映画の中のカウボーイと変わらぬ速さでヒップホルスターから抜かれた拳銃は、的確な角度で引き金をしばれば、銃口から対先生用BB弾を勢い良く射出する。

至近距離とはいえ、一寸の狂いもない頭部目掛けての見事な銃撃。それもやはり殺せんせーのスピードの前では鈍速でしかないようで、再び避けられてしまった。

しかしその背後から、混乱に乗じて回り込んでいた有粋が殺せんせーの後頭部めがけて何か大きな袋状のものを投げつける。

随分とやわな素材で出来ているらしいソレは、正体もわからぬまま咄嗟に避けた先生が避けると壁面に激突し、破裂すると同時に中身を撒き散らした。

「にゅっ!?!」

ぶわっと舞い上がった中身は粉状の何か。しかしそれに触れた途端、殺せんせーの触手がまたしても液状化したことから、粉の正体は

細くなるまで砕かれた対先生用BB弾であることがわかる。

ナイフや弾丸は避けられても、やはりこれほどまでに微細なものになると一瞬の判断で全て避けきるのは難しい。しかも地味に教室中の床のほとんどにまで広がってしまった。

「ナイス有粋、手筈通り！」

「伊達に長年つるんでねエッ！」

上機嫌に響くカルマの呼びかけ。呼応する有粋もまた、どこか楽しげだ。

二人が動かしているのは口だけではない。カルマは拳銃を持っていないほうの手を壁に叩きつける勢いで後ろへと引き、有粋は逆方向にスタートダッシュを決める。

周囲の生徒たちには二人の行動の意図が読めない。初めは殺せんせーもそうだった。しかし雲で隠れていた太陽がタイミング良く顔を覗かせ、窓から射し込む光量が増したことで彼らの思惑に気付いた。

そう。日差しを受けた二人の手首で、なにか半透明な糸状のものが煌めいているのを目撃したのだ。

(あれはピアノ線！ ということはッ！)

とろけてしまった触手が回復するのを待たず、素早い判断で天井へと貼り付く。判断は正しかった。

いつの間に仕込んだのやら——ひよっとしたら5時間目の体育で皆が校庭に出ている最中にやっていたのかもしれない。

人目につかないよう巧妙に張り巡らせたらしいピアノ線の双方の先端は二人の手首に巻きつけられていて、二人が動けば当然、張られたピアノ線もその陣形を変貌させる。

ついさきほどまで立っていた場所を、ギロチンのようなピアノ線の一閃が通過した。

二人の意図に気付かず、あのまま立っていたら……間違ひなく殺せんせーが足代わりになっている触手は根こそぎ切り離されていたはずだ。

ただのピアノ線ならそうはいかないが、硬い対先生用BB弾をわざわざ何十kg分も粉状にしてきたこの二人なら、同じように対先生用BB弾を溶かして薄くピアノ線に塗りつけるくらいはしてのけるだろう。

つまりこれがただのピアノ線という可能性は無い。

床全面への移動を封じてから移動手段となる触手を奪い、トドメを刺す確率を格段にアップさせるというこの作戦。

なるほど、成功していれば暗殺終了はならずとも奥の手を引き出すくらいはできていたかもしれない。

だが甘い。昨日の今日でさすがに天井にまで細工する余裕は無かったらしい。

けれども4時間目まで空いていたはずの教室の窓が全て鍵ごと締まっていたり、その鍵にすらよく見れば薄く切った対先生用ナイフの破片が貼つてあるあたり、他の逃げ道を絶つ手段は講じていたようだ。

この分では扉にも罫はあったのだろう。即座に天井という選択肢をとった自分を心の中でそつと褒める。

「あらら。失敗しちゃったか」

「成功の元が一つ増えただけだ。気長にやろオゼ」

気さくに言葉を交わす二人の姿は仲の良い普通の男子中学生同士にしか見えない。

けれどもカルマの視線が殺せんせーのほうを向いた瞬間、眼球の色は変わらぬまま、そこに宿る感情だけがぞつとするものに成った。

「何度でもこういう手使うよ。授業の邪魔とか関係ないし。それが嫌なら、俺でも俺の親でも殺せばいい」

「……………」

「でもその瞬間から、もう誰もアンタを先生とは見てくれない。ただの人殺しのモンスターさ。アンタという『先生』は、俺に殺されたことになる」

嘯いて、グチヨグチヨに溶けたジェラートを天井の殺せんせーへと放り投げる。嫌な予感がして当たりそうな箇所の手をのければ、やはり中には対先生用ナイフが丸ごと一本混入されていた。

何重もの殺意と策略で固められた暗殺計画。これがほんの数十時間前に思いついて下準備まで終わらせた即興ものなのだから、この少年の素質は末恐ろしい。

それを相棒としてしつかり実行できてしまう少女の潜在能力もまた然り。

「とりあえず、俺と有粋のテストここに置いとくね。たぶん二人とも全問正解」

教卓に二枚の答案用紙を置いて、カルマはいつも通りのイタズラっ子の表情で出入り口へと向かってゆく。

暗殺失敗を悔しがる素振りも、ダメージを負わせたことを喜ぶ気配もなかった。

「じゃあねー、『先生』。明日も遊ぼうね！」

端正な顔立ちに爛漫とした笑みを浮かべて、この嵐を起こした張本人たちの片割れであるカルマは教室から出て行った。

残された、というよりは残ったというべきだろうか。一人で教室中の視線を独占している有粋は、先程までとは打って変わってどこか面目ない様子で己の髪をかき乱した後、教室のど真ん中で深く頭を下げた。こう宣った。

「悪いな。掃除は明日アタシがやるから、気にしねエでくれ。……アイツはいま傷ついて荒れてるだけで、根は上等な奴さ。それだけ覚えといちゃあくれねエか」

誰に向けたものなのか……たぶんこの教室にいる全員だ。

さっきの暗殺も嫌々やっているようには見えなかったし、有粋がカルマを見る目はいつも友愛に満ちている。

二人の関係は対等なものだ。それでも彼女があまり好みでない、周囲に一方的に迷惑をかけるような真似を手伝ったのは、やはり彼女がカルマの親友だからだろう。

荒れた人間を救ってやろうと——引き上げてやろうとすれば、高い場所に行かなくてはならない。つまり一度離れなければならぬ。ただでさえ傷ついて情緒不安定な相手と一緒にいてやれなくなる。

親友だからこそ、昔からつるんできた掛け替えのない相手だからこそ、花槍有粋は赤羽業を救えない。

二人の事情を何も知らないE組の生徒たちですら、思わずそんな深い想像までしてしまうほど、彼女の態度は真摯なものだった。

天井から殺せんせーが有粋に言葉をかけようとするが、その気配を察した彼女は素早く頭を上げて教室の扉から出て行ってしまふ。

ふと渚が窓の外を見れば、校庭の端でカルマが有粋を待っているのが見えた。

(カルマくんに、いったい何があったんだろう)

それは渚にはわからない。

けれども何があったところで、きっと花槍有粋は赤羽業から離れることはないのだろう。

かつてカルマを庇った際にできたという右頬の傷を「アタシの勲章」と誇っていた彼女の姿を思い出し、渚は形容しがたい感情を込めた溜息を吐いた。

第四話：それだけは許さない

いつでもお前の味方だよ、と。

赤羽業にそう言ってくれた人間は世界に二人いて、うち一人にはついでこのあいだ裏切られた。

相手の全てに絶望してしまえば、もうその人は自分の中で生きていないのと同じ。

死んでしまった奴のことはどうでも良いけれど、最後に残った自分の味方が離れてしまったらさすがに駄目かもしれない。

そんな薄ぼんやりとした考えが相手にも伝わっていたのだろうか。理不尽な態度をとることに侮蔑じみた拒否感を持つにも関わらず、有粋は荒れたカルマの周囲に迷惑をかけるような暗殺計画をしつかり手伝ってくれた。

嫌な顔一つせず……昔から変わらぬ、友情と信愛の籠った眼差しでカルマを見て、雄々しい笑みと共に言い放ってくれた。

——親友なんて名乗ってる以上、泥被る時もテメエと一緒にだ。安心しな。テメエがどうなっちまおうと、アタシはテメエを手放してなんかやらねエよ。

その言葉があまりにもあつさりと身に染みて。

たとえ草木や獣に至るまでの世界の全てが敵に回ったとしても、こいつは、花槍有粋だけは赤羽業の一番の味方でいてくれると。

そう無条件に信じられた。



停学明けの二人による怒涛の連続暗殺から一日後。

登校してきたE組生徒たちを迎えたのは、宣言通り有粋の手によつて綺麗に掃除されたピカピカの教室と、何故か教卓の上に鎮座し本物のナイフをぶっ刺されたタコの姿だった。

ワックスまでかけられて新築同様の艶やかさを誇る床板を踏みしめて歩けば、さすがにボロさのほうはどうしようもなかったのかギシギシと軋む音が鳴る。

それに「嗚呼、いつも通りの教室だ」と妙な安心感を覚えつつ、同じく光沢が出るまで磨かれた自分の机と椅子にそれぞれ着席していく。

堂々たる存在感を示すタコについてコメントする者は誰もいなかった。

十中八九カルマの仕業で間違いないし、下手に口出しすれば何をしでかすかわかったもんじやない、とカルマを危険視している生徒は大勢いる。

有粋に根は上等な奴だと口添えされたばかりだが、やはり昨日の非行やら奇襲やらのインパクトが強すぎたらしい。

誰も、寺坂たちですらカルマに話しかけようとしない空間の中で、有粋だけが緊張した様子もなく彼にいつも通りの雑談を振っていた。

「今日は精神的なストレスを与えるって方向性で行くワケか。新鮮なマダコぐれエ、事前に説明しといてくれりやあアタシがダース単位で仕入れとくのによ」

「ちよつとはその考えもあつたけど、昨日BB弾を砕いたりするのに有粋と組員の手エだいぶ借りたからさ。なんか遠慮の気持ちみたいなのが湧いてきちゃって」

「テメエがそんな可愛らしいタマかよ」

「ほら、これでも傷心の後だし？ 柄にもなく情緒不安定なのかも」

「……慰めてやろうか？」

「有粋がそういうコト言うと、なんかやらしいよ。『体で』って副音声つきそう」

「抱こうたア考えてねエよ」

「そこでマウントポジションは自分って考えるあたり、相変わらず男前な性格してるねー」

色々とツツコミ所の豊富な駄弁りが展開されている。

会話が聞こえている一部の純情な女子は赤面気味だし、一部の下世話な女子はこっさり楽しんでるようだ。

ぶっちゃけ有粋が格好良い男子生徒にしか見えない容姿なので、そんな彼女がイケメンの部類に入るカルマと「慰める」だの「抱く」だの話していればBでLな世界観の雰囲気醸し出してしまっている。

当人たちにそのつもりが無くても出てしまうものは仕方がない。その手の人種は男が二人いれば腐った目で見てしまうと言うが、男二人でなく男一人と男のような女一人でも妄想は開始されるのだ。

特にそういう傾向の強い中村莉桜なんかはニヤつきを隠しきれない様子で二人にチラチラと視線を送っている。物怖じしないといえれば聞こえは良いだろうか。

「おはようございます」

と、なんともいえない空気感が形成された朝の教室に殺せんせーが入ってきた。

生徒の誰からも挨拶が返ってこないことに疑問を感じ、首をかしげながらも教卓に向かうべくそちらへと目を移す殺せんせー。

しかしそこで彼が目撃したものといえば、当然撤去されていないマダコの串刺しで。

「あ、ごっつめーんー！」

沈黙の空間を破ったのはまたしてもカルマの軽薄な声だった。

「殺せんせーと間違えて殺しちゃったあ。捨てとくから持ってきてよ」

イタズラ少年らしく舌を突き出した、悪びれの欠片もない舐め腐った表情は、もちろん相手の激情を招くためにわざとやっているものだ。演出といってもいい。

その手にはしつかりと対先生用ナイフが隠し持たれており、殺せんせーが近付いてきたところをとりあえず一刺ししてやろうという魂胆が見て取れる。

暗殺目的というより、こちらも煽り目的だろう。やはり今日の彼は徹底的に精神面をいたぶる気にいるらしい。

「……わかりました」

意外にも反応の薄い殺せんせーがマダコをひよいと手にとりカルマの席へと向かって行く。

見えたのは席が横並びの寺坂くらいだろうが、カルマの隣の隣に座った有粋もまた示し合わせたように拳銃を隠し持っていた。

というか実際に示し合わせたのだろう。二人が親しい仲であることなど、昨日と今日のやり取りを見ていれば友人ですらない寺坂でもわかる。

(……来いよ、殺せんせー。身体を殺すのは今じゃなくても別に良い。まずはじわじわ……心から殺してやるよ)

内心ほくそ笑むカルマだが、その余裕は一気に驚愕へと変わる事になった。

目の前まで迫ってきていた担任の触手が突然ドリルに化けたのである。

「!?」

「!!」

思わず瞳孔を開くカルマと、彼の行動に「カルマが攻撃される」と勘違いしたのか、傍にいる生徒がすくみ上がるほどの殺気を纏って銃口の先を殺せんせーに合わせた有粋。

だがその物騒な誤解も、次の瞬間に殺せんせーが手にした品々を見た瞬間に解けたようだ。

「見せてあげましょうカルマくん。このドリル触手の威力と、自衛隊から奪っておいたミサイルの火力を」

言った通りの軍用ミサイルが一本と、小麦粉、青のり、鰹節、そしてマダコ。

これら材料から導き出される答えはただ一つ。

高速でドリル状の触手を機敏に動かしながら、殺せんせーはその豆粒のごとき目を光らせた。

「先生は、暗殺者を決して無事では帰さない」

「!!」

剣呑な台詞と共に彼がとった行動は、しかしマツハで完成させたたこ焼きをカルマの口の中に放り込むという不可解なものだった。

「あっつ!!」

ほかほか焼きたての塊を敏感な粘膜へとぶつ込まれ、火傷の危機を感じたカルマは反射的に中のあるものを口外へと吐き出す。

隣々席の有粋は拳銃を机の上に放り投げると慌ててワンタッチオープン式のステンレス水筒をカバンから取り出し、蓋を開けるスィッチを押しながらカルマへとそれを突き出した。

水筒を渡されたカルマは素直にそれを受け取り中身で喉を潤す。直接口をつけるタイプの水筒で間接キスは免れないのだが、3歳の頃から付き合いがある当人たちにしてみればその程度のことはいくら

気にしない。

「その顔色では朝食を食べていないでしょう。マツハでタコヤキを作りました。これを食べれば健康優良児に近づけますね」

「……カルマを氣遣つてくれるの、ア嬉しいが、それならせめて皿に盛っちゃあくれねエか。火傷しちまうだろ」

「ヌルフッフ。有粋さんは過保護ですねえ」

「いつもアそうでもねエよ。ただ、今のカルマは危なっかしいんだ」

床に吐き出されて潰れてしまったタコヤキをティッシュで拾いゴミ箱に捨てながら、目つきを険しくして殺せんせーを睨めつける有粋。

そこにあるのは怒気というよりもカルマを心配する気持ちだと、眼差しを向けられた殺せんせーだけが理解していた。

舌を冷やし終えたカルマのほうも、水筒を机の上に置いて濡れた唇を袖で拭う。彼の視線にあるのは純然たる敵愾心。気に食わないと、口にするまでもなく瞳が語っている。

二対の異なる感情を孕んだ瞳を受けて、殺せんせーはペースを崩すことなくニンマリと笑う。

「先生はね、カルマくん、有粋さん。手入れをしますので。錆びて鈍った暗殺者の刃を。今日一日、本気で殺しに来るが良い。そのたびに先生は君たちを手入れする」

にわかに殺気立つ空気。

その発生源はもちろんカルマだ。

突然名前を呼ばれた有粋のほうは訝しげに眉根を寄せていたが、それでも親友がやる以上自分もやる気というスタンスは崩さないのか、これが答えとばかりにカルマの後ろへと立った。

「放課後までに、君たちの心と身体をピカピカに磨いてあげよう」

◇ ◇ ◇
1 時間目、数学。

授業中に拳銃を用いた奇襲を狙うも失敗。

カルマはネイルアートを入れられ、有粋はフェイスペイントを施された。

4 時間目、技術家庭家。

調理実習中に今度はナイフを用いて仕掛けるも、二度目の失敗。

カルマはフリルたっぷりピンク色の可愛いエプロンとお花柄の三角巾で飾られ、有粋は総レースで無駄にセレブ感のあるオシヤレエプロンと何故かラメっぽい生地三角巾を宛てがわれた。

5 時間目、国語。

背後から一撃入れようとナイフを出した時点で止められ、やはり失敗。

カルマは髪を綺麗に手入れした上でファンシーなピンどめを付けられ、有粋は髪にエクステをつけられ派手なヘアスタイルに盛られた。

——そして放課後。

「……カルマくん、有粋くん、焦らないで皆と一緒に殺って行こうよ」

校舎裏の断崖絶壁に横向きに生えた木の上で、カルマは苛立った様子を隠さず爪をガリガリと噛んでいた。

その背中を支えるようにして同じ木に逆向きに座した有粋は、カルマと違って焦りこそ見せないものの、心配を隠しきれぬ表情でカルマをチラチラと見ているあたり、冷静でもないようだ。

「殺せんせーに個人マークされちゃったら……どんな手を使っても二人じゃ殺せない。普通の先生とは違うんだから」

渚の説得も虚しく。

どこか不安定さを匂わせる危なっかしい笑みで、カルマは「やだね」と切り替えした。

「俺が殺りたいんだ。変なトコで死なれんのが一番ムカつく」

「……有粋くんは良いの？」

「こいつは兄弟みたいなものだし。絶対に俺を裏切らないから」

「……………」

ひねくれ者のカルマにしては珍しい素直な発言。それだけ参っているということかもしれない。

有粋が言っていた。カルマは傷ついて荒れていると。そんな精神状況にも関わらず、カルマに「こいつは絶対に裏切らない」と言わしめるのだから、この二人の信頼関係はどれほどのものか。

憧れとも感嘆ともつかない思いが渚の胸を焦がす。

と、背後から聞こえる草の根を踏みしめる音。

振り返った先にいたのは殺せんせーその人で、彼は余裕綽綽の態度を変えぬまま二人に向かって舐めた顔をした。

シマシマ模様は相手を侮っている時の皮膚の色である。

「さてカルマくん、有粋さん。今日はたくさん先生に手入れをされましたね。まだまだ殺しに来てもいいですよ？ もつとピカピカに磨いてあげます」

「……確認したいんだけど、殺せんせーって先生だよね？」

突拍子のない質問に、殺せんせーはクエスチョンマークを浮かべながらも「はい」と回答。

座っていた木の上で高度を恐れることなく立ち上がり、何か不穏な空気を感じさせる笑みを貼りつけながら次の質問。

「先生つてさ。命をかけて生徒を守ってくれる人？」

「もちろん。先生ですから」

「……おい、カルマ？」

親友が何か今までとは違うことをやらかすと、本能で感じ取った有粋がこわばった声色でカルマのほうへと体を向ける。額には冷や汗が流れていた。

自分を心配してくれる親友の視線を心地よさそうに受け取って、小さく「サンキュ」とこぼすカルマ。それでも有粋の疑念は晴れない。取り出した拳銃を持った腕を殺せんせーへと伸ばし、カルマは唇に半円を描いた。

「そっか、良かった。なら殺せるよ」

——そして次の瞬間、赤羽業の肢体は宙を舞った。

「確実に」

「ッ——カルマ!!」

自ら足場を踏み外して飛び降りた親友の姿に、有粋は悲鳴のような叫びを響かせる。

殺せんせーがカルマを助けに行けば、救出する間に殺せんせーが撃たれて死ぬ。

カルマを見殺しにすれば、先生としての殺せんせーが死ぬ。

そういう考えで自殺行為を働いたのだと、有粋は一から百までしっかり理解していた。

けれども理解と許容は別物だ。

動く手足を持っておきながら、目の前で死を迎えようとしている親

友に対し何の行動も起こさないほど、花槍有粹という少女は大人しくなかった。

「テメエ、自暴自棄もいい加減にしやがれ!!」

怒鳴りつけて、有粹も己の足場たる木の根元を勢いよく蹴り飛ばした。

宙に躍り出る体。視界の下で目を丸める親友。それに向かって手を伸ばす。

さすがに向こうまで飛び降りてくるとは思わなかったのか、笑顔が消したカルマが取り乱し気味に絶叫し始めた。

「ちよつと有粹?! 何でお前まで飛び降りてんのさ!?!」

「うるせエ馬鹿! テメエが荒れて色々やらかして、挙げ句の果てに天国とか地獄に行くことになったって一向に構いやしねエけどなツ!! アタシの目の前でテメエだけ死ぬなんざ、それだきやア許さねエぞ!! 冥土の土産にアタシも連れてけ!!」

「ハアツ!? 何それ本気で言ってるの!? いくらなんでも俺のこと好きすぎない!?!」

「ああそうだよツ! 愛してるぜ親友! だから一人で逝くな! 死んでも二人でつるむぞ!!」

「ツ——ああもう! 恥ずかしい奴!!」

鬼気迫る真剣な表情で、嘘偽りない必死の形相で、絶対に失いたくないものを失うまいと、喉を枯らして叫びながら有粹は腕を伸ばし続ける。

親友の魂の叫びに根負けして、さつきまで見ていた走馬灯すらどうでも良くなったカルマはヤケクソ気味にその手をひっ掴む。

信じていた担任教師に裏切られてE組に落とされたこと。

そのせいで先生という生き物が信じられなくなったこと。

勝手に死んだ前の先生の代わりに殺せんせーを殺そうとしたこと。

それら全てが、今この瞬間には頭の隅まで追いやられていた。

(人生の終わりとしちやかなりアホらしいけど。あの世でまだ親友とつるめるなら、まあいっか)

そんなことを考えながら、有粋の引き締まった両腕に抱き寄せられる感覚を享受する。

多方、自分の体をカルマと地面との間に割り込ませることでクツシヨン代わりになるつもりなのだろう。

一人で死ぬなどほざいておきながら、最後の最後まで身を張って親友だけでも助けようとするその男前な姿勢は相変わらずだ。

たとえ無駄でも、そっちのほうがカルマの死体は綺麗に残るからと。

そういうところがムカつくし、そういうところが格好良いし、そういうところを尊敬してるし、そういうところが大好きだ。

そういう女だから、いつしか自分も親友と呼ばずにいられなくなったのだ。

色恋じゃなく友情として。

赤羽業と花槍有粋は、間違いなく愛しあっていた。

……とまあ、そんな感じで死ぬ気マンマンの二人だったが。

殺せんせーがいる限りそんな事態など起こり得ようはずもなく。

「……あぁ?」

「……えっ?」

予想外の柔らかな感覚にガラスの悪い声を洩らす有粋と、決して離すまいと有粋にきつく抱きしめられた状態のまま、気の抜けた表情を見せるカルマ。

二人を助けたのは、地面まで残り1メートルという高さに突如として現れた丈夫な蜘蛛の巣。

もとい先回りした殺せんせーの触手による即興防護網だった。

「カルマくん。自らを使った計算ずくの暗殺お見事です。……まあ、ちよつと計算外もあったようですが」

未だ呆然とカルマを抱擁し続ける有粋に視線をやれば、やつと平静を取り戻した彼女は気恥かしげに目を逸らしつつカルマを開放した。カルマのほうも恥ずかしいやりとりを目撃された自覚があるのか、同じく赤面しつつその鍛えられた体から離れる。

一連の光景がどう足掻いても美少年同士にしか見えないのはご愛嬌だ。

「音速で助ければカルマくんと有粋さんの肉体は耐えられない。かといつてゆっくり助ければその間に撃たれる。ということでは先生、ちよつとネバネバしてみました」

「……触手プレイたアいいご趣味だ」

「ちよ、違いますからね!? 照れ隠しで先生に変態疑惑を押し付けないでくださいー!」

言われてみれば系統の違うイケメン二人をモンスターが手籠にしているシーンに見えなくもない。どんなマニアックAVだ。

二人して触手のネバつきに顔をしかめながら無理やり外そうとしていると、「これでは撃てませんねエ、ヌルフフ」なんて楽しげな殺せんせーの煽りが聞こえてくる。

地味に悔しい。命の恩人だとわかっていても殺意が湧いてきそう
だ。

「……ああ、ちなみに」

しかしその感情も、次に続いた言葉であっさりと吹き飛んだ。

「見捨てるという選択肢は先生には無い。いつでも信じて飛び降りてください」

「……………ははっ」

——こりやダメだ。死なないし殺せない。少なくとも、先生としては。

不思議と爽やかな気持ちにさせられる。なんというかもう、しがらみが全て吹っ切れた。

「ついでにアタシにもねエぞ。生まれ変わってもまたテメエを口説いて親友の座に収まってやらア」

「…………ネバネバと格闘しながらキメ顔で格好良いコト言うのやめてくれない？ 笑いたくなるから」

「そんなこと言ってますけどカルマくん。顔赤いですよ？」
「うるさい!!」

照れ隠しに引き金をしばれば、鳴り響く銃声と殺せんせーの余裕の笑い声。

雨降って地固まる、というやつではないが。

何はともあれ、もう赤羽業が崖から飛び降りるような心配はなさそうだ。



崖下から引き上げた赤羽業と一悶着を経て、殺せんせー財布の中身が盗まれ募金箱に寄付されていたというオチを得てから数秒後。

渚と共に買い食い誘われ、当然カルマのほうへと行くだろうと

思っていた花槍有粋は、しかし殺せんせーの傍に走り寄ってくる。カルマが見ていないことを確認した上で深々と腰を折った。

「殺せんせー。カルマのこと、救ってください。本当にありがとうございます。ざいやす」

「いえいえ。それにしても有粋さん、何故ご自分で諭さずカルマくんのケアを先生に任せようと思ったんですか？ 貴方ほど友達思いな子なら、それを面倒だとも考えないでしょうに」

前日から疑問に感じていたことをやっと尋ねれば、有粋は頭を下げたままポリポリと頬を掻いて、それからゆっくり顔を上げる。

その表情はどこか気恥かしげで、自慢げでもあった。

「そりゃア、あれだ。アタシがアイツの味方なんてのア、太陽が西に沈むのと同じぐれエ当たり前なコトだからな。今さらアタシがカルマに何してやったって、そんなの救いでも何でもないただの日常茶飯事でしかねエのさ」

「……なるほど。仲が良すぎるとそういう弊害もあるんですねえ」

いつも味方で絶対に裏切らないと確信できる唯一無二の親友。

そんなポジションを獲得しているからこそ、彼女がカルマにどれだけ優しい言葉をかけたとしても、それは救いの手にはならない。

「いつも通りの親友」が傍にいるだけだ。

一人うんうんと納得する殺せんせーに再度頭を下げて、有粋は去っていく。カルマの後を追いかける。

そんな二人を見つめながら歩く渚の目には、祝福と憧憬の色があつて。

(渚くんも、もっと二人と仲良くなれるといいですねえ)

生暖かい目で生徒たちを見守りながら、殺せんせーは今日も軽い自

分の財布を懐にしまうのだった。

第五話：天然毒娘との出会い

花槍有粹がE組落ちになった最終的な決め手は、親友の赤羽業の信頼を手酷く裏切った教師を一発ぶん殴ったからだ。

しかし決め手がそれだったというだけで、他にも理由となった暴力沙汰はたくさんある。

奥田愛美との出会いは、その数ある暴力沙汰の一つが関係していた。

あれは2年の終わり頃だっただろうか。

その日は珍しくカルマが風邪をひいて学校を休んでおり、渚も職員室に用事があるということで、一人きりの昼食としゃれこんでいた。

屋上といえば人気の昼食スポットというイメージが強いが、実際は強風が来るし座ったら制服が汚れるし目にゴミが入るしで良いことなど何も無い。

しいていえば日当たりは良好だが、その程度の条件は中庭でも教室の窓際席でも同じこと。

そんな場所でわざわざ焼きそばパンを食べているのは、なにも有粹がマゾヒストだからというわけではない。

ただ、一人で教室にいと人の視線がうるさくて落ち着かないのだ。

「カルマとつるんでるときゃア、楽しさが勝って気にならねエんだがな……」

親友と一緒にいることに慣れすぎてしまって、こうして一人になるとどうにもこうにも調子が狂う。

そんなこんなでリラックスできる空間を求めた有粹は、こうして不便ながらもそれゆえ人が集まってこない屋上で昼食をとるに至ったのだ。

……しかし人気の無い場所というのは、それはそれで有粹のように

“別の目的”を持った人種が集まってくるものらしい。

階段を上ってくる二人分の足音を耳で拾った有粋は、下手に顔を合わせて怯えられる前にと給水塔の裏に素早く身を滑り込ませた。

ギイイ、と蝶番を軋ませて金属製の扉が重々しく開く。

屋上に入ってきたのは可もなく不可もない容姿をした普通の男子生徒と、一件その男子生徒と同レベルに見えるかもしれないが、メガネを外して髪型さえ変えれば一気に化けるだろうポテンシャルを秘めた三つ編みの女子生徒だった。

昼休みの屋上に男と女。これだけなら思い浮かぶのは『告白』の二文字だ。

当然有粋もその可能性を真つ先に考えて、やつちまったなあ、としどけなく給水塔にもたれかかる。

人の恋路を覗き見るのは野暮な真似。有粋—— “粋が有る” という己の名に反する行いは、進んでほしいと思わないのが正直なところ。

けれども立ち会ってしまった以上はしようがない。せめて変なタイミングで物音をたてて二人の邪魔にならないようにしなければ。

「奥田さん。俺、キミのことがずっと気になってたんだ」

「はあ、そうなんですか」

これから自分が告白されることを未だ察せていないのか、奥田さんと呼ばれた三つ編みの少女はなんとも気の抜けた返事をしている。

初心というか無垢というか……いや、あれこそ巷でいう天然女子というやつなのかもしれない。噂には聞いていたが、人生で初めてお目にかかる人種だ。

「だから俺と付き合ってくれるよね？」

妙に上から目線な物言いである。

百戦錬磨の女たらしと噂される榊原蓮や前原陽斗であれば自信

満々な態度にも納得いくが、あの男子生徒は決して女子ウケが良いようにもモテ慣れているようにも見えない。

それでいてあの態度。いったい何が彼をあそこまで増長させているのだろうか。

「五英傑には及ばないけど、俺はA組でも上から数えたほうが早いくらい成績優秀なんだ。理科でしか俺を上回っていないキミが、よもや俺の告白を断るなんて真似はしないだろう?」

疑問は男子生徒の嫌味つたらしい口ぶりで氷解した。

この櫛ヶ丘中学のシステムは、言うなれば成績至上主義。学業に秀でた優等生がありとあらゆる面で尊重される。優れた者こそ偉い者。

さすがに〃A組以下の生徒はA組生徒からの告白を断ってはならない〃なんて馬鹿みたいなルールこそ無いが、それでも格差や差別意識は全校生徒に深く根付いて言動に影響をもたらしている。

中には「成績の悪い者は成績の良い者の奴隷になっていればいい」くらいの思想を持った生徒も存在しており——いま目の前にいる男子生徒は、ド直球でそのタイプだった。

「え、断りますよ?」

だからこそ、多少歪んでいるとはいえ好意を向けている女子生徒からそんな風にフられることが許せなかったのだろう。

ほんの一瞬だけ呆気にとられたかと思えば激情に顔色を変え、男子生徒は己の腕を大きく振り上げた。

間違いない。あの華奢な女子生徒の頬を殴るつもりだ。

(オイオイ、小者ちんころくせエ真似してんじゃねエぞツ)

堅気の惚れた腫れたに口うるさく介入するつもりは無くとも、暴力沙汰となれば話は別。

舌打ち混じりにコンクリートを蹴って急加速した有粋は、そのまま勢いを殺さず男子生徒の体側面から強烈なラリアットをかます。

日本プロレス界では有名な、助走の勢いを利用して放つ「ランニング式」と銘打たれたものだ。

相手の首元や胸に己の腕の内側を打ち当てる、広義では当身の一

種。

「げぼらばあつ!?!」

何が起こったのか分からないまま、交通事故並のダメージと共に地面へと引き倒された男子生徒。漏れ出る苦悶は唾液混じり。

「きゃあつー!」

遅れて上がった悲鳴は男子生徒と異なり可憐な響き。

有粋が最も好むのは、カルマの尾を引くような艶があつて低いくせに妙に甘ったるい悪戯めいた美声だが、この女子生徒のソプラノボイスもなかなか耳に心地良い。

それだけに怖がらせてしまったことへの申し訳なきが先立つが、背に腹は代えられない。それに登場するだけで怯えられるのはよくある事だ。

加えて今回はラリアットまで繰り出しているわけで。ビビられるのも無理はないというか、むしろ当たり前というか。

「あー……まア、なんだ。怪我アねエかい。お嬢ちゃん」

胸元を抑えたまま地面を転がり回る男子生徒はいつたん捨て置いて、あやうく殴られかけていた女子生徒の奥田さんへの安否確認を行う。

叫んだからには青ざめた顔で肩を震わせるくらいのリアクションはされていると覚悟を決めていた。

にも関わらず、振り向いた先の奥田さんは意外と平気そうな様子で拍子抜けしてしまう。

「案外、肝っ玉据わってんのな。目の前で野郎が一人悶絶してるってエのに」

「え？ いや、だってこれってドツキリですよね？」

「……あ？」

きよとんとした表情で予想外の発言をされて、珍しいことに面食らう有粋。

どこからその発想が湧いてきた。ひよっとしてこの女子生徒、天然ではなくド天然なのか。

訝しげな形相の裏で失礼な考えを巡らせる有粋に、奥田さんはのほほんとした空気感のまま話を続けた。

「だって私に告白する人なんているわけじゃないじゃないですか！ だいたい私、男の子より理科の問題と触れ合ってる時のほうがドキドキしますし！」

「いや、お嬢ちゃんの好きな教科とお嬢ちゃんを好きになる男の有無ってやつア、あまり関係ねエと思うが……」

「じゃあ聞きますけど、貴方は私に告白したいと思うほどの魅力を感じますか？」

想定外の切り返しにたじろぎそうだ。あと十中八九この子にも性別を誤認されている。それはいつもの事ではないが。

さて、どうしたものか。

ここで「自分は女だけでも男に生まれていたら告白していたと思う」なんてI Fを語ったところで信用性は薄いし、かといって誤解を解く過程をすっ飛ばして「NO」と答えるのも、問題の解決にならないという意味で気が引ける。

どうにもこの女子生徒、このまま放っておいたら天然気質が治らな

いどころか悪化して将来とんでもない男とくつついてしまわないか心配になるのだ。

だから出来るならここで釘を刺して、魅力云々の自覚は無理だとしても、せめて、自分に魅力を感じる男もこの世にはいる、ということくらいは自覚して貰いたい。

(となりやア、手っ取り早い手段はコレか)

弾き出した解決策を実行すべく、有粋は奥田さんの細い体を軽く押し、壁へと押し付ける。

同時に頭をはさむ形で両腕をつき、目をすつと細めながら相手の可愛らしい顔を見下ろしつつ距離を近づけていく。

目指すイメージは、ぞつとするほど色気のある視線と笑み。どこか禍々しい、淫蕩な雰囲気の色男。

要するに有粋は、出会ったばかりの女子生徒に対し男の色気全開の壁ドンを仕掛けていた。

女の身で男の色気が出せるかどうかの議論は無意味。出るものが出るのだから仕方がない。

「感じるって言やア、どうするっ..」

吐息混じりの濡れたハスキーボイス。

できるだけスケベったらしく、努力の限りいやらしく、それだけで女を腰砕きにするセクシーさを目標に耳元で囁いてみた。

心の中では「床ドンのほうが効果あったか?」「いや、股ドンに顎クイのほうが良かったかもしれない」「アタシのルックスなら足ドンもありか」「そもそも両手でやる壁ドンって両手ドンに名前変わるんだっけ」などと色々な考えがグルグル巡回飛行し続けている。

いかにも経験豊富そうで威圧感もたつぷりの男前(みたいなルックスの女)に突然こんな迫り方をされれば、いくらド天然少女でも己が『女』であることを意識せずにはいられない。

これを機にもう少し危機意識を持って、変な男子生徒を引っ掛けなように気を付けて欲しい。

そんな思いを内に秘めたまま肉食系イケメン演技を続ける有粋だったが、その努力も虚しく。

「そうですね……貴方が変な人だと思います！」

無邪気な笑顔でそんなことを言われてしまい、有粋は襲い来る脱力感に耐え切れずがっくりと肩を落とした。

……この少女、天然でもド天然でもない。超下級の天然である。



「——ってエのが、アタシと奥田さんとの出会いだっただけかな」

「ふーん。俺が熱で寝込んでる間に自分は女の子口説いてたんだあ」

朝イチの実験授業で殺せんせーに真正面から毒を渡すという正直すぎるにも程がある暗殺を執行した女子生徒・奥田愛美。

そんな彼女について知っていることがあるかと尋ねられたので素直に思い出話まで含めた情報を吐き出せば、親友から返って来たのは随分と人聞きの悪い台詞だった。

様になったニヤニヤ顔に加えて、小悪魔的なツノとシッポの幻覚まで見える。

茶化されたのが渚や寺坂なら良い反応をするだろうが、そこはカルマと12年の付き合いがある有粋のこと。

慌てふためくどころか、二枚目役者ばりの流し目を親友に向けて机に肘をつき、アダルトオーラ満載の笑みを唇に刻んでみせる。

「嫉妬してくれてんのかい？ 相変わらず可愛くってたまんねエ
なア、アタシの親友は。心配しなくてもテメエが一番だ。テメエがい
なきや生きてらんねエ。愛してるぜ」

「……ごめん。有粋にこういうネタで勝とうとした俺が間違ってた。
それ以上はもうギブアップ」

「わかりやあ良い。ああ、ちなにみに今の言葉、一つも嘘カつタいチちヤい
ねエぞ？」

「つ……！ 有粋の口説き魔！ 人たらし!!」

「アタシが口説き魔だとすりやア、そら間違はなくテメエのせいだぜ、
カルマ。なにせアタシが生まれて初めて口説きたいと思った相手は
テメエだからな。テメエの魅力がアタシを人たらしにしたって寸法
さ」

「~~~~~つ!!」

朝っぱらから砂糖吐きそうな蔷薇色BL空間を形成している親友
コンビを、クラスメイトたちが生暖かかったりギラついたりしている
目で眺めながら通り過ぎてゆく。

間違はなく有粋が攻めね、と誰かの眩きが渚の耳をかすめる。

ボーイズラブじゃないよ、ノーマルだよ！ なんてツツコミを入れ
る人間は一人としていない。悪いのはクラスメイトの目ではない。
イケメンすぎる有粋のビジュアルだ。

そしてこれだけイチャついておきながら、二人の間に友情以上の感
情はないというのだから驚きである。

そう考えれば、逆にカルマと有粋の性別が同じでなくて良かったの
かもしれない。これが男同士でも女同士でも、傍から見れば同性愛者
扱いは免れないやりとりだ。

「そういえば奥田さん、毒薬を作ってくる宿題出されたんだっけ？
ほんとに効くのかなあ？ 楽しみだよねー」

有粋の愛ある（むしろ愛しかない）言葉責めから逃れるべく無理やり話題転換をしたカルマ。その頬はまだ朱色を帯びている。

それからは、やって来た殺せんせーに奥田さんが渡した毒が実は細胞の流動性を増す薬だったり、騙したんですかとシヨックを受ける奥田さんに殺せんせーが国語力の必要性を説いたり、上手な毒の盛り方（国語力）と上手な毒の作り方（理科力）を両方高めようという結論で落ち着いたり、それに奥田さんが元氣良く返事したり、まあなんだかんだで丸く一日が収まった。

殺せんせーという存在の前では、猛毒を持った生徒でもただの生徒になってしまう。

超生物の命に迫れる生徒は、まだまだ出そうになかった。

第六話：ハニートラツパー襲来

外国語の臨時教師として殺せんせーから紹介されたその女性は、一言でいうなれば『美女』、二言でいうなれば『悩殺ものの美女』であった。

豊かに波打ちながら腰まで伸びた、月光の帯と見紛う純金の髪。抉り取って磨けば宝飾品として高級店に売り出せそうなブルーサファイアの瞳。

切ると中から血の代わりにミルクが染み出てきそうな純白の肌。一つの芸術品のように仕上がった薔薇色の頬からは幸せオーラが溢れ出している。

春をかき集めたみたいなたんぱく色の唇はひどく艶やかで。それ自体が発光しているのだと見間違えそうなほどの美貌は、単品ならば清楚の香りすらするというのに、砂時計よりも凹凸に恵まれたプロポーシヨンのせいで妖しい色香を匂わせるものに成っている。

「イリーナ・イエラビッチと申します。皆さんよろしく！」

そんなヴィーナス級の美女、もといイリーナ・イエラビッチ先生に満面の笑みで抱きつかれているのは我らが殺せんせー。

……この二人の間に何があったのかは分からない。が、イリーナの様子を見るに好感度の上がるようなアクシデントを既に終えてきたようだ。

(すっぱー美人)

(おっぱいやべーな)

(……で、なんでベタベタなの?)

(親父の情婦よりイイ体してるぜ……とか、有粋なら考えてるんだろ
うね)

(親父の情婦よりイイ体してるぜ)

やりとりを眺める生徒たちがそれぞれ思い思いのコメントを心の中だけで発していく。

鳥間先生曰く、本格的な外国語に触れさせたいという学校の意向で、英語の半分はイリーナ先生の受け持ちになるらしい。

それが真実かどうかはさて置き、ここが学校である以上、体裁とか体面とかいうものは必要不可欠なのだ。

「……なんか凄い先生が来たね。しかも殺せんせーに好意あるっぽいし」

「どうだかなア。ブラックデビルのローズ吸ってる女スケなんざ、ほとんどが曲者揃いだぜ」

「ブラ……？ 何それ」

「海外製の珍しいタバコの銘柄。吸ってんのア香りでわかった。アタシの身近だと、ガールズバーだの出会い喫茶なので働いてるような手合いがよく気に入ってらア」

「何でそんな知り合いがいるの!？」

「……親父の縄張りマにある歓楽街を見回りがてらウロついてたら、路地裏でハメ外しすぎたバカに襲われてるのを発見しちゃってな。助けたら露骨にラブホテルに誘われた。んで、性別バラしても『せめてメールアドレスだけでも』って食いつかれた」

「わあ……女子中学生とは思えない馴れ初めだね……」

茅野が引いたような感心したような様子で締めくくった。

ちなみに有粋、他にも似たような経緯で風俗店のプロ女性や家出中のギャルから好意を寄せられたり、男と勘違いされたまま助けた男（ただしゲイ）にケツを捧げられそうになったりしたこともある。どうやって掘れというんだ。

こんな女と頻繁につるんでいるものだから、親友のカルマまでもがマセガキ通り越して早熟になってしまった。

今ではフェロモンムンムのグラマラスなお姉様から誘惑されて

も顔色一つ変えずあしらえる。もちろん有粋も余裕で断れるが、これは同性なので当たり前。

「でも、これって暗殺のヒントになりそうだよね」

茅野と有粋の会話を黙って聞いていた渚が、ふとそんなことを呟いた。

手にはいつも殺せんせーの弱点を書いているメモ帳と愛用のボールペン。

「タコ型生物の殺せんせーが、人間の女の人にベタベタされても戸惑うだけだ。いつも独特の顔色を見せる殺せんせーが、戸惑う時はどんな顔か……」

「言われてみりゃア、確かに気になってくんない」

渚と同じく有粋も殺せんせーの顔を注視する。

一切のリアクションを見逃さないよう目を凝らす、その眼差しの鋭さは心臓の弱いおじいちゃんならギャングに睨まれていると勘違いしてシヨック死しそうなほど。

わざとやっているのではない。元から目力が凄いから、殺気を出すまでもなく相手を威圧してしまうのだ。

殺せんせーの視線がゆつくりと動く。

生徒たちのほうからイリーナ先生の美貌へと、そして美貌から胸元へと。

たわわに実った果実のごとき双丘が造り上げる素晴らしい谷間。至近距離でそれを鑑賞した殺せんせーは、皮膚の色を桜のようなピンク色に変え、だらしなく口元をゆるませた。

なんというか、つまり……普通にデレデレである。

「どうやらタコ型生物、人間のメスもアリらしい。」

「ああ……見れば見るほど素敵ですわあ。その正露丸のようなつぶら

な瞳。曖昧な関節。私、虜になってしまいたい」
「いやあ、お恥ずかしい」

ハートマークを飛ばしながら密着スキンシップを仕掛け続けるイリーナ先生と、美女が自分に擦り寄って愛を囁いてくる幸せな状況にすっかり舞い上がって照れまくっている殺せんせー。

二人を見ている生徒たちは内心ツツコミしたい気持ちでいっぱいだ。

騙されないでくれ、殺せんせー。そこがツボな女なんていない。女子生徒からの心の叫びが聞こえてきそう。

(……僕らはそこまで鈍くない。この時期にこのクラスにやって来る先生。結構な確率で、タダ者じゃない)

確信にも似た渚の予感、もちろん的中することになる。



「へい、パス！」

「へい暗殺!!」

窓の外では殺せんせーと生徒たちがサッカーと暗殺を同時進行で楽しんでいる。

サッカーボールとナイフと拳銃が入り乱れる光景はかなり奇っ怪だが、このクラスの者にしてみれば既に日常風景そのものだ。

停学が明けたばかりのカルマと有粋ですら既に馴染みきっている。どころか、カルマにいたってはむしろ古参の面子よりも楽しそうだ。

そんな何だかんだで平和な眺めを冷めた目で一瞥しながら、イリーナ・イエラビッチはタバコに火をつけた。

「色々と接近の手段は用意してたけど……まさか色仕掛けが通じるとは思わなかったわ」

「ああ、俺も予想外だ」

隣の鳥間が呆れ返った様子で同意する。

イリーナが吸っているタバコの銘柄は、有粋が香りから判別した通りにブラックデビルのローズ。

箱も中身も全てピンク色で統一された、男が街中で吸っていたら二度見どころか三度見くらいはされそうな女性限定感のあるデザインが特徴。

そんな癖の強いタバコが完璧に似合ってしまうあたり、彼女にはやはり凡庸な女にはない洗練されたオーラがあるということだろう。

それもそのはず。

イリーナ・イエラビッチ——何を隠そう、職業は殺し屋。

類まれなる美貌と官能的な肢体に加え、十カ国語を操る対話能力を持つ。

それらを利用していかなる国のガードの固いターゲットでも、本人や部下を魅了して容易に近づき、至近距離からたやすく殺す。

潜入と接近を高度にこなす暗殺者。

世界中で11件の仕事の実績がある、正真正銘のプロのアサシン。今回のターゲットはもちろん例のタコ型超生物……すなわち殺せんせーである。

「だが、ただの殺し屋を学校で雇うのはさすがに問題だ。表向きのため教師の仕事もやってもらうぞ」

「……ああ、別にいいけど」

鳥間の話を半分聞き流しながら、イリーナはふつと蠱惑的な笑みを

浮かべ踵を返す。向かう先はターゲットのいる校庭。

去り際に少しばかり振り向いて鳥間に見せたその表情は、己の力量に絶対の自信を持つハニートラップの達人としてのものだった。

「私はプロよ。授業なんてやる間もなく仕事は終わるわ」



またあの香りが鼻腔をくすぐった。

ブラックデビルのローズ。酸いも甘いも噛み締めて咲く妖艶な薔薇の匂い。

アンダーグラウンドの女たちがよく好む華やかで刺激的な一本。タール混じりのそれに誘われるがままに振り返れば、そこにいたのは想像通りイリーナ。

彼女は有粋には目もくれず殺せんせーへと一直線に向かっていく。

「殺せんせー！」

語尾が上擦った甘ったるい声だ。

彼女には媚びたような声よりも強気な声のほうが似合いそうなのに、なんて思ってしまうが、殺せんせー的にはそうでもないらしい。名前を呼んで駆け寄せられただけでまたもデレデレしている。

「鳥間先生から聞きましたわ。すっごく足がお速いんですって？」

「いやあ。それほどでもないですなあ」

「ね、お願いがあるの。一度本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて。私が英語を教える間に買って来て下さらない？」

上目遣いに顔を見上げながら、殺せんせーの触手を両手でぎゅつと握り締め、自然な動きで谷間へと押し付ける。

ただでさえ緩みきった殺せんせーの口元がさらにだらしなくほぐれた。

「お安い御用です。ベトナムに良い店を知ってますから」

言うが早いか、快諾してから一秒とたたないうちにマツハでベトナムへと旅立っていった。

風圧でイリーナと周りにいた生徒たちの髪が翻る。

同時に鳴り響いた授業終了のチャイムをBGMに、恐る恐るといった雰囲気でクラスを代表して磯貝が話しかけた。

「で、えーと……イリーナ先生？ 授業始まるし、教室戻ります？」

「授業？ ああ……各自適当に自習でもしてなさい」

先程までとは打って変わってそっけない対応。

かぶっていた猫を外したイリーナの姿は、生徒たちの困惑を買っていた。

小洒落た細工の施されたライターで再度タバコに火をつける。

流行りのリップを塗った唇にそれを啜えてふかす仕草は、色気で男共から金を巻き上げて暮らす女など見慣れた有粋からしても充分に魅力的なものだった。

同じ色仕掛けを生業とする者でも、やはり世界を股にかけている女と歓楽街に腰かけている女とは練度が違うらしい。

「それと、ファーストネームで気安く呼ぶのやめてくれる？ あのタ

コの前以外では先生を演じるつもりないし、『イエラビッチお姉様』と呼びなさい」

「……………」

そう言われて「はい」と頷く素直な生徒など居ようはずもなく。微妙に陰悪な空気で誰もが無言を貫く中、沈黙に一石投じたのはやはりカルマだった。

こういう場面で第一声を発するのは大抵この少年の役目だ。

「……で、どーすんの？ ビッチねえさん」

「略すな！」

冷めた態度のイリーナも叫ばずにはいられないあだ名の酷さ。

「聡いカルマのことだから、もちろんわざと付けたに決まっている。

初対面の殺し屋すらも茶化しにかかる強かさは正にあっばれ。」

「あんた殺し屋なんでしょ？ クラス総がかりで殺せないモンスター、ビッチねえさん一人でやれんの？」

「……ガキが。大人にはね。大人の殺り方があるのよ。潮田渚ってアンタよね？」

唐突に呼びかけられた渚が小首をかしげた次の瞬間、イリーナの艶やかな唇が彼の唇を奪った。

中学生には刺激的な場面に大半の生徒が赤面する中、面白そうな表情でそれを眺めるカルマと真顔の有粋は相変わらず。

キスを喰らったのがこの二人であればそれなりの反撃も可能だったかもしれないが、当の渚は純情少年である。

もちろんキスのテクニクを競うことなど出来ない。

ひたすら一方的に口内を嬲られ続け、数秒たって解放された時には、もう気絶寸前の骨抜き状態になっていた。

「あとで職員室にいらっしやい。あんたが調べた奴の情報、聞いてみたいわ。……ま、強制的に話させる方法なんていくらでもあるけどね」

裏の仕事に浸かって長い人間特有の、ゾツとするような眼差しでイリーナは囁く。拷問か人質か誘惑か。彼女がどのような手段を想定して今の発言をしたのかは分からないが、何にせよ脅しであることに間違いはない。

無駄に堅気をビビらせやがってと、有粋はひそかに眉根を寄せた。ヤクザでも、やたらと一般人に威圧的だったり暴力的な振る舞いをする手合いは所詮ただのチンピラで、任侠のなんたるかを理解していないことが多い。

極道筋は、悪党ではなく必要悪でなければならぬ。その違いを分からぬ愚か者が境界線を見誤って不埒な行いをしてきたせいで、確固たる信念を持ったヤクザまでもが白い目で見られる世の中になってしまった。

だからこそ、彼女が「己が暗殺者である」ということに誇りを持っているならば、なおのこと節度ある振る舞いをするべきだ。

なにも下手に出るとかそういう訳ではない。過剰な威圧と見下した態度を軟化させただけで、このクラスの生徒たちはもつと協力的な対応をしてくれるだろうに。

……なんて考えている有粋だが、彼女は例えイリーナの態度が良かったとしても積極的に手を貸すことはない。

イリーナが気に入らないのではなく、カルマを気に入りにすぎているがゆえだ。

親友であるカルマが自分の手で殺せんせーを殺したがっているから、他の人間に殺されると困る。そんなブレない理由があつての思想。

「その他も！ 有力な情報持つてる子は話しに来なさい！ 良い事してあげるわよ。女子にはオトコだって貸してあげるし」

「……人のツラに文句つける趣味なんざねエが、あの野郎共を貸してやるって言われて釣られる奴ア少ないんじゃねエかな」

有粋はイリーナの背後にやって来た男三人組を眺めながら、彼らには聞こえない程度の小さな声で思わずツツこむ。

どうやら近くにいた生徒たちには届いてしまったらしく、寺坂グループの連中がこっそり吹き出していた。

一部生徒の間で自分の連れが笑いものにされているとは露知らず、イリーナのご高説は続く。

「技術も人脈も全てあるのがプロの仕事よ。ガキは外野で大人しく押んでなさい。あと、少しでも私の暗殺の邪魔したら……殺すわよ」

今の世の中ではありふれたその言葉に重みを感じさせるのは流石だ。

手にしたデリンジャーの馴染み具合に、彼女がプロの殺し屋であること多くの生徒たちが実感したことだろう。

けれども同時に、彼ら彼女らと思う。

この先生は——嫌いだ。

「なあ、暗殺者さん」

場に険悪な雰囲気を残したまま立ち去ろうとしていたイリーナ一行にかけられたハスキーボイス。

掠れた色男風のそれはもちろん花槍有粋の声である。

「……何？ 邪魔したら殺すって言わなかったかしら？」

「華と棘を持ったアンタにその『薔薇』ア大層お似合いだが、殺せんせーってお人の嗅覚は結構敏感でね。しばらく絶つといたほうがいいぜ。なにせ特徴的な香りだから、周りの野郎連中に染み付いちまえばそれだけで闇討ちも台無しだ」

「あら……よく分かったわね。これが香水じゃなくタバコの匂いだなんて」

「親父の足元で羽ばたいてる夜の蝶たちもそいつがお気に入りだな。」

飛んでこられるたびに嗅いでたんじゃ、自然と覚えちゃう」

振り向いた当初は億劫そうなイリーナだったが、有粋の発言を聞いてその表情を一転。

面白い獲物を見つけた女豹の眼差しで、べろりと唇を舐め上げた。スケベ親父ならそれだけでヨダレを垂らしかねない妖艶な仕草である。

「その年にしちやなかなか上出来のイイ男じゃない。仕事が終わったら遊んであげるわ」

「そいつアどうも」

肩を竦めて誘惑をかわす有粋。

性別に関する誤解を否定しないのは、単に話をこじらせるのが面倒臭いからだ。

ちなみにこのタイミングでわざわざイリーナに声をかけたのも、渚から少しでも興味を逸らして出来る限り身の安全を確保してやるためであり、イリーナへの親切心によるものではない。

逆に言えば、渚への親切心による行動。

この女が愛しているのは親友だけが、好いているのは友人もだ。そして有粋は渚を貴重な友人の一人としてしっかり大事にしている。

「よっ、スケコマシ女騙し」

真隣の親友から半笑いでボソリとからかわれたが、ひとまずスルーしておこう。

本音を言えば、今すぐ「本気でコマシ口説きたいのはテメエだけだぜ」とでも返して恥ずかしがらせてやりたいのだが。

第七話：色女と色男（仮）

イリーナに迫られ手持ちの情報を全て吐き出しきった渚は、教室へと帰ってきて早々に有粋から熱心なボディチェックを受けた。

安否確認のつもりらしい。目に見える場所から目に見えない場所まで、小さな怪我でも見逃すまいと丁寧ながらも念入りな手つきで渚の体に触れて回っている。

この触れ合いがカルマと有粋なら同性同士に見えるが、渚と有粋なら異性同士に見える。もちろん渚が女と間違われる側だ。

「……よし。怪我ア大丈夫みてエだな」

「うん。殺せんせーの情報教えたら、あつさり解放されたから」

本当は、イリーナにせびられたのは殺せんせーの情報だけではない。

口にしていた通り、彼女は有粋に興味を抱いたようで、彼女の異性の好みだとか付き合った人数の有無だとか色々と聞かれたのだ。

性別の誤解を解くのは容易いことだが、本人がそうしなかつたのなら何かそれなりの理由があるに違いない。

そう判断を下して、渚もまた有粋の性別については特に触れず質問に答えた。

（1年の頃からわかってた事だけど、有粋くん、本当にモテるよね。年下から年上まで女性を選び取りみどりって感じで……そういうフェロモンとか出てるのかも）

世界中のVIPを暗殺して回り、イイ男などとは存分に接してきたであろうイリーナの心をも惹きつける天性の色男オーラ。

全盛期には道を歩いているだけで「貴方のものにして」と寄ってくる女がわんさかいたらしい父親の若かりし姿に瓜二つで、本人も情に

厚く義を重んずる非常に男らしい性格。

つくづく女にしておくのがもつたいない。

けれども彼女を夢中にさせる存在といえれば赤羽業ただ一人で、そのカルマでさえ、愛してはいるが色恋ではなく友情としてである。

女泣かせもいいところだ。魔性の女にも効く天然ジゴロの才能を持った女子中学生なんて世の中にそうそういるまい。

「ちよつと。入口でモタモタしないでよ」

職員室から戻ってきたイリーナが、扉の向こうでしかめっ面をしている。

慌てて場所を譲る渚。そうされて当然とばかりの態度で教室に踏み込んだイリーナだったが、ちょうど廊下からは扉で隠れて見えない位置に有粋が立っているのを発見し、その形相を無愛想からコケティッシュなものへと変えた。

有粋のほうも、先程までのただ渚を心配する表情とは打って変わって、いつの間にもやら伊達男めいた笑みの形に目元口元を動かしている。

途端に溢れ出る色気は遊び人もかくや。誰が見たって、こういう表情をしている時の有粋はとてもじゃないが女子中学生とは思えない。女子と思われないのはいつでもそうなのだが。

「未知の生物を殺す仕事は初めてだけど、準備は万端。さつさと終わらせてアンタを私の虜にしてあげるわ」

「俺も楽しみにしちゃいるが……暗殺者の姉さん、タバコやめてねエんだな。さつきより匂いが濃くなっちゃまってらア」

「この程度で今回のプランに支障はないわよ。私はあらゆる状況で暗殺をこなしてきたプロ中のプロ。イリーナ・イエラビッチを舐めてもらっちゃ困るわ」

「そいつア頼もしいこつた」

ふふんと自信満々に胸を張るイリーナと、色男的な表情は崩さぬまま、内心「どうにも不安だぜ」と溜息を吐く有粹。

カルマの暗殺を応援している有粹としては、ここでイリーナが失敗してくれるのは万々歳とまでは行かなくとも僥倖ではある。

が、それとこれとは話が別。

目の前で慢心しきっている人間がいると、たとえそれが己にとつて有難いことだとしても苦い気持ちを覚えずにはいられない。

もつと真剣に万全を期して取り組めば、この人はきつと今より高度な暗殺計画を思い浮かべられるだろうに。

もつたいない、と。素人の身ながらそう感じてしまうのだ。

「なー、ビッチ姉さん。チャイム鳴ってんだから授業してくれよー」

出入り口付近で有粹に妖艶な笑みを見せたまま雑談をやめようとならないイリーナに、最前列席の前原からブーイングが飛ぶ。

そこから堰を切ったように他の生徒たちからも野次と文句が投げつけられた。

「そーだよビッチ姉さん」

「一応ここじゃ先生なんだからビッチ姉さん」

「花槍に色目使ってないでちゃんとしてよビッチ姉さん」

「あーもう!! ビッチビッチうるさいわねッ!」

全員そういうキャラ付けでもしているみたいに語尾に『ビッチ姉さん』とつけてくるものだから、当初はわりとクールぶっていたイリーナも我慢しきれず大口を開けて怒鳴り返してしまう。

将来とてつもなくイイ男になりそう（とイリーナには思われている）な有粹を自分の魅力でたらしこむためにお色気お姉さんを演じぬく予定が彼女の中にはあったのだが、そんなものはこのクラスの生徒たちの遠慮ない発言の数々によって台無しになっている。

当の有粹は婀娜を気取ったイリーナよりも、そういう感情を剥き出

しにしたイリーナのほうがなんとなく好きだな、なんて考えてりしているのだが。

「まず正確な発音が違う！ アンタら日本人はBとVの区別もつかないのね！ 正しいVの発音を教えたいわッ！ まずは歯で下唇を軽く噛む!!」

怒りながらも英語の指導っぽい内容の発言をしてくれたので、やつと授業を始めてくれる気になったのかと思いつつ、生徒たちは言われた通りに下唇を噛む。

「……そう。そのまま1時間過ぐしていれば静かでもいいわ」

次に聞こえたイリーナの言葉がそんな内容だったせいで、もちろん僅かな好感触の気配も粉微塵に消え去った。

なんだこの授業!?

生徒たちが下唇を噛んだまま額に血管を浮かせたあたりで、未だ自分の席に戻っていなかった有粋が「イエラビッチの姉さん」と持ち前のハスキーボイスに艶っぽさを滲ませる。

そのままスリと彼女の腰に片腕を回せば、男の渚も感嘆を漏らさずにはいられない指先まで流麗な動きでイリーナの体を自分のほうへと自然に引き寄せ、耳元に唇を寄せながら再度甘美に囁いた。

「アンタの耳に馴染んだ言葉で、アンタを口説いてみてエんだ。だが恥ずかしいことに、俺ア英語ってやつがどうにも苦手だね。情けをかけちゃくれねエかい？」

直に囁かれたわけでもないのに、近くに居る渚どころか後ろのほうにいる神崎有希子や速水凜香までもが頬をカアッと赤らめるほどの、背筋に痺れが走りまくる低音エロボイス。

いわゆるゾクゾクするイイ声というやつを、ゼロ距離で何の構えも

なしに喰らったイリーナはといえば、まるで初めて男に話しかけられた初心な乙女のように顔を朱色一色に染めて熱い吐息をこぼした。

心なし教室内にムーディーな雰囲気立ち込めはじめ。秘部を晒してもいないのに年齢制限がかかりそうな空気は、ひとえにイケメンの色香ゆえ。

「あつ……し、仕方ないわね。私が教えてあげる」

「ありがとう。イエラビッチの姉さん」

「イリーナでいいわよ……アンタは特別」

びくんと肩を震わせて、睦言のような熱のこもった声と共に有粋の首に腕を回す。

絡み合う眼差し。交じり合う吐息。官能的なBGMが聞こえてきそうな大人びたムード。照明の色をピンクに幻視してしまういかがわしさ。

(こ、これは……。有粋くん、僕らのためにビッチ姉さんが英語を教えしてくれるよう体を張って誘導してくれてるんだらうけど……)

これでは誘導ではなくもはや誘惑。

義務教育の真っ只中にいる15歳児たちにはちよつぱり刺激が強すぎる。

カルマだけは親友の「ああいった雰囲気」になれているのか、一人こつそり口笛なんて吹いていて。

結局それから始まった英語の授業は、内容よりもエロティックな空気感のほうに意識を持って行かれてまったく頭に入ってこなかった。

PS、有粋には女にハニートラップを仕掛ける才能があるかもしれない。



「じゃ、次の時間に殺ってくるわ。待っててね有粋」

そんな言葉をハートマーク付きで残して、イリーナは殺せんせーの元へと向かっていった。

英語を終えて体育の授業。人型ならぬ殺せんせー型のマットに対してBB弾を撃ち込む練習をしていたE組生徒たちは、二人してしつぱり倉庫にしけこんでいくイリーナと殺せんせーを見て顔をしかめる。

「おいおいマジか。二人きりで人気のない倉庫にしけこんで行くぞ」「なーんかガツカリだな殺せんせー。あんな見え見えの女に引つかかっちゃって」

「でもビッチ姉さんも花槍に誑かされてたくらいだし、案外チヨロいんじゃないかね？」

「いや、あれは有粋くんが規格外に天賦の女たらしだったってだけじゃないかな……」

熱視線を有粋に向けながらの平等とは呼べない授業態度だったが、それでもイリーナの英語の教え方は中々上手だった。

さすが外国人というだけあって発音は本格的だし、途中でイリーナのやる気が途切れそうになれば、有粋が「アンタの声、気持ちが良いな。ずっと聞いてたくならア」なんて合いの手を入れてくれるし、あまりにもネイティブすぎる発音に聞き取りにくそうにしている生徒がいれば、目ざとくそれを見抜いた有粋がやはり「今のトコ、もっぺん言っちゃくれねエか？ アンタの口から出た言葉は全部ココに刻んどきてエんだ」とセクシーな笑みで胸元を撫でたりして授業が半端で終わらないよう頑張ってくれた。

男前は普段と同じだが、演技が加われば凛々しさよりも艶やかさが

際立つのが花槍有粋という少女の容貌だ。

もちろん男の色気であり、女らしいセクシーさが生まれるとかそういうわけではないけれども。

そんな感じでイリーナが英語の授業を実行してくれたこともあつてか、生徒たちの中での彼女への評価は意外と最悪ではなかった。

しかし最悪ではないだけで、決して良くもない。むしろ悪い。

だが、もし有粋がイリーナに甘い言葉を吐いて授業をするよう謀ってくれなければ、生徒の中でのイリーナへの印象や感情はもつと悪いものだっただろう。

そう考えれば、有粋のとつた行動はクラスメイトのストレス軽減という意味で効果的だ。

……未だ有粋を見ながら頬を赤らめている女子生徒が何人かいることを鑑みれば、別のダメージは増えてしまった気がしないでもない。

「で？ 有粋ってば、結局ビッチ姉さんをたらしこんだのは何が目的なわけ？」

「たらしこむってほどのこたアしてねエよ。ただ、アタシに意識向いてるほうがテメエや渚くんがちよっつかいかけられる可能性も減るんじゃないかねカと思つてだな……」

「はいはい、いつも通りの過保護ね。渚くんはともかく、俺がちよっつかいかけられたつて平気なことは有粋もよく知ってるでしょ？」

「……まア、テメエならキスされりゃあ舌噛み返すぐれエするか」

そんなやりとりを親友コンビがやっているうちに、倉庫のほうから夥しい数の銃声が轟いてきた。

驚きのあまり「ひよええっ!」なんて奇声を発する生徒もいれば、予想していたのか冷静に倉庫を見つめるだけの生徒もいる。

そのまま数秒経過したのち響いてきたのは、「きやああああ!!」なんて甲高い悲鳴とヌルヌルとした効果音。

「いやあああああ……いや……あつ……」

次いで喘ぎ声みたいなものまで聞こえてきた頃には、もういてもたってもいられず生徒の大半が駆け出していった。

気になる。中で何が行われているのか、めちやくちや気になる。

大勢が移動し始めれば残った少数もそうしなければならぬような気持ちになって、結局はクラスの全員が倉庫のそばへと走り寄るところになった。

扉がゆつくりと開く。まず出てきたのは殺せんせー一人だ。

「殺せんせー!」

「おっぱいは?」

「岡島。せめてビッチ姉さんのほうで呼んでやれ」

「おっぱい」呼ばわりになんとも微妙な表情で苦言を呈する有粋。

こいつの是非の境界線もイマイチよくわからない。

「いやあ……もう少し楽しみたかったです、皆さんとの授業のほうが楽しみですから。六時間目の小テストは手強いですよ」

「……あはは。まあ頑張るよ」

殺せんせーと渚の和やかな会話。

その背後からフラフラとおぼつかない足取りで登場したイリーナは、体操服にブルマにハチマキというレトロで健康的な装い、さらには口の端からヨダレを垂らしながら体は汗ばんでいるという物凄くイメクラ臭のする姿に変身させられていた。

犯人は間違いなく殺せんせーだろう。

「まさか……わずか一分であんなことされるなんて……。肩と腰のこりをほぐされて、オイルと小顔とリンパのマッサージされて……早着替えさせられて……その上まさか、触手とヌルヌルであんな事を

……」

「……殺せんせー。いったい何をしでかしたんで？」

「さあねえ。大人には大人の手入れがありますから」

あられもない様子のイリーナに顔を引きつらせながら尋ねれば、真顔の殺せんせーはその言葉だけを有粋に返し、話を切り上げた。

悪い大人の顔だった。確実に何かいやらしいことをやったと、有粋でなくてもその考えに至るような。

「さ、教室に戻りますよ」

殺せんせーが明るい笑顔でそう言えば、生徒たちは「はい」と元気良く返事してその後を歩いていく。

教室への帰路を行くクラスメイトたちを視界の端で見送ったあと、有粋は地面で屈辱に身悶え歯ぎしりをしているイリーナへと手を差し伸べた。

「イリーナさん。立てるか？」

「っ——放っておいて頂戴！」

有粋の手をおもいきり振り払ってヒステリックに叫ぶ。

堪え難い恥辱を我慢しようと握り締めたのか、彼女のブルマは太腿のあたりがシワだらけになっている。

顔を下に向けたままプルプルと身を震わせて体中から怒りのオーラを発しているイリーナの姿に、下手に慰めの言葉をかけないほうが良いと判断した有粋は、とりあえず倉庫の中からイリーナの服一式を回収してきて無言で彼女に手渡した。

そして自分の制服のブレザーを脱いで、イリーナの冷えた肩にそっとかける。

「まだ5月だ。女が体冷やすもんじゃねエぜ」

「……………」

「それじゃあ、また後で」

踵を返して教室に戻ろうとした有粋の背中に、「何だよ」とか細い声がかかった。

足を止める。振り向いた先ではイリーナが何故か涙目でこちらを睨みつけていて、有粋はなんとなく気まずさを覚えた。

「……何でアンタ、そんなに格好良いのよ」

「へ?」

「ガキのくせに……顔だけならアンタよりイケてる男なんていくらでも見てきたのに……何でアンタと話してるとドキドキしてくるのかしら。なんかムカつくわ」

「それはドキドキじゃなくてイライラしてるんじゃない」

「してたわよ。そりやもう物凄くイライラしてたわよ。でもアンタに声かけられたらドキドキに変わってきちゃったのよ!」

怒りではない感情で顔を真っ赤にしたイリーナが唐突にそんなこと言い出した。

ある意味、落ち着かせることには成功したのだろうか。そうに違い無い。きつとそうだ。前向きなエールで自分を励ましつつ、有粋はなんとかこの状況に冷静に対応しきろうと真顔をキープし続ける。

「……うちの親父は昔から、とんでもない色男だったんだ。そんな親父の若い頃に瓜二つなもんで、俺にも『そういう』フェロモンみたいなのが出てるんだよ。イイ女であればあるほど効くフェロモン。アンタが俺にドキドキしてくれてるってんなら、そりや俺が魅力的なんじゃないイリーナさんがイイ女すぎるってだけさ」

嘘は吐いていない。

有粋の父親は昔から、対象が内面だろうと外面だろうと、とにかく

人に『イイ女』と賞賛され慣れているような女からは例外なく惚れられてきた男だった。

祖父もそうだったと聞いているので、これはもう花槍家の男に代々伝わる特異体質のようなものだろう。

女の身でそのフェロモンを継いでしまった有粋も、幼少期から現在に至るまで幅広い年齢層のイイ女たちにモテまくっている。

だから本物の魔性の女であるイリーナが有粋の誘惑でときめいてくれたのも、演技力よりはこのフェロモンの影響が大きい。

そつちの意味での修羅場もくぐってきたとはいえ、さすがに惚れた腫れたの経験値はイリーナに遠く及ばないのだから。

「……そういう言い回しもズルいわ。アンタ、顔だけじゃなく性格もその父親に似てんじゃない？」

「……まア、否定はできねエ」

視線をずらしながら返せば、「やっぱり」と溜息を吐くイリーナ。

これだけ会話が成り立ったのだから、もう怒り狂って周りに当り散らすような真似はしてしまわないはず。

ここいらで戻らないと次の授業にも遅れてしまう。

「さ、戻ろうぜイリーナさん。旅の恥はかき捨てて言うだろ？ 失敗しようとして成功しようと、仕事終わりやア帰る場所なんだ。此処のこ

たア旅行先の二度と来る予定がない僻地とでも思ってるや良いさ」

「……ふん。もちろん成功で終わらせるわよ。私にだってプロの意地があるんだから」

再び差し出した手を、今度は握り返してくれた。

二人して教室へと歩を進めるその後ろ姿は、映画の一幕のように口マンチックで。

——花槍有粋は自覚していないことだが、彼女は彼女が考えている以上にイリーナ・イエラビッチのことを気に入っている。

それがたとえ、『負けず嫌いなところと調子に乗りやすいところが親友に似ている』という酷く個人的な理由からだとしても。

第八話：和解と失恋

「——わ、私の何がいけなかったのかしら？」

怒りを有粋へのトキメキで上書きして結果的に落ち着いたイリーナ。

そんな彼女が教室に帰還して早々とした行動は、生徒たちへの質問という突飛なものだった。

自分でも似合わないことをしている自覚があるのか、微妙にどもり気味だし、肌も火照っている。

それでも視線はまっすぐE組の皆を見据えていて。

(あれ……なんか、可愛い?)

トウクンと脈打つ胸を押さえて何人もの男子生徒がアホヅラを晒す。

男子中学生にとっては、年上のお色気ムンムン妖艶お姉さんよりも純情で可愛い美しい美少女のほうがトキメキの対象になりやすい。

加えてイリーナは態度も悪かったので、このクラスの男子に彼女のことを好意的に見ている者など一人もいなかった。

だというのに、今さら彼らがイリーナの容姿に魅力を感じだしたのはひとえにそのたどたどしい挙措ゆえ。

年下の子供たちに自分の非を問うなど経験したことがなかったのだろう。あからさまに緊張した様子で唇を引き結んで震わせる姿など、可愛いらしいことこの上ない。

「何よ、なんとか言いなさいよ……やっぱり『殺す』とか脅したこと怒ってるわけ？ 言っとくけど私にだってプロの矜持があるんだから、ターゲット以外を無闇に傷つけたりしないわよ！ ただこういうシチュエーションでの暗殺は初めてだったから、邪魔されないように釘刺しとかないと思ってる！」

生徒たちの無言を怒りの持続と捉え、慌てたように声を荒らげながら前のめり気味に叫ぶイリーナ。

その際に強調された谷間に岡島が鼻の下を伸ばしたが、そんなことにも気付かないほど今の彼女はテンパっているようだ。

「でも有粋と話してから改めて考えてみたんだけど、邪魔されないように威圧するより協力してもらえるように貢献するのが筋ってモンよね!？」私はプロでアンタ達はアマチュアだけど、それでもこここの暗殺者としてはアンタ達のほうが先輩なわけだし!？」

「いっぺん落ち着きな、イリーナさん。教卓が壊れちまう」

慣れない行動への気恥かしさを誤魔化すためバンバンと教卓を叩いていたイリーナの細腕を、有粋が背後から抱きしめるような形で止めた。

実にスマートな動きだ。少女漫画くらいでしかお目にかかる機会のない構図に、一部女子生徒からは黄色い悲鳴が、一部男子生徒からは嫉妬の声上がる。

前者の代表格は矢田桃花、後者の代表格は岡島大河だ。

「やっぱり花槍さん絵になるねー」「美女とナチュラルにイチャつきやがって!」などの多種多様な掛け声があちらこちらから降ってくるが、それを意図的に聞き流して有粋はイリーナの肩に顎を乗せる。

「殺せんせーをプロとして暗殺するため、自分に足りないものを生徒に尋ねる。そう決めたんだから? だったらもっと和やかにいかねエと」

囁く声は酷く優しかった。

柔らかな眼差しを間近で浴びて、穏やかさに満ちた不思議な気分になる。

女の身体を火照らせるだけでなく、心を温めることもできる……そ

れが花槍有粋のフェロモンだった。

「アンタはイイ女だ。コイツらはイイ奴だ。ちゃんと真正面から向かい合っちゃまえば、上手くいかないわけがねエキ」

「……ありがとう。アンタはイイ男よ」

安堵の吐息と共に小さく吐き出した言葉は、彼女にしては珍しいことに色気を含んでいない。

相手を誘惑することを考えての発言ではない。本当に心の底から思ったことをそのまま零しただけのあっさりとした感情の打ち明けは、だからこそ己の鼓動をも鎮められた。

視線を有粋から生徒たちへと戻して、イリーナは再び口を開く。

「私は暗殺のプロよ。でも、先生の経験なんて無いわ。だからこそ、暗殺だけに集中させて欲しいって気持ちがあつて、実際その通りに行動してた。……でもそれじゃ駄目だったわ。あのタコにはアンタたちの暗殺のほうがよくほど柔軟で手強いつて駄目出しされたし、現に私はアイツの触手一本壊せやしなかった」

イリーナの真摯な様子が生徒たちにも伝わったのか、先程までの騒がしさが嘘のようにしんと静まり返る。

嫌な沈黙ではなかった。静寂の中に淡々と響くイリーナの声が、確かな歩み寄りの意思を帯びていたから。

「だから教えてほしいの。私の何がいけないのか。実力？ 策略？ 演技力？ プロとして、いったい私に足りていないものは何？ —— お願い、教えて頂戴」

言い切って、あろうことかイリーナは頭を深々と下げた。

プライドに溢れた高飛車な彼女が、ついさつきまでは格下と侮っていたE組の生徒たちに向かって。

その隣では、イリーナの身体からいつの間にもやら離れていた有粋が、彼女と同じく……いや、むしろ彼女よりも低い位置にまで頭を下げている。

言葉はなくとも願いはわかった。

まだイリーナに怒りを抱いている者もいるだろうが、それでも彼女のことを許して歩み寄る努力をしてやって欲しい。

そういうことだろう。

今日初めて会ったばかりの相手のために腰を折る有粋の真剣な姿を見て、文句をつけようとしていた寺坂グループまでもが押し黙る。カルマだけは、親友が自分以外の人間のために訴願するのを見て少々不満げだった。

憎悪や嫌悪などではなく、可愛らしい嫉妬でしかない感情だが。

「……暗殺者として足りてないものはわかりません。でもこの教室では、俺達は暗殺者と生徒の立場を、殺せんせーは暗殺対象の立場を両立しています」

肅然たる空気を破る第一声は磯貝のものだった。

反応して顔を上げたイリーナも、彼の言葉を受け流すことなく誠実に聞き入れている。

「暗殺のプロであるだけじゃ、駄目なんだと思います。教師としても頑張ってくれないと……ただ殺すだけの暗殺者じゃ、この教室には留まれません。殺せんせーは貴方を暗殺者ではなく教師として紹介してくださいました」

「まあ、下手に出ろーとかは言わないからさ。せめて暗殺者としても先生としても対等に接してくんねーかな?」

「そうそう! もしそうしてくれるなら、俺らも外国人の英語教師とか大歓迎だし!」

「女の先生って今ウチにいないもんねー」

磯貝だけでなく、前原や杉野や倉橋も続々とイリーナに声をかける。

それに釣られてか、他の生徒たちも個人差はあれど親しみや歓迎の意思を感じさせる言葉をたくさん口にしてくれた。

プライドの高いイリーナの精一杯の歩み寄りを、彼ら彼女らはしっかりと感じ取って、受け止めてくれたらしい。

感極まって瞳を潤ませるイリーナ。

「それじゃあアンタ達……私のこと認めてくれるのね……！」

「まあ、そんな風に頭下げられちゃねー」

「花槍さんがビッチ姉さんと私達の関係を円滑にしようと頑張ってるのに、それを無下にするのも悪いし」

「授業はなんだかんだ分かりやすかったから」

ワイワイガヤガヤ、生徒たちが思い思いの言葉を口にしていて、そのどれもが最終的にはイリーナを受け入れるものばかり。

最後の最後まで頭を下げ続けていた有粋もこの空気に安堵したのか、ほっとした様子で胸を押さえながらやっとしこ顔を上げた。

どうやら上手くいったらしい。和気藹々なムード漂う教室内を見渡して、有粋は慈愛に口元を綻ばせる。

（やっぱりイイ女ってのア、色気立ってても殺気立ってても魅力的だがよ。心から見せる笑顔って最高のお宝にゃア叶わねエよなア）

ひよっとしたら自分は、イリーナのああいう表情が見たくてこんな事をしたのかもしれない、と。

そんな考えを一人展開していた有粋の肩を、どこからか飛んできた紙クズが直撃する。

丸まったメモの切れ端だ。地面に落ちる前に掴み取ったそれを開いて確認すれば、そこには『デレデレすんなバーカ』と見慣れた筆跡で書きなぐってあった。

カルマの座っている席に視線をやる。

予想通りに頬杖をつけてイチゴ煮オレをちゅーちゅー飲んでる親友は、なんだか拗ねているような目つきで刺々しくこちらを睨んでいる。

その可愛らしさに思わず目元が和んだ。

「でもこうして普通の先生になっちゃったら、もうビッチ姉さんなんて呼べないねー」

「だな。ビッチ先生とかどうよ?」

「!? えっと……ねえアンタ達、せつかくだからビッチから離れてみない? 気軽にファーストネームで呼んでくれて構わないのよ?」

「えー。でもすっかりビッチで固定されちゃったし」

「ぶつちやけビッチ先生のほうが呼びやすいよな」

「~~~~! もうツ、やっぱりアンタ達なんて嫌いよおー!!」

親友と表情だけの無言のコミュニケーションを楽しんでいれば、そんな泣き言を漏らしながら駆け寄ってきたイリーナが有粋の腕にがっしりとしがみつく。

さめざめと涙を流しながら有粋の制服の肩口に額を押し付けて、イリーナは呟いた。

「ぐすつ……私をイリーナって呼んでくれるのはアンタだけよ有粋……やっぱりアンタ、イイ男だわ……」

「あー……そのことなんだけどよ、イリーナさん」

これから明かす事実への気まぐさに頬を引き攣らせながら、有粋はイリーナの美貌を覗き込む。

さりげなく彼女の身体に手を添えて自分から離すと、一転して実直な顔つきでイリーナのことを見つめ——そこから崩れ落ちるようにして土下座した。

「すまねエ、本当にすまねエ……！ アタシの嘘がアンタの心を弄んだ……ッ!!」

地面に前髪をこすりつけての、申し訳なきが生徒たちにまで伝わってくるような本気の謝罪。

血を吐くような苦々しい響きの言葉。

突然の行動に虚をつかれたイリーナは一瞬思考をストップさせたが、それでも時間がたてば有粋の言っていることの意味が理解できてしまった。

まさか、と。

震える唇から落ちるイリーナの声の弱々しさに、有粋が己の軽率な行動を悔いて歯ぎしりする音が聞こえてきた。

「アンタ……女だっていうの?」

突然のシリアスチックな空気に吞まれて静かになった生徒たち。皆が固唾を飲んで身守る中、有粋は「ああ」と重々しく肯定した。

「そう……じゃあ私、失恋しちゃったのね」

精神的ショックを隠せない様子で、それでも気丈に微笑むイリーナ。

当然だ。いくら百戦錬磨の魔性の女とはいえ、わりと本気で惚れかけていた男が実は女だったのだから。

けれども、本気で惚れかけていたからこそ、相手の悲しむ顔は見たくないと思った。

ましてや土下座なんてして欲しくもない。

「確かに、アンタが男のふりして私を口説くでもしなきゃ、たぶん授業しなかっただろうし。そうなってたら今より生徒たちに受け入れてもらうのにも時間がかかったと思うわ……だから、ね? 気にしない

で顔を上げてよ」

「これでも指詰めるくらい^{エンク}の覚悟は決めてんだ。傷ついてんなら
氣イ遣わずに責めてくれ。言い逃れするつもりアこれっぽちも、」

「ああもう！ クドい!!」

「っ!?!」

叫びながら有粋の頬を両手でひつつかんで無理やり顔を上げさせれば、さすがに予想していなかったのか琥珀色の目は驚きに見張られている。

そんな表情でも男前を保ったままのイケメンフェイスを引き続き挟み持つて、イリーナは勢いよく己の唇を相手の唇へと押し当てた。

途端に響くピチャピチャという湿った音。

粘着質な何かの絡み合う生々しい音。

時々聞こえてくる艶かしい息継ぎの音。

ボカして表現したところで意味はない。

つまるところのディープキスというやつを、イリーナは奇襲じみたタイミングで有粋へと仕掛けたのだ。

「ふうっ……」馳走様。驚きながらもしっっかり対応してくるとか、ア
ンタ相当場数踏んでるわね。しかもめちやくちや上手いじゃないの」

よほど気持ちよかったのか、霊峰に降り積もった白雪のような頬を
薔薇色で染め上げ、満足げに唇を手の甲で拭いながらイリーナはうっ
そりと呟く。

対する有粋はといえば、未だ愕然とした表情で地面に座り込んでい
た。しかし土下座の体勢に戻ろうとする気配はない。茫然自失なだ
けかかもしれないが。

そんな有粋の頬についてとばかりに軽い口づけを落として、イリー
ナはいつもの彼女らしい艶やかで自信に満ちた笑みを浮かべる。

「これで騙してた分はチャラにしてあげる。まだ何か言うようだった

ら、今度はもつとドギツイのかますわよ」

さすがビッチ先生、なんて誰かの声が鼓膜をかすめた。

諸々の葛藤をたつた一つのキスで消化しきつて、普段と変わらぬ振る舞いをしてみせるその姿はまさしく有粋の言うところの『イイ女』そのもの。

見守っていた生徒たちも思わず感嘆の溜息を吐く。

有粋もそんなイリーナの様子にこれ以上は言うほうが野暮と感じたのか、やつと地面から膝を離してゆつくりと立ち上がった。

「……わかった。イイ女の嘘には騙されたフリをしろってエのがうちの家訓の一つだからな」

「あら、それ口にしちや駄目なやつじゃない？」

「まだテンパってんだ。無粋な物言いだが、これ限り見逃しとくれや」「もちろん。男の汚点を見ないフリしてやるのもイイ女の努めだから……つて、アンタ男じゃないんだったわね」

「……本当に大丈夫かい？」

「大丈夫に決まってるじゃない。立ち直りが早いのもイイ女の条件なんだから」

二人して平然とした様子で会話を続けるのを見て、渚は握りしめていた手からやつと力を抜いた。

見れば手汗ビッシヨリになっている。

一体どれだけ緊張していたのやら。

（ビッチ先生、わりと本格的に有粋くんに惚れかかってたんだ……道理でカルマくんの機嫌が悪いと思った）

親友を取られたような気分になっていたのか。ムスツとした表情でかすかに頬を膨らませるカルマを視界に収めないようにしながら、渚は窓の外を見上げる。

トラブルは多々あれど、今日もこの暗殺教室は無事に一日を終えた。

新たな教師が一人増えて、明日は何がおこるのやら。

第九話：アウェイでこそマイペースに

月に一回の全校集会。

普通の学校に通う中学生たちにしてみれば、それは『面倒臭いけどただボーッと立っていれば何事もなく終わる楽なもの』でしかないだろう。

しかし柵ヶ丘中学において——さらに言うなればE組の生徒たちにとつて、このイベントは酷く憂鬱なものでしかなかった。

「クスクス……見て、E組よ……」

「あれが先輩の言つた柵ヶ丘のゴミ集団かー」

「進学校で落ちぶれるくらいなら普通の中学行つてりやいいのにな」

「でも顔は結構イケてる奴多くない？ 頭悪いんじや宝の持ち腐れだけど」

体育館にてひそひそ飛び交う罵倒に皮肉に嫌味の乱舞。

毛色の異なる誹謗中傷の数々は程度の差こそあれど、どれもがE組を見下す意識が根底に見え隠れしたあけすけなものばかり。

聞いているだけでストレスが溜まって胃が重たくなりそうな台詞の降つて沸く中を、寺坂や村松は顔をしかめながら、渚や磯貝は気まぐげに立っていた。

E組の差別待遇はここでも同じ。

数多い侮蔑と嘲笑の視線に長々と耐えなければならぬことを鑑みれば、普段よりもいくらかキツイ状況だ。

壇上でスピーチを行う校長からも露骨な揶揄を喰らい、それに沸き立つ周囲の生徒と、暗然に俯くE組の生徒たち。

もつとも堪えていない生徒も少ないがらいるようで。

「こうして中学生らしい悪口聞いていると、歓楽街のお兄さんらがどれだけガラ悪いかはつきり分かるよねー」

「口を開けば×だの×だのと喚いてるような連中と真つ当なガキを比べんのが間違つてら×ア×
「だね。『クス』とか『ゴミ』とかはあそこらじゃ比較的上品なワードだし。さすがの俺も×つて挑発された時はあまりの口汚さに驚いた」
「ああ、あんまり行き過ぎた罵りなんか受けるとそうなつちまうよな。腹アたたねエが舌を巻くつてやつだ」

——この嫌な空気の中にいてなお、放送コードに100%引つかかる用語を織り交ぜつつ平然と日常会話を続ける二人組。

E組が誇る天才児にして問題児、赤羽業。

そんな彼の親友たる男前任侠娘、花槍有粹。

彼と彼女のペースはたかが一般中学生の毒舌ごときで崩されたりしない。

もつと率直な物言いをすれば「相手にするまでもない」。

さらに重ねれば「視界に入っていない」。

短的に言えば「どうでもいい」。

敵意をもって無視しているのではなく、敵意を持つことすら面倒だから無視しているのだ。

仮にそうしなかったところで、カルマも有粹も他のE組生徒たちに比べて本校舎の生徒から絡まれる経験は少ない。

数度に渡り繰り返された暴力沙汰はもちろんのこと、二人の成績が本来ならばA組級の優秀さであることもその要因だ。

成績を馬鹿にしようと思えば自分のほうが劣っているのでブーメランになってしまい、ならばと腕っ節に訴えれば返り討ちにあう。

そんな厄介種共に好き好んでちよつかいかけるくらいなら、大人しそうな他のE組生徒を馬鹿にしたほうが手っ取り早いし楽。

そんな訳で、カルマも有粹も『E組』というくくりで罵倒されることはあっても、個人個人の所業に文句をつけられることは滅多に無かった。

もちろん中には少数の例外も存在するのだが、それはさて置き。

「二人とも、雑談で暇を潰すためにわざと遅れてきて後ろに並ばされたのかな……」

「多分カルマの提案じゃねーか？ 花槍の性格ならアイツの頼みでもない限り遅刻はしないだろう」

「初日は遅刻登校してたけどねー。ってかカルマくんがサボらなかつたほうが意外だよ」

出席番号の関係で近くにいる潮田渚・菅谷創介・倉橋陽菜乃の三人が後ろをチラチラ振り返りながら小声で話す。

確かに成績が良くて素行の悪いカルマならば、この手の面白くないイベントは早々にフケてどこかで昼寝でもしているイメージがある。

後から罰を喰らっても痛くも痒くもない、と嘯く飄々とした笑顔まで想像できそうだ。

「続いて生徒会からの発表です。生徒会は準備を初めてください」

渚たちが親友コンビについて感想をこぼしあっている内にも、依然として集会は進んでいく。

ホワイトボードを押して登場する生徒会の平役員たち。

それに紛れて舞台袖から姿を現したのは、我らがE組で表向きの担任を務める堅物男、烏間惟臣。

見覚えのない男の登場に本校舎の男子生徒たちがざわめき立つ。女子のほうは烏間が精悍な容姿をしていることから、色めき立つ、の表現が相応しい反応。

「誰だあの先生？」

「シュツとして格好良いー！」

黄色い悲鳴を上げる女子生徒のことをいくらか恋愛対象として見ていたらしく、隣に立っている男子生徒が「うっ」とシヨックに呻い

た。

そして後ろの男子生徒から肩をポンポン叩いて慰められる。

そんな本校舎生徒たちによる軽い青春模様には目もくれず他の教員たちの前まで歩を進めた烏間は、背筋の伸びた会釈と共に表向きの自己紹介を始めた。

「E組の担任の烏間です。別校舎なのでこの場を借りてご挨拶をと」
「あ……はい、よろしく」

真正面から見つめられた年嵩の女教師は頬を染めている。

言っちゃ悪いがパツとしないルックスをした教師の多い本校舎において、彼のような背丈もあって引き締まった身体をしたイケメン先生というのは稀少価値が抜群に高い。

よって女子生徒のみならず女教師までもが彼に熱い眼差しを注いでいるのも、まあ仕方のないことと言えよう。

「烏間先生ー。ナイフケース、デコってみたよー」

「可愛いつしょ?」

烏間の鼓膜に聞きなれた声が飛び込む。

振り返ればそこには担当するクラスの女子生徒である倉橋陽菜乃と中村莉桜がいて、手に持っているのは妙にキラキラしいが支給品のナイフケース。

スワロフスキーやラインストーン、ビジュリーやブリオンやグリッターといった数多のデコレーション素材で飾られたそれは、一目見ただけでは決してナイフケースとは思われないだろう。

しかしどれだけ過剰装飾がなされていようともナイフケースはナイフケースだ。

それを公衆の面前で見せびらかすという行動に、彼は鉄仮面をわずかに崩しながら慌てて駆け寄った。

「可愛いのは良いがここで出すな！ 他のクラスには秘密なんだぞ暗殺のことは!!」

「はーい」

小声で怒鳴るといふ高等テクを披露すれば、二人も素直に返事してナイフケースをいそいそと仕舞ってくれた。

傍目に見れば非常に仲睦まじい生徒と教師でしかないその光景に、またしても本校舎の生徒から羨望じみた声上がる。

「……なんか仲良さそー」

「いいなあー。うちのクラス先生も男子もブサメンしかいないのに」

突然の悪口に無言で汗を流すしかない男子生徒。諸君に幸あれ。

E組教員のインパクトはこれだけで終わらない。

勢いよく扉を開ける音と共に登場したのは、マリリン・モンロー並のスタイルと銀幕女優もかくやの花貌を誇るご存知イリーナ・イエラビッチ先生。

紆余曲折を経てE組に英語教師として迎え入れられたばかりの彼女は、抑えきれない美女オーラを体育館一面に撒き散らしながら、まるでそこがレッドカーペットの上であるかのような堂々たる闊歩を見せつける。

「ちよっ……なんだあの物凄い体の外人は!?!」

「あいつもE組の先生なの?」

半ばヨダレを垂らしたような表情の男子生徒と、嫉妬ゆえか冷ややかな眼差しを向ける女子生徒。温度差は凄まじかった。

「何しに来た」と烏間に詰め寄せられた彼女は、それを「何でもいいじゃない」とおざなりな返事であしらい、とある生徒目指して向かっていく。

釣られて生徒や職員の視線もそちらに誘導された。

「会いたかったわ有粋、今日もイイ男ね！」

満面の笑みで言いながら、生徒——花槍有粋の体を力任せの強引きで熱烈に抱き寄せ、相手の顔を自分の谷間へ押し付けるといふエロガキ垂涎の状況に持ち込んだイリーナ。

しかしいくら男前だろうとも、有粋の性別は正真正銘♀だ。当然興奮などできようはずもなく、彼女はただ息苦しさから眉間にシワを作るのみ。

ついでに言うのと隣の赤羽業も呆気にとられたのは一瞬のことで、すぐ不機嫌丸出しの形相になると有粋の腕をグイグイと自分のほうに引っ張った。

中学生とはいえ背丈で勝るカルマのほうが腕力が強いらしく、あっさりと力負けしたイリーナが有粋の体を解放する。

再びちよつかいかけられる前に有粋の片腕へと自分の両腕を絡め、まるで彼氏に手を出す泥棒猫を威嚇する彼女のような体勢でカルマは小悪魔的に笑った。

「悪いけど、こいつは俺の親友^{モト}で俺はこいつの親友^{モト}だから。二人で話してる時に邪魔しないでくれる？」

「くっ……上等じゃない。略奪愛つても燃えるもんよ」

カルマの発言にざわめきを通り越して吹き出す生徒多数。

知っている人は有粋が女だと知っているが、知らない奴は知らないのだ。

特に一年生なんかは男子制服を着た有粋をそのまま男子と認識している者がほとんどで、そんな彼女が美形男子のカルマとこういうやりとりをしていれば……。

(これが噂に効くボーイズラブ……?)

(スゲエ……外人先生と赤髪男子生徒の背後に虎と龍が見える……)

(美女にも美少年にもモテるとかなんだよあの焦茶髪のイケメン。爆発四散しろ)

この通り、完全に修羅場と誤解された上モテる男として嫉妬まで買っていた。

最終的には、右腕にはカルマが引っ付いて左腕にはイリーナが引っ付くという両手に花状態に陥った有粋。

己を挟んで未だ言い争う二人に対し、溜息を堪えつつ声をかける。

「カルマ、イリーナさん。愛しの親友とどびきりのイイ女に取り合われるこの状況ア、言っちゃあなんだが冥利に尽きるってもんで悪い気はしねエき。だがな」

「ほら、今『愛しの』って言ったでしょ？ こいつつてば基本的に誰にでも優しいけど、愛してるのは俺だけなんだから。ビッチ先生はさつさと諦めて他の男でも悩殺してなよ」

「あら、私だって『イイ女』って何度も言われてんのよ。可能性は充分残されてるわ。それに女だって分かってても、有粋以上のイイ男なんて滅多にいないんだから。スキンシップするくらい良いじゃない。そんなので目くじら立てるなんて、あんまり嫉妬深くちや有粋に嫌われるわよ？」

「なア、お二人さん」

「はっ。わかってないねビッチ先生。こいつの愛はそんなもんじやないんだから。前に自分が死んだら天国と地獄のどっちに行くと思うかって話してた時だって、『そうさなア。テメエが天国にいるなら地獄の鬼共ぶん殴つてもそっちに向かうし、テメエが地獄にいるならさつさと堕ちてまたつるもうとするだろうぜ。要するにテメエ次第だ』なんてクソ恥ずかしい台詞を臆面もなく言ってくれ——」

「——頼むカルマちいとばかし口つぐんでくれ！」

さすがに二人きりの時に発した口説き文句を全校生徒の前でバラされるといふ羞恥プレイは耐えかねたようだ。

両手が塞がっているので相手の口元を掌で覆い隠すという手段はとれず、仕方なしに自分の肩に相手の口を押し付けるといふ形でカルマの言葉を遮った有粋。

その体勢が結果的にはカルマだけを抱き寄せたように見えて、修羅場を観戦していた生徒たちからは「赤髪のほうが勝ったぞ!」「なんてスマートな抱擁だ!」と歓声が上がる。

イリーナに向かってこっそり舌を突き出すカルマ。悔しげに爪を噛むイリーナ。

もはや全校集会と呼べる状況ではなかった。



「……」苦労だった、花槍くん」

「はは……まあ、幸せな疲れなんですすぐ回復しまさア」

疲れきった表情で帰り道に行く有粋に、烏間は同情気味に声をかける。

キヤットファイトに巻き込まれた色男ポジションを強制的に満喫するはめになった彼女だが、しかし本人の言う通り、疲労と同時にどこか幸福感のようなものを見る者に与える雰囲気をしていた。

愛する者と好いている者が己を巡って可愛らしく口論する様は、彼女の心をどこか甘辛く擦ったらしい。

案外、子猫同士の喧嘩でも見ている気分だったのかもしれない。

あれからなんとか他の先生たちがイリーナを有粋から引き離し、途中でプリントを使ったE組いびりなどがあったものの、殺せんせーがこっそり助けてくれたおかげで無事に全校集会を終えることができた。

今はその帰り道。

本来ならばカルマと共に教室へと戻る予定だった有粋だが、彼は途中で「殺せんせーへのイタズラに使えそうなキモい虫がいた」と言うて別方向に進路を変えてしまった。

待っていても良かったのだが、そうすると一時間目に遅れてしまう可能性もある。よって一人で帰ることを選択し、その道中で鳥間とかち合ったのだ。

「しかし君と赤羽くんは、その、ずいぶんと仲が良いんだな」

「まア、なにせ3歳の頃からの付き合いですからね。結婚式の友人代表スピーチはお互い他に譲る気がねエってくらいにや親密ですよ」

「恋仲ではないのか？」

「そういうのアとづくに通り越しちまって。あいつに彼女ができりやア、その彼女だつてアタシや命かけて守りやしよう。大事な奴が大事にしてるモンなら、親友のアタシだつて大事にすらア」

「そういうものか」

恋バナだか友バナだかわからない会話を交わして平和に歩いていたが、しかしその風いだ時間も長くは続かなかった。

「おい、なんだその不満そうな目」

帰り道から外れた側。

自動販売機のある方向から物騒な響きが聞こえてきて、二人して咄嗟に立ち止まる。

そちらに視線をやれば、有粋からしてみればクラスメイト、鳥間からしてみれば教え子の潮田渚が見知らぬ男子生徒二人がかりで壁際に追いやられていて。

気づいたのも同時なら、目つきを険しくしたのも同時だった。

「チツ。まったくこの学校は……」

「血気盛んならスポーツにでも打ち込めってんだ」

二人して足を踏み出す。もちろん目的は潮田渚の救助だ。

しかしその肩に二本の腕が置かれ、あえなく進行は止められた。

背後に瞳を動かせば、そこにいるのはニヤニヤと薄ら笑いを浮かべながら顔をシマシマ模様にした殺せんせー。

変装中なので一応カツラはかぶっているが、これで周囲が騙されてくれているのが納得できないくらい明らかに人間ではない造形だ。

「あの程度の生徒にそう屈しはしませんよ。私を暗殺しようとする生徒達はね」

……まあ、こいつが言うならばそうなのだろう、と。

全面的に信用はしていないものの、とりあえずは事態の進行を見守ることに決めた二人。

もちろん危なくなったらこの触手を振り切っても駆けつけるつもりだ。

「なんとか言えよE組！ 殺すぞ!!」

何を言っても堪えた様子のない渚にしびれを切らし、男子生徒の一人が彼の胸ぐらを掴むとそんなことを叫びながら壁に押し付ける。

『殺す』——そのキーワードが出た瞬間、渚の瞳に何かゾツとするような空恐ろしさが滲んだ。

研ぎ澄まされた刃のような、磨き抜かれた銃身のような。

それこそ、生まれて初めて自分の肉体に短刀が刺さった時の記憶を有粋の脳が奥底から掘り出してくるほどの。

「殺そうとしたことなんて無いくせに」

笑みを刻む口元でさえ、普段とは打って変わって凄味を感じさせ

る。

いや、凄味なんてものではない。これはれっきとした殺気だ。本能的な危機感に従って、男子生徒たちの体は無意識に渚から距離をとる。

そんな二人にはもう目もくれず、渚は悠然とした歩調でしてその場を後にした。

「ホラねえ。私の生徒たちは殺る気が違いますから」

上機嫌に嘯く殺せんせー。

鳥間と有粋は、渚が去っていった方向を見ながらひたすらに無言のままだ。

(今の彼の殺気は……)

(昔アタシを狙ってきた殺し屋鉄砲玉なんざよりよっほど……)

暗殺者と呼ぶにはあまりにもお粗末とはいえ、それでも6歳の頃に父親の敵対組織から送られてきたヒットマンに殺されかけたという思い出は中々に鮮烈なものだった。

しかし有粋はもうその記憶を感慨深く振り返ることもないだろう。

あんなものを見せられてしまったては、チンピラ紛いの殺し屋のことなどもう色あせた。

「……負けてらんねエ、か」

有粋自身は己が殺せんせーを殺したいとは考えていないが、親友であるカルマが自分の手で彼を殺したがっている以上、その手伝いを惜しむ気は無い。

その過程で渚は協力者にもライバルにもなることだろう。

ならば自分も、あの超生物に届きうる刃を身につけなければ。

ひっそりと宿した決意を胸に、有粋もまた教室へと戻る道を再び歩

き出す。

——一連の流れを見ていたのは自分達だけではないと、知っている者はこの場にはいなかった。

第十話：テスト期間

花槍有粹の得意科目は国語と社会だ。

源氏物語は原文と現代訳の双方を五十四帖ぶん全て暗記しているし、古事記や日本書紀だって寝起きでも諳んじられる。

漢字検定と日本語力検定は何年も前に一級を一発合格したし、古典の名作と呼ばれる大抵の小説は読破済み。

俳句に川柳に短歌に都々逸と何でもござれ。

小学生時代の百人一首大会では無双の活躍を成し遂げぶつちぎりで優勝、肝試しにおいても古典怪談をフルで頭に刻んでいる彼女は語り部として引っぱりダコになり、旅行先ではその土地の歴史や建造物の面白エピソードを素人にもわかりやすく話してガイドさんから『先輩』と呼ばれるに至った。

仏像を一瞬でも視界に入ればそれが如来か菩薩か明王か天部かを判別でき、代表的なものだけで14種ある鳥居の分け方をもっと細かい派生系まで網羅している。

厳密な意味での幽霊と妖怪の違いだとか、そういう民俗学的なものまで社会の一部として脳味噌に叩き込みきった彼女は、この2教科に關してだけはテストで失点を許したことがない。

反対に、数学と英語は苦手科目だ。

挨拶程度の日常会話にもスラングを乱舞させるガラの悪い外国人とのコミュニケーションに慣れてしまったせいで、堅苦しい文法に倣って文章を書こうとしても無意識に粗野か卑猥な内容になってしまうし、簡単な挨拶でも癖で口説き文句を付け足してしまう。

『10個のリングを6人で分けるにはどうすれば良いですか?』という質問に「五人ぶっ殺して最後に残った奴が独り占めすりゃいい」とか「リング? そんなもんより女喰おうぜ!」とか「10個のリングも6人の人間も全て私のものにすれば解決」と答えるような連中ばかり見てきたせいで、文章問題はマジメに計算しようとしても勝手に進行方向がずれていく。

それでも元々の脳味噌は優秀な部類に入るようで、苦手といっても80〜95の間を行ったり来たりくらいに成績はとれていた。

親友のカルマは勉強せずとも常に自分以上の好成績を叩きだす根っからの天才肌。

ゆえに、自分も武力のみならず知力を備えた、親友に相応しい者であらねばならないと日々精進している。

有粋の才能はカルマより少ないが、努力量なら圧倒的に彼女が勝利していた。

「――で、ここは先に約分しちゃうやり方と後でまとめて約分するやり方があってね」

だからといって数学で親友に優ったことは一度もなく、こうして教えられる立場にあるのだが。

学校の間テストが迫ってきた今、殺せんせーによる『高速強化テスト勉強』なる催しが教室で開かれている。

お得意のマツハ分身術を駆使し、生徒とマンツーマンで苦手科目を徹底的に復習していくという彼にしかできないだろう授業スタイル。

ご丁寧に分身一体一体が教科別のハチマキを巻いていて、数英社など書かれた普通のハチマキに交じり、寺坂だけは某週刊少年誌で連載されていた忍者作品に登場する額当てを巻かれていた。

苦手科目がありすぎて一字で表現しきれなかったがゆえの結果らしい。

常時金欠の殺せんせーがどこのショップであのそこそこ高い額当てを購入したのだろう。

「にゅっ?! カルマくん、先生の授業を受けながら有粋さんに数学を教えつつ先生を暗殺するのはやめてください! とういか器用ですね!」

「あは、ごっつめーん。つい癖で」

いきなり変な形に顔が凹んだ殺せんせーの残像に生徒たちが驚けば、案の定、その犯人はクラスきつての悪戯少年カルマであった。

『癖』が暗殺のことなのか有粋に勉強を教えていることなのかは判別しかねる。

どちらにせよ、三つのことを同時に余裕の表情でこなしているあたり、この少年は本当に文句なしの天才肌だ。

有粋も殺せんせーの英語の授業を受けながらカルマに英語を教わっているが、さすがに暗殺までする余裕はない。

「しかし有粋さん。貴方は英語が苦手というより悪手なようですね。他にも英語が『出来ない』生徒は何人かいますが、『やらかしている』生徒は貴方だけです」

「……すまん先生、『Good night』を『夢で会おうぜ、お嬢ちゃん』と訳したのあわざとじゃねえんだ。こういう言い回しの奴に教わって染み付いたのが落ちねエだけで」

「こつちのほうが凄くない？ 『Are you ready?』を『貴様の分際でこの俺を待たせるとはな！』って。記号まで変わってんじゃない。ある意味通じるかもしれないけど」

「すまねエ二人とも……苦勞をかける……」

机に片肘をつけて掌で顔を覆いながら、疲れたような表情で眉間にシワを寄せて項垂れる有粋。

殺せんせーとカルマとのこの会話だけ聞いていれば有粋がかなりの馬鹿みたいだが、これでも一応英語で平均点以上をとっている女だ。

だからこそ稀に紛れ込むエクストリーム和訳が際立ってしまい、本校舎にいた頃から英語教師に「こいつジョークのつもりで書いてんのか？」と困惑の眼差しを向けられたりもした。

今も会話内容が聞こえたらしい座席周辺の生徒たちから驚きの目で見られている。もう一度言っておくが、決してジョークで書いているのではない。無意識にやってしまうのだ。

「有粋、国語なら平家物語を寝言で語れるくらい得意なのにね」

「いつそ英語で書かれた日本の古典作品を読むところから初めてはどうでしょう？ 苦手な英語でも元が得意な国語の一部だと思えばどうにかなるかもしれません」

「なるほど、そういう変わり種の勉強法もありか」

「数学に関しては……文章問題をこなして慣れていくしかありませんね」

「とりあえず文章問題は力技で解決しないものだって意識に刷り込まないと」

二人からの親身なアドバイスに真剣に頷く。

この間にも殺せんせーの他の分身たちは生徒に勉強を教え続けているのだから、彼はスピードだけでなく器用さに置いても逸脱している。

その割に格好つけると失敗しがちだったりエロ本が好きだったりと間抜けた所もあって、一概に完璧とも言い切れないのが面白い。

カルマも殺せんせーのことを随分と気に入っているみたいだし、彼がこの教室にいてくれて良かったと改めて有粋は思う。

（何で殺されたがってるのか分かんねエシ、そもそも本当に殺されたいなんて思ってるのかも謎だが……アタシの大事なカルマを救ってくれた命の恩人だ。殺せんせー。アンタが自分の死を望むってんなら、アタシは全力でそれを叶えてみせるぜ）

感謝と殺意は相反するものではない。

絶望を抱えて生きる人間もいれば、希望を持って死ぬ人間もいる。ならば感謝を手に殺す人間がいたっていいだろう。

暗殺教室——いつか敬愛する教師を自分たちの手で殺さねばならない宿命を背負ったこの生徒たちも、きっと何人かは多かれ少なかれそんなことを考えている。

中でも彼女の親友はその筆頭格だ。

(でもまあ、感謝を伝える行為アなにも暗殺だけじゃねエよな。こうして勉強教えてくれてんだから、成績上げんのも恩への報い方だ)

標的と暗殺者、教師と生徒。

暗殺者として標的である彼を殺すのが感謝の示し方なら、生徒として教師である彼に己の成長を見せるのもまた然り。

学校に通っている以上、手取り早く成長を見せつけたいなら成績アップが一番の方法だ。

ともかくにも、今日は帰り道に英語訳の小説と数学の問題集でも買って帰ろう、と。

静かに心に決めて、有粋はシャープペンシルを握り締めたままふつと口元を綻ばせた。

視界の先では、楽しい笑顔を浮かべた親友が殺せんせーに対して本日二度目のナイフを振るっている。

嗚呼、今日も平和だ。



「――39.8℃か」

体温計に映った数字を確認して、有粋は布団に寝そべったまま気怠げに呟いた。

テスト前日にして体調不良という不運。ここで無理すれば明日のテストに響くかもしれないし、無理して登校した結果クラスメイトに感染させてしまつては元も子もない。

この程度の発熱なら山登りくらいなんてこと無いのだが、時期も考えて、やはりここは休むべきだろう。

枕元で充電器に繋がれているスマートフォンを手にとり、電話帳の一番上に登録されているカルマのメールアドレスをクリック。

霞む視界の中で簡素に『発熱した。感染回避のために休む』と打ち込んで送信すれば、三十秒とたたないうちに『りよーかい。帰りに林檎とポカリ買って〜』という文章が返ってきた。

前までのカルマなら、有粋がないのに学校に行くのは面白味が無いという理由でズル休みを決め込み、花槍家まで看病に来たものだ。それをしないということは、彼は今の学校生活を楽しんでくれている。

楽しいという感情は幸せになる上で大切なものだ。

親友が幸せならば、有粋にとってこれほど嬉しいことはない。

「さてと、明日に向けて読み込むか」

のそりと布団から起き上がり、私室の端の文机に広げた英語訳の雨月物語を手にとる。

周囲の迷惑を考えて学校自体は休むが、だからといって勉強を休む気はさらさら無い。

元から体脂肪率が低いせいで風邪を引きやすい体質なのだから、体調が悪い程度で勉強やトレーニングをサボってはすぐに弛んでしまう。

吐いてもいいから栄養のある食材を無理やり胃に詰め込み、目眩で眠れないなら自然と睡眠欲が湧いてくるようになるまでランニングや筋トレで体を虐め抜く。

あとは水分をとって便所にいってを繰り返して毒素を排出し、動脈の通っている部位に保冷剤でも当てておけば熱は下がってくる。

ついでに解熱に効果のあるツボにスポールバンでも貼ってビタミンを積極的に摂取すれば、いつもの経験からいって明日には確実に平常時の体温まで戻るはず。

普通に休めと人には言われるが、有粋の場合、何もせずただ布団で療養というのは逆にストレスが溜まってしまつて熱が上がる。

だからこそ、多少のダメージが体に残るとしても普段通りに過ごして熱だけさつきと下げるのが昔から変わらぬ風邪の対処法だ。

朝のストレッチの合間に雨月物語のページをめくる。

その顔色は真っ赤で肌も心なし汗ばんでいるが、鍛えられた体幹にブレは無い。

その力強さが、無茶をすることに慣れきっている証と思えば凛々しいよりもむしろ痛々しく。

襖の向こうの若い衆がハラハラと心配そうな表情で見守つてしまふのも無理のない話だった。

第十一話：体調不良、フェロモンは良好

（――下がりきらなかったか）

微熱の残る体に鞭打って山を登りながら、有粋は悩ましげな目つきで溜息を洩らした。

不調こそ根性で我慢してみせるが、未だ体内にこもる38.8℃の熱のせいで頭が働かないのはどうしようもない。

いつもなら、飲んで動いて食べて吐いて寝ての繰り返しで無理やり毒素を排出する大雑把でやり方で何とかなったのに。

何故テスト当日の今回に限ってそれが失敗してしまったのか。

有粋は知らぬことだが、実は彼女が患っているのは風邪ではなく肺炎。

すぐ切れる息も激しい咳も絡む痰も騒ぐ脈拍も胸の痛みも続く熱も、全てが全て肺炎に代表される症状なのだが、いかんせん風邪と肺炎との違いなんて素人にはまるつきり判別がつかない。

しいて挙げれば、風邪は早ければ一日で治るが肺炎は一週間ほど長引く。

だからスパルタ療養で数多の風邪をねじ伏せてきた有粋でも、肺炎という新たな敵を淘汰しきることは出来なかったのだ。

実父から引き継いだ女たらしのフェロモンが発熱と化学反応でも起こしたのか、元々ある色男オーラが今日は一段と淫靡で扇情的なものとして冴え渡っている。

今の有粋の唇からこぼれる吐息の一つでも吸えば、女という女はこそぞって恍惚にも似た目眩を引き起こし地面へ頽れるだろう。

「あつ――花槍さん」

だから背後から聞こえた声に有粋が振り向いたその瞬間、視線が合っただけの少女が突然顔色を真っ赤に変えて黙り込んでしまった

のも仕方ないことである。

サラサラと風になびく艶やかな黒髪に、深窓の令嬢を思わせる清楚な花貌。

微笑み一つで健全な青少年たちの心を鷲掴みにすることも容易いだろう、3年E組のマドンナにして随一の美少女。

黒タイツを履いたシンプルな制服姿が花嫁衣装のごとく見栄える彼女の名前は。

「……神崎有希子ちゃん、だったかい？」

平時より掠れたハスキーボイスで尋ねれば、少女は「っあ」と小さく声を洩らしながら近くの木に寄りかかってしまった。

イイ女に効くフェロモンということは、将来的にイイ女になるだろう少女にも多少は効くということ。

そんな有粋のフェロモンが今は発熱のせいでパワーアップしてしまっているわけで。

「……ごめんなさい……なんだか体がおかしいみたい……」

瞳を潤ませ体を火照らせ、頬は恥じらいとも喜びともつかぬ感情に染まり鮮やかな薔薇色を呈している。

胸が苦しいのか、真っ白なシャツを華奢な指先でぎゅっと握りしめて、伸びやかなまつ毛に縁どられた可憐な瞳は、まるで好きな男の子を直視したいけど出来ない繊細な乙女のように伏せがちだ。

名誉のために言っておくと、これは別に神崎有希子ちゃんが発情期を迎えているわけではなく、厄介なフェロモンに当てられて心身がのぼせてしまっているだけだ。

ここで有粋と出会ったのがイリーナだったならば、色香に酩酊する程度では済まず喘ぎながら失神くらいまでは行っただろう。

やましいことは何も無いのに想像しただけで年齢制限がかかりそうな光景だ。

「朝の挨拶をしようと思ったただけなのに……私、どうしちゃったんだろう」

震える薄桃の唇に指を這わせて困惑する神崎さんの可憐な姿に、有粋は至極真面目な顔つきで答えた。

「そりゃあ風邪だな。アタシも昨日から熱が下がらねえんだ」

「風邪……それで花檜さん、マスクしているのね。さつきまで大丈夫だったのに、私も急にウイルス拾っちゃったのかな？」

熱っぽい息遣いのまま小首をかしげる神崎さん。

拾ったのはウイルスではなくフェロモンだが、そんな真実には彼女も有粋も気付かない。

発熱中はフェロモンが威力を増すという体質は昔からだだが、なにせ患った状態で少女と顔を合わせる機会が今まで無かったもので、まさか成人女性以外にも抜群の効果を発揮するようになっていたとは考えつかないようだ。

加えてこの遺伝フェロモン、年を重ねて容姿が親父に近づいていくごとに濃度も増してきている。

だから幼少期に発熱状態で少女と体面したことがあったとしても、その頃に発していたフェロモンと15歳になった今のフェロモンでは相手のリアクションが大いに違って参考にはならない可能性が高い。

そんなこんな理由で、まさか神崎さんの異変が自分のせいだとは露ほども思っていない有粋。

体調が悪そうなので手を差し伸べねばと、己の熱は棚に上げて神崎さんに近寄った。

「大丈夫かい？ この朝っぱらから本校舎に向かわず山登ってるってこたア、アタシと同じで教室に取りに行くモンがあるんだろ？ 言っ

てくれりやあアタシが取ってくるから、神崎の嬢ちゃんは保健室で休んでな」

「ほ、保健室まで歩けそうになくて……」

プルプルと小鹿のごとく足を震わせ赤面し続けている神崎さん。

初夜を迎える前の生娘ですらここまでの反応は中々しないだろう。

庇護欲をそそる挙措に漢心をくすぐられた有粋は、倦怠感と関節痛を訴える脳味噌からのストップコールを無視して神崎さんの体を抱き上げた。

効果音で表すならば、『ひよい』の三文字で片付く軽やかな動き。

突然のお姫様抱っこに、そして急接近してきた有粋の肉体から香る無臭のフェロモンに、神崎さんの脳髓はオーバーヒートを起こした。体中の血液に砂糖を加えて沸騰させたような、激しくて甘ったるくて、火傷しそうなほど熱い衝動が湧き上がってきて止まらない。

細胞が、遺伝子が、欲望が、雌としての本能が、目の前の相手を、花槍有粋を求めている。

——ああ、この人のモノになりたい。

「カルマも羽みてエなもんだが、神崎の嬢ちゃんはそれ以上だな。抱えてんのか抱えてねエのか迷っちゃうくらいに軽さだ。……嬢ちゃん？」

話しかけても反応のない神崎さんを不審に思い顔を覗き込めば、彼女はとろんとした眼差しを有粋に向けていて。

（——やっちまった）

ここでやっつと、有粋は神崎さんが自分のフェロモンに煽られていることに気付いた。

「花槍くん……素敵っ……」

いつの間にか呼び方も『花槍さん』から『花槍くん』に変わっているし、語尾が上ずってなんだか婀娜っぽい。

しなやかな動きで首筋へと神崎さんの細腕が回される。

女の理性を蕩かすそのフェロモンは、普段ならば有粋自身がある程度コントロールできる代物。

しかし体調不良の今はそれが上手くいかない。

焦りの滲む表情で有粋は口を開く。

マズい。このままでは一人のいたいけな少女に黒歴史を作ってしまう。

いや、黒というか桃色か？

「冷静になりな、神崎の嬢ちゃん。えっと……アレだ。アタシみてエなのに惚れたら火傷するぜ」

「是非したいわ……見るたびに花槍くんのが思い出せる跡が体に残るなんて、考えるだけで震えるくらい嬉しい……」

(ダメだ。完全にフェロモン酔いしちゃってらア)

キャラ崩壊もいいところだ。

いつもの清楚さはどこへやら、軽くアブノーマルな性癖まで獲得しそうになっている神崎さんの豹変した態度に、有粋は困り果てた形相を隠そうともしない。

神崎さんが教室に忘れた物が何だったかは分からないし、自分の忘れ物(筆箱)も回収できそうにないし、そもそもこんな状態の神崎さんを放っておける訳が無いし。

仕方がない。このまま登山するのは諦めて、さっさと本校舎の保健室に神崎さんを送り届けよう。

頬に神崎さんからのキスの雨を浴びながら、特に照れた様子も見せず下山を開始する有粋。

そんなものには慣れていると言わんばかりの態度は、杉野や岡村あたりを目撃されたら怨嗟の叫び声を上げられそうなほど堂に入って

いる。

というかもう、完全に『女10人くらい喰った直後です』レベルのどエロいオーラがダダ漏れしている上に、抱きかかえている神崎さんが有粋へとハートマークを飛ばしまくっているせいで、もう今からラブホテルにでも向かうようにしか見えない。

正気に返ったあとの神崎さんがどれだけの羞恥心を味わう羽目になるかと考えれば、関係者としての申し訳なさを感じずにはいられない有粋であった。



「いつそ死にたい……！」

自分と有粋以外は誰もいない保健室。

その片隅にあるベッドの上で、神崎さんは涙目でプルプルと肩を震わせながら泣きそうな声で呟いた。

登山半ばでフェロモンに当てられてから既に十分以上が経過している。

トロトロに蕩けきった理性は、有粋が物理的に5メートルほど距離をとったことも幸いして、だいぶ元に戻ってきたらしい。

だからこそマトモな思考能力も回復してしまい、こうして圧倒的な羞恥心に襲われているのだが。

ほっそりとした首筋から耳の先まで、白磁の肌を薄い紅色に染め上げている。

絶妙にブレンドされた羞恥と興奮の名残が齎す性的な紅色だ。

かすかな香水の様に神崎さんの体から立ち上る少女と雌の匂い。

ほんの一嗅ぎであらぬ妄想の囚われそうなそれが鼻腔に辿り付き、

改めて有粋は、この場に人がいなかったことに感謝した。

こんな場面を見られてしまつては「何も無かつた」と本当の証言をしても信じてもらえない。

「落ち着いたかい？ 神崎の嬢ちやん」

「うん……ごめんなさい、花槍さん。私つたらあんな変なコト……なんだか花槍さんが急に格好良く見えちゃつて」

「へエ、普段のアタシは格好良くねエつてのかい？」

「ううん、そういう意味じゃなくつて」

「冗談だ。それだけマトモな受け答えができるんなら、もう大丈夫だな」

マスクの下でふつと微笑む有粋に、神崎さんは赤みの残る両頬を押さえながら視線をうろつかせて「迷惑かけてごめんなさい」といじらしい謝罪の言葉を紡ぐ。

並の男子中学生ならこれだけで恋に落ちてしまいそうな可憐さだ。

「迷惑かけたのはアタシのほうさ。熱のせいでフェロモンの制御が効かなくなつちまつてるみたいでなア」

ふう、と溜息を吐く仕草が、マスク越しでも総毛立つほどの男の色香を感じさせる。

有粋は普段からやたらと女子（たまに性別を勘違いしたゲイとバイ）にモテる娘だったし、事実として神崎さんも有粋のことを「格好良い人だなあ」とこっさり乙女的な目で見ていた。

しかしここまで格好良く見えたのは今日が初めてで、少女漫画にありがちな『一目見た瞬間から心臓が鳴り止まない』状態に陥つたのもまた然り。

これが噂に聞く一目惚れなのかと己の性癖を勘ぐったりもしたが、なるほど、有粋がそういうフェロモンの持ち主だというのは話は別だ。

(……あんまり長時間見つめてると、またドキドキしちゃいそう)

神崎さんが気恥ずかしげに顔を逸らすのと同時に、保健室の扉がガラリと開いた。

「有粹ー。何で朝っぱらから本校舎の保健室なんていんの？」

鮮烈とも言える真朱の髪に着崩した制服姿。

学校の男子で五本の指に入る整った顔立ちに相変わらざるの飄々とした雰囲気を纏わせた少年は、E組のイタズラっ子代表こと赤羽業。ここにいる花槍有粹の親友だ。

「……あれ、神崎さんじゃん。おはよー。ずいぶん早起きなんだね」

ベッドに腰かける神崎さんの姿に一拍置いて気付き、ひらりと手を振る。

どうして遅刻魔の彼がこんな時間に学校に来ているのか、とか、どうして有粹がここにいると分かったのか、とか。

色々と疑問は湧いてきたが、それ以上に、自分に向けられる視線の中に潜んだ刺々しさに神崎さんは悪寒を走らせた。

怒気というほど激しくないし、殺気というほど危なくもない。

だがチクチクと肌を突き刺してくるような感情を密かに孕んだ目つきは、間違いなく神崎さんへの敵愾心を感じさせるもので。

(もしかして……私、カルマくんには嫉妬された?)

思い浮かんだ可能性はすんなりと腑に落ちた。

同時に今までちよつと怖い男子だと思っていたカルマが、なんだか可愛らしく見えてくる。

親友を取られたような気がして不機嫌になってしまったのだろう。

微笑ましい表情でニコニコとこちらを見てくる神崎さんに、カルマは『!?』なんて記号を頭上に浮かべるも、特に触れることなく有粋へと話しかけた。

E組のマドンナは意外と肝が座っている。

「マスクしてるってことは、結局熱下がらなかったワケ？ 珍しいね。40℃近い発熱でも次の日にはいつも根性で治してたのに」

「ああ、関節痛も嘔吐感もまだ残ってやがる。ひよっとしたら風邪じゃねエかもな。うつすと悪イから、マスク外してる時はあんまりアタシに寄らねエほうが良いぜ」

「それってしても感染する時はするもんでしょ？」

「一枚500円ぐれエのやつだし、まあ大丈夫じゃねエかな」

自他共に認める仲良しコンビの二人が揃ってしまえば、会話の中に神崎さんが踏み込む余地は無くなる。

それをカルマが意図してやっているのか、あるいは無自覚なのか。どちらにせよ独占欲にまみれたその行動に、神崎さんは先程までの己の行動を思い返してはほっと胸を撫で下ろすのだった。

（——良かった。花檜さんにお姫様抱っこして貰ってる時にカルマくんと鉢合わせなくて）

第十二話：中間テスト終了

「花槍有粋。お前がいたら本校舎の女子までハアハアしだしてテストにならん。一人だけ体育館でテスト受けてこい」

廊下でぼったり出くわした教師のそんな言葉と共に本校舎から放り出されて数時間。

ただっ広い体育館の中、生徒一人に先生一人でひたすら監視されながら黙々とテストを受け続ける苦行じみた時間もやっと終わりを迎えた。

国語と社会は余裕で全問正解と胸を張れる出来具合だが、他の教科は何故か難しく感じた。

というか、出題範囲には入っていないはずの内容がバンバン出てきた気がする。

それでも殺せんせーと親友の二人に教えて貰ったおかげで酷い点数にはならなかった。

最低でも450点は取れたと自負している。

(カルマなら最低でも480点は取ってるな。国語にあいつの埒外そうなのが一間混じってたから、たぶん満点は取っちゃいねエ)

冷静にテスト内容を分析しながらE組校舎への道を歩く。

有粋がカルマには解けないと判断したのは『非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権に勝たず、権は天に勝たぬ』という意味になる五字熟語を答えよ』という問題だ。

大人でも五字熟語の存在すら知らぬ者が多いというのに、その中でも日常会話でほとんど使われることのない言葉をわざわざチョイスした意地の悪い内容。

有粋は寸も悩まず『非理法権天』と正解を書き込んだが、あの問題はハッキリ言って、A組の連中だってそんなに丸を貰えていないので

はなかるうか。

中学一の成績を誇る万能型な生徒会長と、*“鋭利な詩人”*なんて呼ばれているらしい国語のスペシャリスト。

自分を除けば恐らくこの二人くらいしか持っていない知識だ。

(……：そっういや一時期、榊原にやアなんだかんだで因縁つけられて変な勝負したりもしたっけなア。恋の短歌で艶と雅を競うだとか、今まで女子に貰ったラブレターの数を比べるだとか)

E組に落ちて本校舎から離れて以来そんな勝負もしていないが、彼は未だにこちらのことをライバル的な目で見ていたりするのだろうか。

賢い癖に妙に抜けていて、ナルシストな割に冷静なところのある、端的に言えば変わり者。

自分が優秀なことを理解しているが、それゆえに*“自分の優秀さが及ばない相手”*のことも理解してしまっている。

そんな聡くも愚かな可愛い少年。

有粋は少なくとも彼のことが嫌いではなかったし、普通の中学校に通っていればそこそこの仲の良い悪友じみた関係にもなれただろう。

けれどもここは櫛ヶ丘中学校。

成績至上主義の風潮が蔓延る魔窟において、人間同士の相性というものには階級を超えるほどのものにはならない。

ゆえに有粋は、榊原蓮と決して友人にはならなかった。



「合計点数478点か。やっぱり苦手科目が足引つ張ってやがらア」

鳥間先生から直々に手渡された答案用紙と順位表を眺めつつ、有粋は保健室からこっそり拝借してきた熱さまシートを片手でピシヤリと額に貼る。

一応無断で持つてくるのも悪いと思い、簡単なメモ書きと一緒に百円玉を置いてきた。

既にみんな集まっている教室の中へ入らず校舎の外壁にもたれかかっている理由は、己が未だ濃厚なフェロモンを撒き散らすスプリングラーと化したままだからだ。

それがどれほど危険なものかは実体験済みの神崎さんがすっかり説明してくれたので、女子からも男子からも「頼むから距離をとってくれ」と釘を刺されてしまった。

ついでに神崎さん狙いの一部男子からは恨みがましい視線を送られたことをここに記載しておく。

あとカルマからもジト目を向けられた。親友を放って他の女子とイチャつくとは何事だと言いたいのだろう。あの子は意外と嫉妬深い。

「もう少し良い点数とれると思ったんだがなア。ひよつとしてテスト範囲、間違えて勉強しちまったか？」

根がお人好しな分、まずは周囲の策略よりも自分の非を疑うのが有粋の性分。

本校舎の教師陣が結託してテスト二日前に大幅な範囲修正を行い、それをE組にだけは知らせなかつたなどという真実は彼女の性格上思いもよらないものなのだ。

「ねー有粋。ちよつと答案用紙貸してくんない？」

教室の中からなんだか沈んだ空気が漂ってくるな、と考えていれば、窓からひよつこり顔を出したカルマがこちらに向かつて手を伸ば

してくる。

自分の答案用紙など何故必要なのかちつとも分からないが、親友が欲しがっているのだから有粋に断る理由など一つも無かった。

こいつが「頂戴」とねだるものなら何でもくれてやる。

「ほらよ。たぶんテメエに比べりや大した点数じゃねエが、構わねエか?」

「充分」

茶目っ気のあるウインクと共に答案用紙を受け取って、カルマは開け放した窓を放置したまま教室へと身を戻す。

さつきまでノイズみたいにぼんやりとしか聞き取れなかった教室の中の会話が、そのおかげで有粋の立ち位置からでもクリアに耳朵を打つようになった。

中を覗き込んではまだ目が合った女子を赤面させてしまうので、とりあえず手鏡を上手いこと使って間接的に中の様子を観察してみる。忍者にでもなったような気分だ。

「……先生の責任です。この学校の仕組みを甘く見すぎていたようです。……君たちに顔向けできません」

(何だ? どういう流れでこうなってんだ?)

やたらと神妙な雰囲気生徒たちに背を向けて語っている殺せんせー。

一連の流れを見ていない上に昨日は休みで事情を把握していない有粋にしてみれば、このシリアスな空気に至った理由が分からず首をかしげるばかり。

さらには鏡をちよいと動かしてクラスメイトの様子を探ろうとした瞬間、さつき答案用紙を持っていったばかりの親友が殺せんせーに向かってナイフを投擲しているのが見えてしまった。

「にゅやっ!？」

落ち込んでいるらしくても、今まで数々の暗殺をいなしてきた殺せんせーは流石の速度でそれを避けた。

黒板に当たって硬質な音を響かせる対殺せんせー用ナイフ。

座席からおもむろに立ち上がったカルマの顔には、常と変わらぬ飄々とした笑みが浮かんでいる。

「いいのー? 顔向けできなかつたら、俺が殺しに来んのも見えないよー?。」

わざとらしく語尾を伸ばした軽薄な口調。

カルマお得意の人を苛立たせるテクニクの一つだ。

案の定、殺せんせーもそれに煽られる。

「カルマくん! いま先生は落ち込んで——」

怒鳴ろうとするのを遮る形で、カルマの手から殺せんせーへと数枚の紙が投げられる。

咄嗟に掴んだそれに目を通せば、ただでさえ円形の目が更に丸められた。

納得のいくリアクションを見て、カルマはどこか自慢げな顔で腰に手を当てる。

「俺も有粋も、問題変わっても関係ないし」

散らばった紙はどうやらカルマと有粋の答案用紙らしい。

赤羽業、英語98、社会99、数学100、国語98、理科99、合計494点の学年4位。

花槍有粋、英語90、社会100、数学90、国語102、理科96、合計478点の学年12位。

どちらもE組とは思えない好成绩だ。

「うお……すげえ……」

「数学100点かよ。っていうか花槍の国語102点ってどういうことだ?」

「問題文の間違いを解答用紙の裏に記載してプラス2点入ってる」

「えーと、なにになに?」優子が敏郎に惚れた切欠を本文の語句を用いて十五文字以上三十字未満で答えよとの問題ですが、この「切欠」は「一部を欠けさせたもの」という意味の語句であり、正しくは「切っ掛け」です。混乱を招くほどの間違いではありませんが、以後お気を付けください」だって

「細けえ!　っていうかそれが間違いだって気付きもしなかった」

「凄いやけど詳しくすぎてちよっと引く!」

答案用紙を覗き込んでやいのやいのと騒ぎ立てるクラスメイトたち。

前原には褒めてるんだか貶してるんだか微妙な評価を頂き、有粋は一人こっそりと小さなシヨックを受けていた。

本気ではなく冗談とわかってはいるが、庇護対象として見ているクラスメイトの一人に「引く」と言われるのは意外と堪える。

「俺と有粋の成績に合わせてさ。アンタが余計な範囲まで教えたからだよ。だけど俺は、このクラス出る気なんて無いから。俺がいる以上は有粋も絶対ここに留まるし、第一、前のクラス戻るより暗殺してるほうが断然楽しいじゃん?」

ナチュラルに有粋の行動指針まで決められていたが、言う通りなので別段文句もない。

二人の仲が親密なことを理解しているクラスメイトも今さらつつこまなかつた。

「……で、そっちはどうすんの？ 全員50位に入んなかったって言い訳つけて、ここから尻尾巻いて逃げちゃうのオ？」

煽り文句を続けながら黒板付近に放置されていた自分のナイフを拾って、カルマは十八番の舌を突き出したムカつく顔を殺せんせーへとかます。

「それって結局さあ、殺されんのが怖いだけなんじゃないの？」

ピク、と殺せんせーの額に浮き上がる青筋。

カルマが煽りタイムに突入したことを察し、取り囲んでいたクラスメイトたちも我先にと野次を飛ばし始めた。

「なーんだ。殺せんせー怖かったのかー」

「それなら正直に言えば良かったのに」

「ねー。『怖いから逃げたい』って」

次第に増えていく血管マーク。

赤みを帯びていく肌色。

ついにはネガティブな感情を何糞の根性で吹き飛ばして、殺せんせーは怒りながらも堂々と宣言した。

「にゅやーッ!! 逃げるわけありません!! 期末テストであいつらに倍返しでリベンジです!!」

切り替えの早いその態度に、どこか安心したような溜息を吐き出す者や、堪えきれず笑いだす者など色々と現れ出す。

教室内の空気はすっかり元通りに明るくなっていった。

そして有粋も殺せんせーの話を聞いて、やっと今までの沈んだ空気の原因を理解する。

(なるほどなア。今回の中間テストで全員が50位以内に入らなきや先生がここからいなくなる予定だったが、本校舎の連中に何かしらの策略を仕掛けられてその対決が頓挫。ってどこか。カルマもメールで説明くらいしてくれりやア良いのによオ)

ま、そんなところも愛してるんだがな。

なんて心中で小さくのろけて、有粋は手鏡を静かに閉じる。

親友の好きなどころも嫌いなところも纏めて愛しているのが花槍有粋という女だ。

実際のところ、カルマが連絡をしなかったのは文章を打つのが面倒だったとかそういう怠惰な理由ではない。

下手にプレッシャーをかけて親友がストレスで体調を悪化させてしまわないように、なんて彼なりの配慮の仕方だったのだ。

お互い目に見えて仲の良い二人だが、目に見えないところでも充分に仲が良い。

その仲の良さが、思わぬところで仇となったりもするのだが——それはだいたい後の話だ。

第十三話：旅の準備と修羅場のフラグ

「有粋はもちろん俺と同じ班だよな？」

「何がだ？」

登校して早々にカルマから振られた話題。

それが何のことなのかイマイチ掴みきれず、首をひねるばかりの有粋に情報を補足してくれたのは、教室に入ってきたばかりの神崎さんだった。

「来週の修学旅行のことよ。班が決まったら、学級委員の片岡さんか磯貝くんに伝えるの」

「へエ、もうそんな時期かい。ならカルマと組むさ。良けりやア神崎の嬢ちゃんも一緒にどうだい？」

「だ、駄目だッ！ 神崎さんは俺が前から誘ってたんだからな！」

下心無しに神崎さんも誘った瞬間、ちよつと離れた場所で渚や茅野と駄弁っていた杉野から慌てた様子でストップコールがかかる。

「というか神崎さんとの間に両手を広げて物理的に割り込まれた。」

必死で毛を逆立ててグリズリーを威嚇する野良猫みたいなその剣幕に、失礼かもしれないが「こいつ可愛いな」なんて考えてしまう。

神崎さんへの青臭い好意が見え見えで、微笑ましいというか和ましいというか。

この少年の恋の成就を願うと同時に、ちよつぴりからかってやりたいたい気持ちにもさせられる。

「こういう所は多少なりとも親友に似てしまったようだ。」

「人間関係は早いモン勝ちじゃねエぜ、杉野。ましてや女ってやつア、惚れた男の最初の女より最後の女になりたがるもんだ」

「くっ……！ 何が言いたいのか分かんねーのにその顔で言ってるだ

けで格好良く聞こえるところがズルくてムカつく！」

「そりや適当なこと言ったからな。顔に關しちや親父譲りだ。悪イがやることも出来ん」

「欲しいとは言ってねーよ！ ああ、でも神崎さんって花槍みたいな顔が好きなのかなあ……」

最後の言葉は真正面にいる有粹くらいにしか聞こえない声量で呟かれた。

じつとこちらを、もつと細かく言うなら顔面を親の仇のような眼差いで眺めてくる杉野。

きつと先日フェロモン撒布マシンと化していた有粹に神崎さんがメロメロになってしまった一件を思い出し、警戒心やら羨ましい気持ちやらで複雑な心境なのだろう。

いま彼の脳内にある吹き出しは、『俺だって神崎さんに甘えられたいのに！ ズルい！』と『この危険な女たらしに先を越されてたまるか！ 神崎さんは俺の班に来るんだ！』の二つだけに違い無い。

恋は盲目という言葉は何も惚れた相手だけに当てはまるものではなく、今の杉野には有粹が女だとか別に神崎さんを狙っているわけじゃないとかは関係なかった。

とりあえず目の前で神崎さんとイチヤついて欲しくないから阻止しよう。

その衝動に突き動かされるまま彼は飛び出してきたのだ。

「だったらカルマくんも有粹くんも、同じ班にしない？ 僕と茅野と杉野と奥田さんと神崎さんで5人だから、2人が入ったら丁度7人班だし」

「ああ、確か人数の都合で一つだけ7人班になるんだっけ。オツケー。俺も有粹も問題ないよ」

渚が出した助け舟にカルマが嬉々として乗っかれば、杉野は「まあ、それなら……」と渋々ながら受け入れた。

素行不良のカルマが同じ班に来るのを歓迎していないのか、それとも神崎さんの時間が有粋に侵略されることを危惧しているのか。

どちらにせよ不安そうな杉野の懸念をかき消すかのように、有粋の肩に肘をついたカルマがニイと不敵に笑った。

相変わらず息をするようにボディタッチする二人である。

「神崎さん盗られるかもって心配してるなら、ぜんぜん問題ないよ。有粋は京都じゃ俺を甘やかすのに忙しくて他に色目使ってる暇なんて無い予定だし」

「色目なんざ普段から使っちゃいねエんだが……」

「はいダウト！ 花槍は女子と目が合った時点で色目使ってる判定になるんですー！」

「さすがに理不尽すぎやしねエかい？」

ぎゃーぎゃー騒ぐ親友コンビと杉野の会話は、うるさく聞こえるだけで実際のところ小声の応酬なので、神崎さんの耳にはギリギリ届いていない。

聖母のごとき微笑みを浮かべたまま頭上にハテナマークを浮かべる彼女は今日も今日とて美しく清らなり。

「まったく……3年生も始まったばかりのこの時期に、総決算の修学旅行とは片腹痛い。先生あまり気乗りしません」

賑やかな生徒たちを見渡して嘯く殺せんせーだが、そんな彼の背後には高々と積み上げられた巨大なリュックサックの山が出来上がっている。

頬も上気していて表情もどことなく楽しげだ。

「ウキウキじゃねーか!!」

「たかが修学旅行に荷物デカすぎー！」

「明らかに必要無いもの入ってるし！」

思わず突っ込んだ前原・矢田・岡野に罪は無い。

けん玉や『ふんわりロールケーキ』と書かれたお菓子などはともかく、リュックの隙間からこんにちはしている剥き出しのこんにやくなんて必要性が微塵も感じられない。

苦肉の策として、冷やしておけば炎天下で清涼剤代わりに使えるかもしれないが、そんなことするくらいなら大人しく氷嚢を持ち歩いたほうが効率的だ。

あと、やつぱり生臭いしベチヨベチヨするから例え氷嚢が無くたってこんにやくで体を冷やそうとは思わない。

苦し紛れに考えた用途が一瞬のうちに破棄された。

哀れなり、こんにやく。

「……バレましたか。先生正直、君達との旅行が楽しみでしようがないのです」

照れ笑いしながらモジモジする殺せんせーは、きつとこの教室の誰よりも京都への修学旅行を満喫する気で一杯だ。

かくいう有粋もこういう行事は結構楽しむタイプ。

特に京都は赤ん坊の頃から五花街を連れ回された馴染みのある場所だから、あからさまにテンションが上がったりこそしていないが、あの店に久しぶりに顔を出そうか、あの店の芸妓さんは元気になっているかなど思うところが沢山ある。

(そういうえば、今よりガキだった頃に京都でスゲエ美形の嬢ちゃんに惚れて貰えたっけなア)

唐突に脳裏をよぎる過去の懐かしい記憶。

日の沈み切らぬ夕方の時間帯。まばらに射す橙の日差し。伏見稲荷大社の千本鳥居。

この世のものではないかのような幻想の空気に包まれたその場所

で、玉藻前とはこんな容姿をしていたのかもしれないと思わせる麗姿をした子供は、別れ際、幼い有粋にこんな願いを言つてのけた。

——あてな。好きな人をモノにするより、好きな人にモノにされたいんよ。せやから待つて。うーくんが喉から手え出るほど欲しくなるような、とびきりのええ女になって、うーくんに貰われに行くから。

——約束してな。破つたら針千本……は飲まんでええけど、指切つてあてに頂戴。モノにされるんが叶わへんかったら、モノにするほうで我慢するわ。

——ほなら、また数年後。その時はあて、うーくんの『一番』になつてみせる。

当時はまだお互いに小学校低学年かそこらの年代だった。

本名も知らず、住所も知らず、「うーくん」「スズちゃん」と呼び合ひ、一日だけ共に過ごした謎の少女。

電話番号さえ聞いてこなかったのに、絶対に再会できると断言してのけた変わり者。

彼女は今も元気で暮らしているのだろうか。

(けど、いま再会しちまってもなア。アタシのモノは親友だけで手一杯。恋人も愛人も作る余裕なんざねエが、かといって友人で止まつて貰うにやあの嬢ちゃん性格は熱烈すぎた。このまま互いに綺麗な思い出で終わるのが一番良いんだが)

もしこの京都旅行で偶然再会してしまうようなことがあつたら——荒れるだろう、間違いなく。

有粋の『一番』かつ『最愛』であることを自負するカルマは、有粋に関することにはわりと嫉妬深い癩癪持ちだが、それでも普段はマシなほうなのだ。

ただ有粋に優しくされたり、有粋に好意を抱いているだけの相手になら可愛らしい嫉妬で済む。

しかしそれが有粋への本格的な恋愛感情を持つている相手……有

粹にとっての『一番』で『最愛』であることを望む者ならば、赤羽業から花槍有粹を奪おうとするならば。

(……まあ、会うと決まったわけでもねえんだ。気楽に構えるとするか)

かつてカルマの目の前で有粹に告白してきた少女達が、次の日からカルマを見た瞬間悲鳴を上げて逃げるようになっていた。

そんな小学生時代の懐かしい記憶を遠い目で思い出しつつ、有粹は現実逃避のような楽思考に落ち着くのだった。



「——うーくん。約束通り貰われに行くで。もし約束破って、あて以外を先にモノにしとったら……その時は」

とある日とある時とある場所。

ドレスのような衣装で華やかに着飾った一人の少年は、眼前の姿見に写した傾国の姫君を思わせる美貌をうっそりと歪ませ、手に持った写真に熱く口付けた。

細くすがめられた眼差しは夢魔のごとく艶かしい。

『スズちゃん』のおねだり、ちゃんと叶えたってな」

第十四話：京都に行くまでも修学旅行

京都で2泊3日の修学旅行。

普通であれば、龍安寺の石庭を眺めてみたり、宇治抹茶を使用したスイーツに舌鼓を打ったり、映画村ではめを外してみたり、清水寺の舞台から飛び降りる真似を試みたり、金を払って舞妓になりきってみたり、三十三間堂で自分によく似た仏様を探してみたり、生八つ橋を全種類味わって喉をカラカラにしてみたり、パワースポットを巡りすぎて逆に疲労したり、貴船の川床で優雅に涼んだり、錦市場でお土産探しに明け暮れてみたり、坂本龍馬のお墓参りをしてみたり、京都駅の空中回廊でひたすら写真をとってみたり、西陣織会館で十二単の着付けを体験してみたり、天橋立で股覗きを試みたり、鳴き砂を無駄にキュツキュと踏み歩いてみたり、あえてのイギリス村でヨーロピアンな気分にはまってみたり、よーじやで油取り紙を大量購入してみたり、とにかく観光と買物に忙しくその他のことにかまかっている時間がない。

なにせ日本屈指にして世界有数の観光地だ。

地元民や関西圏域の住人なら行き慣れているかもしれないが、梶ヶ丘中学校は東京にあり、そこに通う生徒たちもまた東京住まい。

当然、積極的に観光計画を立てて京都旅行を楽しみたいところなのだが……。

「修学旅行中でもやっぱり暗殺は休みなしかー」

「狙撃手が狙いやすい場所ってどんなだよ」

「もう京都タワーでよくね？ 高いし」

「窓ガラスあるからスナイプは無理だって」

鳥間からの説明を聞いた後、生徒たちは暗殺向けのコース選びのために京都の建物について調べたり自分の意見を公表したりと、個人差はあれど真面目に話し合いをしていた。

京都での暗殺が成功した場合、成功報酬の百億円は作戦への貢献度に応じて分配される。

国が既に狙撃のプロを配備済みということ、今回生徒たちに課せられた任務は凄腕スナイパーがターゲットを射殺しやすいロケーションやシチュエーションを探し、そこに殺せんせーをそれぞれの班の付き添いとして連れてくること。

「暗殺に適した観光スポットなら、祇園はどうかしら。一見さんお断りの店ばかりだから、奥に入ると人気も無いし」

「祇園ってエト、甲部と東のどっち側だい？ 甲部のほうなら親父が行きつけにしてる店があるぜ。暗殺ついでに飯喰うなら話通しとくが」

「無理無理無理！ 甲部と東の違いがよく分かんねーけど、祇園の店で昼飯とか緊張して喉詰まるって！」

「わ、私も遠慮したいです……」

「そう？ 意外と大丈夫だよ。食事の作法とか間違つてもいちいち指摘されたりはしないし、芸妓さんとの会話に困ってもいざとなれば有粋がフォロ口説いてくれるから」

「周りに侍らせた綺麗なお姉さんから花槍さんにハートマーク飛んでる光景が目には浮かぶねー」

「あはは……だね……」

有粋たちの班も軽口を交えつつ暗殺コース選びに勤しんでいる。

E組基準では至極平和なその光景を見て、窓辺にもたれかかり腕組みしたイリーナはフンと鼻を鳴らした。

「皆ガキねえ。世界中を飛び回った私には……旅行なんて今さらだわ」

やわらかい光に包まれた理想的なプラチナブロンドを一房払い、これまた素晴らしい花のかんばせを、どこか気取った冷淡な笑みで彩

る。

大人の女の色香と性悪さを等しく感じさせる挙措は、しかし生徒たちの神経を逆撫ですることはなかった。

「じゃあ留守番しててよビッチ先生」

「花壇に水やっといてー」

前原と矢田の見事なまでに鮮やかな適当対応。

そのまま目さえ合わせずこちらのことをスルーして修学旅行二日目の予定を和気藹々と楽しそうに話し合うものだから、イリーナは呆気にとられた表情を見せたあと、寂しさと恥ずかしさと苛立ちがこんがらがった気持ちを抑えきれずに頬を真っ赤にしながらデリンジャーを引き抜いた。

「何よ！ 私抜きで楽しそうな話してるんじゃないわよ!!」

「あーもー!! 行きたいのか行きたくないのかどっちなんだよ!!」

どうやら「えー、ビッチ先生がいなかったら寂しいなー」「ふん、仕方ないわね。そうまで言うなら行ってあげるわよ」みたいなやり取りがお望みだったらしく、アテが外れた彼女は拗ねてしまっていた。

こういうところは成人女性といえど子供っぽくて可愛らしい。

容姿は20代半ばから後半くらいに見えるイリーナだが、性格だけで推測すると、案外もつと若いのもかもしれない。

何はともあれこのまま放っておくといじけてしまいそうなので、有粋はイリーナの機嫌を回復させるべく意識的に色男オーラを振り撒きつつ口を開いた。

「薔薇ってやつはどこに咲いてようと綺麗だが、背景でその印象も随分変わるたア思わねエかい?」

「何だよ唐突に」

首をかしげる前原に、有粋は椅子の上で長い足を組んで続ける。

「教室で見るイリーナさんの美しさと、京都で見るイリーナさんの美しさは別物だ。せっかく稀少なもんを愛でる機会に恵まれたつてエのに、むざむざ放り捨てんのア惜しいだろ」

「有粋……！」

男でもぞくりとするくらい艶っぽい流し目をイリーナに寄越せば、感極まった彼女は恍惚の顔色で指を組んで嬉しそうに声を震わせた。

他の生徒にドライな態度で落とされたあと、女たらしモードの有粋に熱っぽく上げられる。まさにアメとムチ。

「有粋ー!!」

マタタビを与えられたネコみたいにふにゃんふにゃんに蕩けきった笑顔になって、イリーナは有粋へと抱きつこうとする。

そんなイリーナの足元にカルマが靴先を突き出して引っかからせるのも、この教室ではわりと見慣れた光景だ。

転びそうになるイリーナ、咄嗟に立ち上がって抱きとめる有粋。接触阻止が無意味に終わったことを悟り舌打ちするカルマ。

これもわりとよくある光景。

「ああんっ……有粋い……」

「ハア……イリーナさん、今わざと引っかかったろ」

「有粋、それ分かっててビッチ先生のこと助けたわけ？ このムツツリスケベ」

「拗ねんなつてカルマ。体に触りたかったわけじゃアねエよ」

「あら、有粋ならいくらでも触ってくれて構わないのよ？」

「そいつアまたの機会に、な」

よろけて乱れたイリーナの金髪を丁寧な手つきで軽く整え、その中

の一束にちゆつと音を立ててキスを落とすあと、ゼロ距離でのフェロモンに当てられて腰砕けてしまったイリーナを近くの椅子に座らせる。

あまりにも自然な、流れるような動きと慣れた態度に、スケコマシで有名な前原も「やるなー」と感嘆の声を隠せない。

神崎さんに至っては、イリーナの様子で先日の自分の痴態を思い出してしまつたらしく顔を真っ赤に染めていた。

それを見て何かを察した杉野がまたしても悔しげな眼差しで有粋を睨めつける。

ポルノ映画と青春映画の登場人物が混ざり合つてわちゃわちゃしているような雰囲気だ。

どちらがどちら側のメンバーかは推して測るべし。



修学旅行当日。

東京駅にそれぞれ現地集合を果たしたE組の生徒たちは、ここまで来て存在する差別に苦々しい気持ちでこちつた。

「うわ……A組からD組まではグリーン車だけ」

「E組だけ普通車。いつもの感じね」

新幹線に乗り込んでいく他クラスの面々を眺める菅谷と中村。

なんとなく気が重くなってしまふのは、カバンの中に入っている殺せんせーお手製の百科事典みたいに分厚い旅のしおりのせいだけではない。

いや、そのせいというのも二割くらいはあるかもしれないが。

「うちの学校はそういう校則だからな。入学時に説明したろう」

「学費の用途は成績優秀者に優先される」

「おやおや。君たちからは貧乏の香りがしてくるねエ」

D組教師の大野と、それぞれ『ニキビデブ』『メガネノツポ』なんて愉快な名前でセットとして認識されていることの多いD組生徒二人が、嫌味つたらしい口調で新幹線への乗車ざま悪意の羅列を残してゆく。

サンバイザーをかぶったりサングラスをかけたりと、今から南国にでも旅立つような装いだが、行き先は全員もれなく京都だ。

むしろ現地に到着したら悪目立ちすることになりそうだが、修学旅行でテンションが上がりすぎて気付けないのか。

「……大野の野郎、相変わらず嫌な目つきしてやがるぜ」

有粋にしては珍しい、あからさまな敵愾心の吐露。

愛しの親友カルマの信頼を意図的に裏切り、飄々としているように見えて意外と繊細な精神を傷付けた男。

そんな相手に対しては、さすがの彼女も友好的な態度は崩れるらしい。

ちなみに隣のカルマは至極どうでもよさそうだ。

大野のことなどもう吹っ切れて記憶の端っこからも消去したのだろうか。

「ごめんあそばせ」

そんな二人とD組連中の間を、一人の華麗な美女が通り抜けた。

「ごきげんよう、生徒たち」

道行く人々の視線を一身に浴びながら、彼女は歩いてくる。

滴り落ちるようにガラスの天井から差し込む陽光を黄金に照り返して眩いばかりのプラチナブロンド。

雄を惑わせる色香を自然と振りまく豊満な肢体。

ブラウスの胸のボタンがあいているのは、わざとではなく閉められないからだろう。

網タイツに包まれた肉感的な太ももや、大胆に開いた胸元から覗く大きな乳房も、瑞々しく張りに富んだ純白の肌も、すべてがプリミティブな魅惑を隠そうともせずには滲ませていた。

長身を飾る見事なプロポーションといい、月華を思わせる金の髪といい、幼さに通ずる魅力があるのが美少女とすれば、あまりにも『女』を強調した魅力の美女そのものが彼女だ。

——なんて長つたらしい描写をしたところで、その美女はE組生徒たちにしてみれば見慣れた相手で。

「ビッチ先生。なんだよそのハリウッドセレブみたいな格好」

「フッフッフ。女を駆使する暗殺者としては当然の心得よ」

ドン引きの形相で尋ねる木村正義に、絢爛たる登場をしたセクシー美女ことイリーナは瞳を覆っていたサングラスを外し妖艶に笑う。

小顔効果のあるバタフライ型のそれを胸の谷間にひっかける姿に、周囲の男共から生唾を飲み込む音が聞こえた。

「狙っている暗殺対象にバカンスに誘われることって結構あるの。ダサイ格好で幻滅させたら折角のチャンスを逃しかねない。良い女は旅ファッションにこそ気を遣うのよ」

全身有名な海外ブランドで固めたイリーナが胸を張って語るのと同時、額に青筋を浮かべた烏間が苦言を呈する。

「目立ちすぎだ。着替えろ。どう見ても引率の先生の格好じゃない」

「硬いコト言ってるんじゃないわよカラスマ!! ガキ共に大人の旅の……」

「――脱げ。着替えろ」
「……………」

あまりにもドスのきいた凶悪な声と表情に、暗殺者といえど恐れをなしたようだ。

無言でビクついて大人しく寝巻きのジャージをカバンから取り出すイリーナ。

そんな二人のやりとりを見て、カルマが唐突に呟く。

「ビッチ先生、もっとえげつないデザイン寝巻き持ってきて有粋に夜這いでも仕掛けると思ってたただけだなあ。意外と普通のもつままないや」

「透けたベビードールとか、サテンのネグリジエとかか？」

「へー……この流れで具体例出すってことは、そういうのが好みなんだ」

「……親父の情婦イロがよく着てるってだけだ、そんなニヤついた顔で見てるじゃねエよ。アタシにエロい格好した女を視姦する趣味なんざねエぞ」

「ふうん。でも、有粋と親父さんって結構食事の好みとか似てるよね。案外そういう好みも似てるんじゃない？」

「もしそうなら、今頃アタシは親父と殴り合いの喧嘩でテメエの親友の座を競うはめになっちまってらア」

「……………あはは。そっか」

返事はそつけないながらも嬉しそうにはにかむカルマ。

実の父親と血みどろの争いを繰り広げてでも自分はお前の親友の座に固執したことだろう、と真正面から切って言われたようなものなのだ。

頬がゆるまない訳が無かった。

愛しい相手への独占欲が強い者は、愛しい相手から独占欲を向けられることをも好む。

それが恋情ではなく友情であれども。



駅の女子トイレで着替えたイリーナを連れて新幹線に乗り込んだE組一同。

もう数分も前に運転手が出発させているのに、殺せんせーの姿が見えないことに気付きあたりを見回す。

「うわっ!!」

窓にベツタリと貼り付いた探し人を見つけて絶叫する渚。

冷や汗だか粘液だかわからないものでガラスと密着した殺せんせーは、あろうことか新幹線の内ではなく外側にいた。

「何で窓に貼り付いてんだよ殺せんせー!!」

「いやあ……駅中スイーツを買ってたら乗り遅れまして。次の駅までこの状態で一緒に行きます」

普通に叫んだだけでは流石に会話が成り立たないと判断。

携帯電話越しのやりとりが騒がしいことを考えれば、E組だけグリーン車ではなく普通車の一つを貸切というこの状況はかえってラッキーだ。

今だけは差別に感謝しよう。

自身の肌色を保護色にして次の駅までなんとか怪しまれずに済ん

だ殺せんせー。

それから新幹線の中では、彼の近くで見れば人ではないとバレバレの変装を少しでもマシに見せるべく、菅谷が持ち前の美術的な才能と技術を駆使して精巧な付け鼻を作ったりしてくれていた。

こういうクラスメイトの意外な一面が見られるのも修学旅行の楽しみだ。

これからの旅の出来事次第で、もっと色々な生徒たちの予想だにしない一面が見られるかもしれない。

「ね。みんなの飲み物買ってくるけど、なに飲みたい？」

「あ、私も行きます」

「私も！」

「嬢ちゃんたちだけに使えばしりませんのも忍びねエ。アタシも行くさ」

班で固まっつてのトランプ遊びの合間、神崎がそう切り出したのを切っ掛けに奥田と茅野と有粋が席を立つ。

杉野はついてきたそうにしていたが、メンバーが女だけだったので何だか行っつてはいけなない気がしてどうしようか迷っつているうちに置いていかれた。

そんな杉野の肩に渚が苦笑いで手を添えている。頑張れ、杉野。ちなみにカルマは寝ている。

「……神崎の嬢ちゃん。奥田の嬢ちゃん。茅野の嬢ちゃん。アタシの後ろに隠れてな」

「？ 花槍さん？」

車両販売のあるほうを目指して歩き始めてからすぐ、有粋がごく小さな声で連れの女子生徒たちに警告を漏らす。

どこか鋭い色を帯びたその眼差しの先には、ガラが悪いと東京でも有名な男子校の制服を着た何人もの高校生たちがいた。

髪を染めていたりオールバックだったり目がロンパっていたり、大口開けてギャハハハなんて笑い声を上げながら下品な内容でトークしていたり、あきらかに関わり合いにならないほうが良い部類。

神崎は見ての通りの真珠のような美少女で、奥田も磨けば光る原石みたいな少女だし、茅野はキャンデイリングじみた幼い可愛らしさがある。

三人で歩けば間違いなくあの連中は良い獲物を見つけたと悪質な絡みを超越してくることだろう。

そう考えて、有粋はわざと前に出たのだが――。

「ぎゃっ」

大股広げて眠っていた他の乗客の足に引つかかって、神崎が有粋の背後からよろけ出してしまう。

拍子にオールバックの男の腕にぶつかって、彼の持っていた缶入りのコーラが地面にこぼれた。

「あ、ごめんなさいー」

咄嗟に謝罪する神崎だったが、有粋が一瞥で非行者と見なすような連中がそれで許してくれようはずもない。

「ああ？」とドスの効いた声と共に視線を下げたあと、そこにいるのが清楚な美少女と知って一気にニヤつく。

どんなことを考えているのか嫌でもわかる下卑た笑みだ。

「おいおい、人の靴にコーラひっかけといて『ごめんなさい』で済ませる気かよ？」

「誠意が足りないんじゃないかねーのお？」

「え、えつと……」

眉を下げ、困った表情で財布を取り出そうとする神崎。

弁償を迫られていると考えたようだ。
けれどもそれは勘違い。

オールバックの男は神崎のか細い腕を掴もうと手を伸ばす。

「金じゃなくて、コッチのほうで払ってくれよ」

しかしその指が神崎の体に触れることはなかった。

割って入った有粋が、男の手首を掴んでひねり上げたからだ。

「いってえ！ テメエ何しやがる!!」

「何しやがる、ってのはこっちの台詞だ」

吠える男を睨めつける琥珀の瞳には確かな牽制の色があった。

年下の男（と相手は思っている）から発せられる予想外の気迫にたじろぐオールバック野郎。

自分の中に湧き上がった恐怖を悟られまいと乱暴に手を振り払って後ろに下がった彼は、己を鼓舞するように口端を引き上げながら有粋に食ってかかった。

「おいおい坊や。先にぶつかってきたのはそっちの女だぜ？ 弁償迫って何が悪いんだよ」

「それについてちやこっちに非があるが、金で払おうとしたのを遮ったのはアンタだろ」

「こっちは体で払って欲しいんだよ！ それとも何か？ その嬢ちゃんへの代わりにテメエが払ってくれんのか!？」

「……いいぜ。先に手エ出したのはアンタでも、手エ着けたのは俺だからな。詫びの菓子折り代わりだ。一発ぶん殴る権利くらいくれてやらア」

慌てることなく言い放ち、有粋は「さっさと殴れ」とばかりに大人しく腕を組んで男の前に仁王立ちする。

その様子に恐れも気負いも感じられない。

お前に殴られるくらい大したことないと、口にするまでもなく全身で主張しているような落ち着きっぷりだ。

冷静すぎる態度に戸惑ったのはむしろ男達のほう。

それでも八つ当たりの口実を得たとばかりにニヤつきを取り戻した男たちは、有粋の肩を引つ掴んで自分たちのほうに引き寄せながら粗雑な態度を崩さない。

「肝っ玉の据わった色男だ。ここじゃ目立つ。ついて来な」

「は、花槍さん……」

男達に連れて行かれる有粋を見て、神崎が悲鳴のような声を上げる。

そんな彼女を安心させるような気軽さで、振り返らぬまま有粋はひらりと手を振った。

第十五話：命短し恋せよ乙女（？）

背中に鈍い衝撃が走った。

壁に突き飛ばされた程度で大したダメージにもならないが、ぶつかった音はさも痛そうに響き、男子便所の中という狭い部屋で有粹と不良たち以外の耳を打つことなく静かに消えていく。

動揺一つ見せずここまでついて来た有粹の豪胆さが面白くないらしい不良たちは、彼女（不良たちは『彼』と認識している）のシャツの襟首を力任せに引っ掴んで気管を締め上げながら、息のかかる距離まで顔を寄せてメンチを切った。

「随分ふてぶてしい態度じゃねえか。テメエ、本当に一発で済むと思ってるのかあ？」

「一発で済ませなきゃ、痛い目見んのアそつちだぜ。二発目以降は権利をくれてやった覚えがねエからな」

それでも微動だにしない有粹の表情筋。

纏う空気にも恐れ of 気配は感じられず、どころか、忠告じみた真似までされてしまった。

ぴく、と不良の額に血管が浮かび上がる。

彼は不良という人種のご多分に漏れず煽り耐性がそこまで無い。

「上等だゴラー！ その女にモテそうないかしたツラ、倍に腫れ上がるまでぶん殴ってやる!!」

ちよつと僻みも混じった言葉をツバと一緒に吐き出して、型も何もあったものではない素人丸出しの、しかし喧嘩には慣れているのだから容赦ない大振りのパンチを有粹の右頬に浴びせる。

脳震盪が起るほどの威力ではないが、顎が外れぬよう軽く食いしばった歯が口の中でぶつかって切れるくらいのダメージは発生した。

ペツと口内に溜まった血を便器へ吐き捨てて、ワイルドに手の甲で唇を拭いながら男を見上げる。

その眼差しの鋭さに怯えたことを悟られまい、と不良は第二撃のため拳を再び振り上げた。

「権利」の与えられていない一発を喰らわせようと。

「ハア——忠告はしたぜ、兄ちゃん」

低い囁きが耳をかすめた次の瞬間。

気付けば不良の体は宙を舞い、男子便所の扉をぶち開けて通路の壁に激突していた。

遅れて襲い来る腹部に鉄球でもめり込んだような痛みと内臓へのダメージ。

折れた骨が肺に刺さって酸素が漏れているような呼吸のしづらさ。不良が勝手にそう感じているだけで、もちろん有粋は男のアバラを砕いてしまいそうな一撃など放っていない。

100の攻撃力があるからといって常に100で攻撃する必要は皆無。

相手を怖気づかせて退いてもらいたいだけなら、骨折まで行かずに吹き飛ばして敗北感を植え付けるだけでよし。

要するにかなり手加減した攻撃力5くらいの膝蹴りを不良の土手っ腹に叩き込んだのだ。

それでも有粋の脚力はアスリートを踏破してトップアスリートの領域に突入しているから、それこそパラメーター的には『ちよつとか弱いゴリラ』とか『やや儂めのクマ』みたいなもの。

多少のお情けをかけたところでぬるい攻撃になったりしない。

「げぼっ……んの、クソガキイ……ツツ!!」

ボタボタと床にヨダレを垂れこぼし、腹を押さえて苦悶に呻いて、しかし不良は立ち上がろうとする。

けれどもムエタイ選手級のキックを喰らった直後なのだから、根性と気力だけではどうにもならない。

一瞬間足に力を込めただけであっさりと崩れ落ち再び床に突っ伏した仲間に、茫然と自体の進行を見ていただけの他の不良連中もやっとな正気を取り戻した。

「デメエ、よくもリュウちゃんをー」

「ただじゃおかねえ!!」

殺気立って口々に罵倒を飛ばしながらも、先程有粋が見せた一撃――正確には見えないほど早かった一撃がよほど堪えたらしく、誰一人として襲いかかってくる気配は感じない。

ついでにこの騒ぎに左右の車両の乗客たちが気付き始めたようで、車掌を呼ぶか迷っている風な会話が聞こえてきた。

ここいらでこのゴタを収めなければ他の乗客に迷惑がかかる。

何より、体感できる新幹線の速度が数秒前から徐々に落ちているのだ。

つまりそれは、次の駅に到着しかかっているということ。

自由席やら指定席やらを求めて行き交う新たな乗客が確実にこの男子便所前を通過するはず。

それまでにこの不良連中を暴力で鎮圧するのは可能だが、それ以外で鎮静するのは難しそうだ。

(仕方がねエ。野郎相手じゃ、親父ほど上手くはできねエだろうが)

手段は選んでられない。

有粋は己のフェロモンを脳内でコントロールして上昇させ、同時に、常から男性的な色香と共に纏っている凄味の量も増幅させた。

生まれた時から備わっているものは知識がなくとも感覚で多少の操作が利く。

動かし方を教わらずとも赤ん坊が手足を動かし泣き声を上げるよ

うに。

そして有粋のフェロモンと凄味は父親譲り。

母の胎内で人の形を得る前から、遺伝子の基礎が出来上がった時点で貰っていたような二つなのだ。

万全ならずとも十全程度に駆使するのに差し支えはない。

「イイ子だから静かにしてな、お嬢ちゃんたち——言うこと聞いてくれりゃア後で可愛がってやる」

流し目と腰にクる甘ったるいハスキーボイスも完備した、光源氏もかくやの、淫蕩妖艶としか形容しようもないすこぶるつきの色男オーラを撒き散らしながら不良たちに視線を巡らせる有粋。

唇に人差指を当ててうつつすら微笑む仕草も、まるでそういう映画のワンシーンみたく様になりすぎていた。

男子便所の真ん前というシチュエーションをハーレムの玉座に塗り替える官能的で威圧的な誘惑。

『イイ女を惚れさせるフェロモン』と『男が雄として負けを認めざるを得ない凄味』。

これらは単体ではなく今回のように複合して使うと、どのような複雑怪奇な途中経過を辿ったかは知らぬが、最終的には『男に女としてのドキドキを感じさせる』という結果に落ち着く。

憶測でしかないが、おそらく、雄として負けを認める↓雄としての自身を失う↓抑えられていた雌の部分がフェロモンに煽られる&雄の部分が弱っていて押しつけやすかったという理由で表面上に露出してくる↓興奮状態の乙女の気分で有粋にドキドキを感じてしまう“とかそういう感じだと思う。

ざっくり言えば野郎を精神的に一時メス化させた上でこちらに恋慕させ欲情させる花槍家歴代男性陣（十有粋）お得意の小ワザ。

なお、最初に凄味でビビらない、まさしく“本物の雄”と呼べる強い男には効かなかつたりする。

「う……あぁっ……」

「はいい……静かにしますう……」

「一夜の過ちでいいから抱かれてえ……」

「声だけで孕みそう……」

ガタイの良い男子高校生どもがトロトロに蕩けきったメス顔で半分悶絶しながら恍惚の表情で倒れていくという、ある意味グロテスクで嬉しくないR指定のかかりそうな光景が瞬く間に展開されてゆく。有粋にとっては慣れたものだが、駆けつけてくるいくつかの足音の持ち主たちにはどうだろうか。

スライド式の扉が慌ただしく開き、焦った少年の声が耳を打つ。

「花槍ッ！ 不良たちに連れて行かれたって聞いたけど、大丈夫……か……?」

爽やかさと柔らかさを併せ持つ優美な顔立ちにギャグ漫画めいた『!?』の表情を浮かべ、引き戸に手をかけたまま固まる少年の名は磯貝悠馬。

その後ろには神崎や杉野を始めとした幾人かの男子女子がいて、全員磯貝とまるつきり揃いのリアクションをしている。

ヤバそうだったら突入する予定だったのか、少し後ろで控えるようにして立っていた烏間も、生徒たちよりは平静を保っているがだいぶ驚愕と困惑の入り混じった形相だ。

ただ一人。

これと似た光景を幾度となく目撃したことのあるカルマだけが、事情を察したのか腹を抱えて大笑いしている。

わりとメチャクチャな状況だ。

「……ほら、早く自分の席に帰んな。聞き分けの良い子は好きだぜ」

周囲が戸惑い隠しきれぬといった空気を醸し出す中、有粋は事情説

明より先にさつきと不良たちを追っ払うべく、一番近い位置でへたりこんでいた不良の一人の頬をするりと撫であげる。

その指先に触れられれば無機物さえも喘ぎ声を上げそうな妖しい手つきであった。

なんだか見てはいけないものを見てしまったようなキワドい気分
に陥って、E組の純情な女子何人かは落ち着かない様子で視線を右往
左往させている。

前原は何故か「負けた!」という表情で悔しげに歯ぎしりしていた。
同じ女たらしとしてライバル意識的なものがあつたのかもしれない。

「ふあい……………」

「戻りましゅう……………」

「ふへへへへ……………」

ほとんどラリったみたいな状態で、壁にぶつかって気絶している奴
もさりげに回収しつつ不良たちが去っていく。

恋する乙女みたいに頬を染めて語尾にハートマークをつけながら
ふらつく強面の集団は、下手なゾンビ映画よりおぞましいものだっ
た。

烏間ですらあまりのキモさに微妙に引いているというのに、この事
態を引き起こした当の本人はちつとも堪えていない。

人間の慣れとは恐ろしいものだ。

「……………どうしてこうなったんだろうな」

「こつちが聞きてえよ!?!」

壁にもたれかかりアンニュイな目で言い放つ有粋に全力でツッコ
ミを入れる杉野。

他の生徒たちも勢いよく頷く。

カルマは相変わらずひーひー大笑いしていて、どうにもこうにも収
集がつかない。

そして軽く混沌の坩堝と化した新幹線の中に、新たな役者が投下される。

「——12星座運勢ランキング、本日の第1位は牡牛座」

停車した新幹線。

開いた扉。

出入りする無数の人々に紛れて有粋たちの傍にやって来た、豪華なゴシックロリータ姿の華やかなシルエツト。

車内にも関わらずフリルで溢れかえった日傘をクルクル両手で回している。

「総合運は5点満点。ずっと見つからなかった探し物がついに見つかるかも。灯台元暗し。離れた場所よりも身近な所で幸運は転がっているでしょう」

春の野に遊ぶお姫様の声をしたその人影は、不可思議な言葉を紡ぎながら目的の相手へと近寄っていく。

後方にいた前原がそれに気づき、物珍しいファッションに思わず目を凝らしたその瞬間。

「っ——!!」

人影の正体が、超をいくつつ付けても足りないほどの美少女だと気付いた彼は思わず息を呑んだ。

ただの美少女ならば、筋金入りの女たらしな上にナンパ癖もあつてモテモテの前原は腐るほど見慣れている。

けれどもその美少女は、ただの美少女ではなかったのだ。

それは例えるならば、天から授かった工具を使って、最高峰の技術者が素材にもこだわり一から造り上げた美しい人形細工のような容

姿。

単純に黒と呼ぶにはあまりにも濃すぎる闇色をした長髪は毛先がふくらはぎまで伸び、そこだけくるんと内側にカールしている。

俗に姫カットと呼ばれる前髪の揃った髪型は別段稀有なものでもないが、彼女ほど似合っている人物ともなれば世界に五人もいないのではないか。

シミ一つない純白の肌は聖夜に降る雪と等しい。

ワインに砕いた薔薇の花びらを混ぜ合わせたような真紅の双眸はややキツネ目がちで、そこがまた、聖に在らざる魔性の魅力を感じさせる。

花びらが開くように上下にふわりと広がったまつ毛といい、咲き誇るカサブランカのような華やかな香りといい、過剰なまでに可憐な花草の数々といい、喋るたびに口元で光の粒子が弾ける薔薇色の唇といい。

アイドルやハリウッド女優どころか、天使や妖精だってこの少女の造形には適わないだろう。

ついでに右目の下の泣きボクロが色つぼくて前原好みである。

(でも、なんか……スツゲエ美少女なんだけど……同時にスツゲエ悪女つぼくもあるな……)

対面経験はないが、楊貴妃や玉藻前といった「絶世の美女かつ悪女」の条件を満たす過去の女傑たちは、この少女と多少なりとも似通った顔立ちをしていたのではないか。

そんなことを考えてしまうほど、少女の雰囲気は傾国めいていた。

「——スズちゃん？」

「久しぶりやね、うーくん。やっと会えた」

ロミオに恋焦がれるジュリエットよりも熱い眼差しで有粧を見つめて、『スズちゃん』と呼ばれた少女はさも幸福そうにドレスの裾を翻

す。

大きなリボンが爪先を彩る厚底のストラップシューズで床を蹴つて、固まるクラスメイトたちを尻目に、彼女は飛び込むような勢いで有粋の体へと抱きついた。

有粋は驚愕しながらも自然な動作でそれを受け止める。

あの少女と有粋は知り合いなのか。

同じ年くらいの少女が何故平日のこの時間帯にあんな格好で一人で新幹線に乗っているのか。

そもそも屋根も壁もある場所で何故日傘をさしているのか。

色々と指摘したい部分はあるが、誰しもがあまりの急展開についていけず置いてけぼりにされている。

そんな面子を落ち着かせる気が、どうやら神様にはないらしい。

有粋の背中にシルクのグローブで覆われた手を回した少女は、天国にいたってこんなに幸せそうな表情は浮かべられないと確信できる。蕩けきった満面の笑みを浮かべたまま、有粋の唇に素早く己の唇を重ね合わせた。

(キ、キ、キ、キ——キスだー!!)

背景にズギヤーンなんて効果音を背負って再び驚愕の表情を浮かべるE組生徒たち。

関係のない他の乗客たちも野次馬根性丸出しで盗み見ていたが、そんなものは些事だとばかりに少女は熱烈なキスをやめようとしな。

「んっ、あふ……」

甘ったるいソプラノボイスが吐息と共に唇からこぼれる。

仕掛けているのは少女のほうだというのに、舌を絡めるディーブなキスで喘いでいるのも少女のほうだった。

有粋は未だ呆気にとられているようで目を見張ったままだが、いつもの癖で無意識に対応してしまって、テクニク差で少女だけが喘ぐ

結果になったのだろう。

物心つく前から父親の情婦たちに戯れという名のキスの嵐や夜這い紛いのスキンシップを計られてきた有粋は、クロスキスだろうとバインドキスだろうとイリーナに負けないほど上手い。

「あんっ……」

名残惜しげな声と共に、首の角度を変えてもつと深くまで有粋の口内を舐め回そうとしていた少女の体が優しく突き放される。

やっと平静を取り戻した有粋が肩を押して物理的な距離をとったからだ。

二人の舌を繋げるように引いていた赤交じりの透明な糸がぷつりと途切れる。

唾液がうつつすらと紅がかって見えるのは、有粋が口の中を切っている故。

「うふふ。うーくんの血、あての体の中に入ってしまった」

ほとんどサキユバスか発情期のメスネコみたいな表情で、頬に手を当て体をくねらせながらセクシャルに囁く。

中学生の脳味噌にはもはや許容量オーバーだというのに、少女の進撃はまだまだ止まらない。

「あっ……どないしよ、勃ったかもしらへん。ドレス越しやし抜かんでもバレへんよね？」

フリルとレースで幾重にも膨らんだスカートの下で、内腿同士をこすり合わせてモジモジと気恥かしげに振舞ってみせる少女。

いや、てつきり少女だと思ひ込んでいたが——どこからどう見ても少女としか考えられないビジュアルのだが——それでも今の発言から察するに、このゴスロリっ子は「彼女」でなく「彼」と形容すべ

きらしい。

「勃った」だの「抜く」だののアウト発言よりもそつちがインパクト勝ちしてしまった。

前原のトキメキもまた、一分とたたないうちに碎け散ったことになる。

「……は、え？ 勃った？ ちいと待ってくれ。スズちゃん、ガキの頃も女の子の格好してたよな？ え？ 男？ え？」

どうやら有粋も初めて知った事実のようだ。

珍しくアホみたいに混乱している彼女の様子を、少女改め女装少年はニコニコ愛しげに眺めている。

次々と襲い来る衝撃の波に吞まれて誰も声を発することができない。

そういう場面で第一声を上げるのは、もちろんこの少年の役目だ。

「……有粋、そいつだあれ？」

瞳孔ガン開きの恐怖しか感じない笑顔で首をかしげるのは赤羽業。

さつきまで笑い袋と化していたくせに、目の前で謎の少年と親友がイチャつき始めてからというもの、殺気とも冷気ともつかぬ雰囲気纏って周囲を震えさせている。

「……うーくん、あの子うーくんの何？」

尋常ならざるカルマの形相から、彼と有粋との関係がただの同級生ではないと見抜いたスズもまた怖気の走る笑みでカルマを見やる。

交わされた視線の間で冷たい火花が散っていた。

「えっと、カルマ。こっちはスズちゃんって言って小学生の頃に京都で会った子だ。この子はアタシの「うーくんの恋人モになる予定の者や

よ」

説明途中で言葉を被せられる。

しかも火に油を注ぐような内容であった。

ドヤ顔で挑発されたカルマは嫌いな食べ物を味わっている最中みたいな表情で「へえ」と低く呟く。

「……で、えっと、スズちゃん。こっちは赤羽業。幼稚園から中学まで同じ所に通ってるアタシの「有粋の親友モト」に既モトになってる男だよ」

そしてお返しとばかりにこちらにも有粋の発言に意味深な内容を被せた。

前髪で隠れたスズの額に青筋の浮かび上がる音が聞こえる。

交錯する視線の刺々しさは、イバラどころか有刺鉄線だ。

真ん中を通ったら間違いなくズタズタに引き裂かれる。

カルマはスズのことを、スズはカルマのことを、値踏みするような遠慮容赦のない眼差しで互いに睨め付け合って、ほぼ同じタイミングで舌打ちを鳴らす。

それが試合開始のゴングの代わりだった。